

# 川柳塔

平成七年九月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷八二〇号



日川協加盟

No. 820

同人特集・私の句

九月号

# 第1回 川柳塔まつり

## <平成7年度同人総会>

と き 10月1日(日) 午前10時から

ところ 大阪市立労働会館(アピオ大阪)  
(交通便 JR・地下鉄森之宮から徒歩5分)

議 事 平成6年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告  
平成7年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

## <各賞表彰・記念句会>

と き 10月1日(日) 午後1時から

ところ 大阪市立労働会館(アピオ大阪)  
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞  
一路賞・各地柳壇賞授賞

句 会 表彰式にひきつづいて開催

兼 題 「姿」 川柳塔社副主幹 小 出 智 子 選  
「明るい」 川柳塔わかやま吟社 牛 尾 緑 良 選  
「昇る」 川柳塔きやらぼく 林 荒 介 選  
「会う」 川柳塔唐津支部 仁 部 四 郎 選  
「結ぶ」 川柳塔まつえ吟社 恒 松 町 紅 選  
「祭り」 川柳塔社主幹 橘 高 薫 風 選

◎各題2句 出句締切午後2時

会 費 1000円(各題三才に主幹色紙を贈呈)

## <前夜祭(懇親宴)>

と き 9月30日(土) 午後6時から

ところ なにわ会館<大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12>  
(交通便 近鉄上本町駅・地下鉄谷町9丁目駅から徒歩8分)

会 費 5000円 宿 泊 なにわ会館

◎懇親宴および宿泊は、人数に制限がありますので  
9月22日(金)までに氏名を明記して川柳塔社事務  
所へハガキまたは電話でお申し込みください。

主 催 川 柳 塔 社

# 川柳塔まつり

橘高 薫風

西尾栗先生のご葬儀が五月十七日に営まれ、追悼句会は七月二十三日に開催されました。その間、あつと言つ間でした。

葬儀も句会も、当方の予想を大幅に上回るご参席者で、故人の遺徳の大きさを改めて知らされました。と同時に、先生の薫陶を受けた川柳塔の仲間の和やかさも再認識出来たのではないかと思つています。栗先生亡きあと、私は、この和の精神を一層推進したいと願つています。

それは、今までは川柳塔本社と各地の川柳グループとの交流は、適宜スムーズ

に持たれていて、意志の疎通に事欠かなかったのですが、地方と地方との交流は今一つという感があつたように思います。先ずはこれを改めたいのです。

川柳塔まつり開催の大きな目的の一つは、このところにあります。八月号でのあらましを、九月号には更に詳細を発表いたしました。今までの二賞発表句会を六賞表彰句会に一括集中させたのです。路郎賞、川柳塔賞だけでなく、渺湖賞、茴香の花賞、一路賞、各地柳壇賞をも併せ表彰し、総会と記念句会を持つことにしました。就中、前日に懇親会を催し、地方柳人相互の交歓の実を挙げられるよう、また、総会での地方からの活発なご意見、ご要望を開陳して頂けるよう企画を改更しました。

麻生路郎先生ご在世当時の不朽洞会員

であつた工藤甲吉、本田恵二朗、月原宵明三氏の相談役就任の内諾もすでに得て、体制を整え、各地の川柳塔所属グループを数ブロックに分け、毎年交互に選者を送つて頂くシステムも確立決定しています。

九月三十日(土)、十月一日(日)にわたる第一回川柳塔まつりに、華やかに和やかにご参加頂きたくお願い申します。

栗追悼句会の席上でご遺族から拝受しました過分の基金も、川柳塔社の発展、地方交流への効果的な運用を計つていきますのでご期待下さい。

来世紀を目指す川柳塔社は、地方の時代、一人人すべて平等の精神をモットーに前進いたしたく思います。

同人・誌友各位のご理解とご支援を切にお願い致します。



座右の句

秋風に傷なきものはなかりけり

(薰風)

私の句

天へ向き希望が背伸びする菫

佐治 千加子

# 川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 川柳塔まつり	橋高 薰風	……	(1)
恐山信仰	波多野五楽庵	……	(2)
川柳塔(同人吟)	橋高 薰風 選	……	(4)
自選集	橋高 薰風	……	(44)
大空のころろ (56)	東野 大八	……	(48)
川柳の群像 小川静観堂	橋高 薰風	……	(43)
■古川柳 柳籠裏二篇研究(二十七丁)	西田柳宏子 選	……	(58)
〈同人特集〉「私の句」(1)	奥田みつ子	……	(52)
水煙抄	大橋 政良	……	(85)
秀句鑑賞 「同人吟」	小出智子 選	……	(82)
水煙抄			
沙湖抄			

## 恐山信仰

波多野五楽庵

青森県の最北端下北半島に日本の三大霊場の一つと言われる恐山がある。霊場は慈覚大師の開創によるとの伝説があるが、恐山信仰は地藏信仰である。その一つは抜苦与楽の現世利益であり、いま一つは地藏経による賽の河原の地藏信仰で亡くなった人の魂はここに集まり、地藏様に守ってもらえるのだと言う。特に七月二十日から始まる大祭が恐山の看板で、県内は勿論、東北・北海道から参拝者が集まり、最近では観光の要素も加わって、全国から参拝者が訪れるようになった。

大祭には県内のイタコが集まり、地藏堂の周りで仏おろしの口寄せをしてくる。硫黄の匂がたちこめる霊場は、あたかも地獄の様子を見せ、荒涼とした中に石地藏や石積み的小山、硫黄や水蒸気の噴気が一層異様な光景を展開させ、口寄せの舞台効果を高めてくれる。生きる者はその哀しみのあまり、もう一度その声を聞かせたまえとイタコの口寄せに涙を流す。

カルデラ底には、宇曽利湖が蒼々と水をたたえ、あまりにも酸性度が強いので住む魚も

茴香の花

八木千代選

(86)

「雨」

有働芳仙選

(88)

一路集「若い」

小林一夫選

(88)

「仕立てる」

羽津川公乃選

(89)

初歩教室「力」

吉岡美房

(90)

路郎賞・川柳塔賞中間発表（最終回）

田中正坊

(92)

■川柳こぼれ話「川柳とおもしろ」

西尾 栞先生追悼句会

(95)

各地柳壇（佳句地十選／永田俊子）

各地柳壇

(102)

八月本社句会

柳界展望

(114)

九月各地句会案内

柳界展望

(118)

■編集後記

柳界展望

(119)

柳界展望

柳界展望

(120)

■編集後記

柳界展望

(120)

座右の句

情熱の冷めないうちに船に乗る

（智 子）

私の句

かなぐり捨てて翺べよ理性の紙風船

山口新子

ない。以前、東野大八さんをご案内してこの湖に立った思い出がある。冬も間近な恐山には人影もなく、風の強い寒い日の事であった。大八さんが敬虔なお祈りをしていただいたお姿が目

に浮かんで来る。

川柳塔みちのく五周年のこと、三才に入賞した方へ選者の色紙を差し上げるべくお願いし、私も稚拙な字でようよう書き上げた。私の題は「かけだし」、入賞句は、

かけだしの鳥もやはりカーと鳴く 美与子

かけだしの抱負は野火の美しさ 俊平

かけだしが右むけ右で走り出し 栞

なんと三枚の色紙のうち二枚は、ご来県下された栞先生ご夫妻に差し上げるはめになつてしまった。あの先生に稚拙な句と字が渡ると思うと、まことに汗顔の極みである。ご辞退下さればいいのに、奥様も先生も顔中笑顔にされて持ってゆかれてしまった。後にも先にも弟子が先生に色紙を差し上げるなんて聞いたこともない。顔から火の出る思いとはこのことである。しかし、その時の私の句は

恐山のちの風が来て遊ぶ

であった。この次に恐山にお参りした時に、きつと先生のご温顔にお逢い出来るかもしれない。そんな気がしてこの文を書いているのである。

きつと先生のご温顔にお逢い出来るかもしれない。そんな気がしてこの文を書いているのである。



橘 高 薫 風 選

松原市 小池 しげお

富山市 舟 渡 杏 花

いつか閉じるまなこ曇らせてはならぬ

厭離穢土あなた迎えてくれますか

半眼の仏陀と向き合うひもすがら

北の窓開けて媚売る日もあつて

花道から遠く外れた平泳ぎ

まんだら華のなかで悪女の深呼吸

鳥取市 武 田 帆 雀

ラストボール今の君なら三振だ

ご出世をしなさり逢って下さらぬ

沢庵の切れにも痾り残してる

不安だからもう一結びしておこう

父ちゃんはお仕事 生母知らない子

菊の世話 済んで太陽昇り切る

年上の妻と鰯を食べている

総会へタバコを吸いに行っただけ

咳をして他人の家の裏通る

無礼講 薩摩隼人の酒の量

男手で育てた躰なら許す

ユニークな弔詞親族驚かせ

豊中市 滝 北 博 史

夏椿 視られていると散りません

去年ほど琵琶湖へ行かぬおじいさん

注意しろ玉手箱にも変なガス

日本に戦争ほどの大事件

乙姫が太郎の嫁になって幕

古希の妻メガネを変えて投票所

鳥取県 新家 完司

五十二歳いよいよ蝸に似てきたり

蛸壺を出るときズボンをはきかえる

浮世から離れ真昼の理髪店

被災地を歩いたときの靴の傷

医者の方に坊さんが来る寸劇よ

帰らねばならぬ家あり午前二時

弘前市 肥後 和香子

病人に一礼マスクメロンさま

おい息子 黒ビールのこく足りないゾ

スピードのキングと並んでカウター

一回で桃むけたほどの幸つづく

照れるけどましてや男からの花

たこキムチにビールといかぬ相手らしい

竹原市 小島 蘭 幸

五百羅漢のひとつに髭を置いてみる

わがままな猫と暮らしてやすらぎぬ

誰もいない体重計に乗ってみる

おとうさんがいれるとうまい珈琲だ

雨が上がると野良猫が子を産んでいた

鐘も太鼓もいらぬ静かにNOMOを見る

広島県 藤 解 静 風

ヒロシマの川おんおんと八月忌(原爆犠牲者に捧ぐ)

半世紀祈りつづける川がある

残像の紫いまま眼裏に

折鶴は祈るがごとく跪く

あの朝も夾竹桃が咲いていた

ピカドンも忘れたように二人古い

米子市 林 瑞 枝

飄々と生きたやさしい風羅漢

引き出しの死角にしがみつくと昨日

青い蛙よお前は神の宝石か

擬餌針に青い背広の子がかかり

ははと言う重石今でも曳いている

仏飯に雀は科白白おいてゆき

西条市 片上 明 水

迷い子の話 一つも嘘がなし

インターホンきれいな声に騙される

茄子漬に白い小皿が性に合う

スランプの薬になった回り道

きらりつと光る涙は嬉しい日

病室の花 看病が行届き

倉敷市 田 辺 灸 六

白無垢の笑顔に戻る金婚譜

笑い飛ばした苦しみも悲しみも

我武者羅に生きた軌跡の卵焼き

紫陽花は彩を無口のまま変える  
七夕の願い777で足り  
邪教にも走る世間を知らない子

鳥取県 鈴木公弘

逆転のチャンスを狙う雨季長し  
風呂敷を被って翔んだ話する  
受け皿が浅くて余生こぼされる  
とりあえず私を殺すのも仕事  
葬列の長さを信じてはならぬ  
居酒屋のコップに折れた花を挿す

寝屋川市 柴田英壬子

明治生まれの気骨パーカー手放さず  
佳い夢に揺れる日もある浮草よ  
ため息の唄「ひとの気も知らないで」  
多情仏心バラの香も菊の香も  
大和三山しどろもどろの身へ静か  
お月さま娘が嫁ぎます衣被ぎ

島根県 松本文子

はっきりと明るいああなたの居る所  
少年の時から石を放さなかつたひと  
病院の長い一日 長い雨  
反省会と言つては酒を飲んでいる  
東西南北 人は溢れて哀しかり  
遠くまで来たなと思う蟬しぐれ

豊中市 田中正坊  
スー・チーの笑顔明るし梅雨明けの  
年金でなんとか食っているいのち  
風知草 言つてはならぬことがある  
山頭火なんと勝手な放浪記

反戦の旗掲げるべし彬の忌(九月十四日)

豊中市 安藤寿美子

立ちすくむ愚母を支えてくれる手よ  
リュック一つととう一人の旅になる  
女学生のわたしに出会う駭々堂  
薬屋でもらつたサンプルでなおる  
雨が降る今日は家計簿支出ゼロ

和歌山市 西山幸

朝粥を押し戴いて今日にする  
ひとり芝居に似合う隈取り描きあげて  
人生を蓄えている雑記帳  
理想論終わりビールも泡になる  
合掌やこころは遠くなるばかり

鳥取市 小谷美ツ千

友達が集中治療室にいる  
助けてください私朝まで祈ります  
私を呼ぶ真夜中の闇の声  
さまようているのだから瞳を開けぬ  
病室に真っ赤なばらを届けよう

香川県 池内 かおり

男だな時どきへソを曲げている  
おいでまいホテルが乱舞しよるんで  
コンビニとカラオケが建つ町はずれ  
実印を使った事も無くて妻  
カルシウム カルシウムとて色が無い

今治市 野村 京子

愛ひとつ貰つてのびる豆のつる  
びっくり箱になりそなつたカップメン  
かごめの輪いまライバルがまうしろだ  
傷口を洗うに海は広すぎる  
酔っている影へピエロがついてくる

弘前市 佐治 千加子

濃霧警報 赤くにじんで立つポスト  
気取つても気取らなくても霧のロンドン  
鳴き砂を泣かせて一歩また一歩  
一行の詩をなげうって森を出る  
縄文土偶 乳首小さく点じたる

島根県 堀江 芳子

いまさらに傘の大きさ温かさ  
よく効くという温泉で疲れて来  
いと易く返事してから考える  
心読むようにまたたく星とい  
穴道湖の夕日やっぱり美しい

米子市 林 荒介

貸し借りがあつて仲間のままでいる  
犬の目に昨日と違う今日がある  
スイッチオンそれでも父は動かない  
明日の日を期待している窓の蜘蛛  
夜景点滅してこめかみを濡らす

米子市 青戸 田鶴

老人も馬耳東風でおられない  
さりげない問いにはつきり返事する  
もち時間みるみる減つてゆく暮し  
脳軟化の方が楽かと思う日も  
座右に置く史好句集の温かさ

鳥取県 土橋 螢

最善を尽くして青い空を見る  
今日もまた待ったがかかる命かな  
肉体の女の夏も去つてゆく  
光らなくなった蛍とおんなじか  
爽やかに父が笑つた母が笑つた

和歌山市 福井 桂香

平和叫ぶ鳩がだんだん黒くなり  
戦火はげし 宇宙で米・ロ ドッキング  
あなたには常識わたしに非常識  
腹八分では負けになる椀子そば  
注目的で終れるはずがない

枚方市 海老池 洋

形状記憶が脱会できぬオウムの徒  
ひと息をついて見ている夏の虹  
森の中めだちたい樹のやはりある  
「気をつけ」で迎えてくれる杉並木  
輪から去る象振り返り振り返り

五所川原市 斉藤 嘉

先生の二階で火花見に行こう  
一輪車漕ぐ両の手は翼です  
掛け声は空をも担ぐ金魚売り  
座敷わらしと昔っこ聞く遠野  
一粒の飯にうなずく亡母の味

弘前市 高瀬 霜 石

有為転変 最後は妻の家に住む  
抜かれても抜いても守るマイペース  
まだ死ねぬ老母を見送るまで死ねぬ  
努力した人は努力を語らない  
サウナ風呂呂みな金持ちに見えてくる

弘前市 一戸 ツネ

曼陀羅を風で切り裂く抽象画  
百貫の石を抱いてる被告席  
なみだ壺 抱いてくれます地藏さま  
愛と愚痴こまめに巻いた糸車  
裏切りの影がブツリと街の角

弘前市 蒔苗 果林

ぐっすりと眠れた夜の大懐  
泥の田に裸足で稲の主張聞く  
露の中 人でござるといふ笑顔  
榭手を紫陽花の散る音と聞き  
通じない方言につこり笑み貰う

静岡県 蘭田 獏 杏

夏至暮れる南へ伸びる影法師  
梅雨晴に五臓六腑へ深呼吸  
パチンコで負けても男 肩の幅  
無流派で紫陽花どっさり活けておく  
賽銭箱へ五百円玉派手な音

岡山県 矢内 寿恵子

八月忌めぐる戦の後遺症  
さよならの数だけ星が増えてくる  
ああ余生 遊び心のあれやこれ  
八月の雲せめぎ合うレクイエム  
やさしさがほしくて両の手を合わす

竹原市 岩本 笑子

夏来るたび金魚になりたい夫である  
土曜日 行かぬ子思う遠花火  
ゆで卵好きな次男でおしやべりで  
車椅子少しがんこに箸使う  
栄枯盛衰 竹にも花が咲いている

戦友捨てて泣いたお山に星が降る  
広島県 田村新造

広漠千里 興安嶺の深い闇

逃げる身に赤い夕陽が目にしみる

飢えに泣き三月精根尽き果てる

脱走で別れ匪賊で出合う戦友

柳井市 弘津柳慶

豆まいたが鬼はそのまま住みついで

青春を振り返って見ればさざげつつ

老妻とゆつくり歩幅合わしとき

新婚を見送りの輪のニギヤカサ

頑張れと尻叩かれて立ち上がり

下関市 石川侃流洞

目薬へアーンと大きく口あけて

頭上注意 今年も忘れず来た燕

千客万来いい客だけがほしい猫

お役所も同じ意見だが規則

猪口よりもコップが似合う毒舌家

美祿市 安平次 弘道

母さんの驕り私を自慢する

値踏みなどしない彼氏のプレゼント

一張羅の帯が娘に結べない

バリウムを飲んでどっこい生きている

臆病な父に許せぬ過去があり

父の日に切手を貼らぬ贈り物  
松江市 柳楽鶴丸

喜んでばかりはおれぬ深呼吸

夫婦喧嘩ゲームのようにしています

「性の美学」を夫婦で読んでます

リゾットと言っておじやを食わされる

出雲市 伊藤寿美

杏咲くその名をつける嬰が生まれ

過疎に生き亡夫の跡継ぐ郵便婦

受話器から孫の歌 桃が流れつく

一夜だけ咲き散る沙羅に満たされる

ヒマワリの黄色を拒む昼の月

島根県 佐々木鳳笙

貸し借りのない仲で乾す大ジョッキ

女だけのたむろへひよいとふかし芋

竹馬の友も遂には俺を置いて逝く

死期迫る閉じた臉を閉じたまま

黒子までついでに浴びているライト

米子市 政岡日枝子

過去未来 今はおいしいコップ酒

波の狭間で魚は人を翻弄す

損をせぬ位置で頬笑みだけ返す

同じ血が流れ同じ岐路に佇つ

沙羅双樹 多くを語らない夫婦

米子市 木村 富美子

目をとじる亡母が話しに来てくれる  
つなぎ目が何度もほどけそうになる  
大きさを知らず大屋根とび出した  
どしや降りは父がかばった傘の下  
生きている 此の今があるこれでない

米子市 新 正子

ふところはどうかと息子から父へ  
美しい子猫が先にもらわれる  
わたくしが捨てると夫がすぐ拾う  
色メガネかけるとみんな匂い出す  
孫が来てネズミ花火になる私

鳥取県 江原 とみお

川柳と言う綾取りのおもしろし  
諸行無常それでも花は咲いている  
牛は静かにベーターベンをきいていた  
高い山みていた麦を踏んでいた  
自転車が錆びついている河川敷

鳥取県 土橋 睦子

ふるさとは大きな声で戸を開ける  
いい知恵はなくとも歳をとってゆく  
漁火が星と重なる日本海  
この岩は売却済とかいてある  
あの日から若葉の艶が濃くなる

今治市 矢野 佳雲

どんな思い出を孫は私に持つだろうか  
スランプか盤に動かぬ歩が一つ  
物足らぬ線香花火で恙ない  
嘘でない証拠の嘘を考える  
門限に遅れるうちのシンデレラ

高知市 小澤 幸泉

病床のやみに晨あしたの光入る  
辞世句をまた消して書く夜の病床  
われも又 ヤコブの梯子かけ登る  
激動の世間にひとり杖で立ち  
愛妻のいびき恋しや夜の病床

北九州市 梅田 宣司

燃えている女の勤は確かだな  
同窓会紳士が一人居てしらせ  
三角定規で丸を書いているのは俺だ  
生き残ってから五十年経ちました  
信仰をあつめローカル混む日なり

和歌山市 垂井 千寿子

追憶よ人を許して美しい  
衣替え私も蟬も外が好き  
化粧落としてからのピールは本物だ  
本心は消して幸せごっこする  
ブランドで揃え揃わぬ軽い脳

和歌山市 牛尾 緑 良

瘦身も良し荒波をすり抜ける

年老いてみな語り部になりたがる

やじ馬のひとりになって午後終る

負け犬の影はやっぱり頼りない

重いもの母の心と新生児

和歌山市 山口 三千子

歳月が愛憎劇を浄化さす

それからは夢を追わないカタツムリ

阿吽の呼吸で渡る丸木橋

息抜きをしたいと思う影法師

ピリオドを打とう信号赤になる

和歌山市 木本 朱 夏

更衣おとこをひとり脱ぎ捨てる

住いおとこ見つけ愉しい二三日

感情線もつれてしろき花憎む

女ひとり絵にしてくれる京は雨

品定めされつつ廓すり抜ける

和歌山市 田中 輝 子

炸裂音うしないしもの我がこころ

痛いほど人の気持の判る鬱

揺さぶりすぎた樹からポロポロ出る本音

山坂が向き合うごとにきつくなる

平常心になるまで伏せておく頁

和歌山市 細川 稚 代

梅千しの自然色から夏に入る

悪人にされているから気が楽だ

狂わない時計で何かものたりぬ

事後承諾 母は黙々編む手毬

亡母の背で聞いた天満の子守唄

和歌山市 宮口 克 子

愛しくて両手で揉んだ君の頬

悪友が揃うと何かおきそうだ

夏山の墓標に友の缶ビール

忘れると楽で人生悲しいネ

明暗を越えて静かに着いた場所

和歌山市 池永 正 雄

箸先の刺身のつまを忘れまい

晴耕雨読そして曇りはゴロ寝かい

行水のぜいたくなのが露天風呂

灯台の灯へ近づくか離れるか

入門のまままで積んでる入門書

和歌山市 桜井 千 秀

真夏日へ倦怠弛緩出口なし

すみやかに態度を決めて舐められる

お稲荷さんにそつと告げとくいけず口

じわじわと根回し敵もさる者だ

呵呵大笑 演技はさりげなくやろう

奈良市 天正千栢

幾日も余韻がさめぬ霧ヶ峰  
資格とりすぎ鎧が重すぎる

やみつきは盗み酒がはじまりで  
嫁ぐ娘のお酌の味は覚えてる  
底光りしてる男に会いとうて

京都市 都倉求芽

その昔 太陽は不意に欠けていた  
肩の力抜いてしずかに左折する  
雨がさで続いて雨読ともゆかず

表面張力 地球人口六十億  
高齢化 街にも大地にもしのび寄る

尼崎市 田中薫

夢無限と言うひとあり 花火は胸にひらく  
わが胸の日毎に瘦せて桜桃忌  
にんげんの救われ難く鐘を吊る  
気まぐれな陽炎追うて奈良坂あたり

出合わねばかくまで水の濁らざりしを

伊丹市 山崎君子

恋文を天国へ書く仏の日  
夕顔の花待ちながら浴衣縫う  
雨あがりつぼみ見つめる老母ひとり

同窓会上席になる寂しさよ  
村まつり年に一度の従姉妹会

西宮市 秋元てる

郭公の来て鳴き母の忌が終る  
信じられるものが生きてる仏間の灯  
桐の花 父母に背いて未だ嫁かず

二時間に一本のバス合歓の花  
古里は速くも闇に汽笛泣く

西宮市 西口いわゑ

神様の時計のままのいのちなり  
散歩には程よき地なり仮住い  
モナリザは下手な落語を聞いている  
解体へすこし哀しいクレーン車

振り向けば覚束なくも二人なり

大阪市 上田柳影

地震計 神経質が治らない  
燕また軒にかえって力湧く  
見えずいたお世辞 都会の上げ底か  
清貧に甘んじ子等にうとまれる

夏草や大震災の傷の跡

大阪市 榊本落児

女房にラブレターでも書いてみよ  
アヤメ科の花に記憶をためされる  
鼻の啼く夜は妻を抱いて寝る

ホームレスなかには解脱した顔も  
一輪の薔薇が凶器になることも

大阪市 井上白峰

虚と実の狭間で喘ぐ雑魚の群

背伸びして座った椅子が高すぎる

鏡拭く自分の過去を消す如く

窓際の椅子で眺めた昼の月

自分史の誇張に妻が朱を入れる

大阪市 渡部さと美

湯上がりのビールの他に欲がなし

女泣いて話して元氣とり戻し

メダカではないぞ赤黒鯉の子だ

久びさに逢うて優しい人やさし

コーヒーにするコーヒーの句を読んで

堺市 桑原道夫

中年やこころの底の甲虫

シーソーの君の笑顔の眩しかり

木洩れ日や女子校生の口の髭

青年を泳がせているハイヒール

蟬の音携え来たるセールスマン

堺市 近藤豊子

風の手に拾われてゆくシャボン玉

ゴッドファーザー敵も味方もてのひらに

年寄りの味方の顔で立候補

ローカル線 会釈をされて会釈する  
おとなりのハミングきこえる住心地

豊中市 吉田あずき

スピードを落とすと涙こぼれそう

ビー玉の青を涙にしないよう

砂山の夢の絵がある裏表紙

病院を出ると生きてるものばかり

帰省する子へ家中の夏仕度

高槻市 川島諷云児

この年齢で禁酒禁煙してみても

信念が少し崩れてきた余生

苦は楽の種と信じていた迂闊

欲の皮 重くて山が登れない  
喜んでくれる嘘ならつきましよう

藤井寺市 吉岡美房

侍を捨てても男捨てられず

迷ったら明るい方へ舵をとる

あせらずに流れて川は太くなる

切っ先のただ一点が逃げられず

受け売りのニュースで粗大ごみ同士

守口市 結城君子

枇杷の実を勘定してる歯科の窓

わが声の欠点もろに聞くテープ

浅漬に主婦の根性失せていず

わたくしの魅力は抜けているところ

ばあちゃんの初恋 不思議そうに聞く

守口市 森川まさお

富士やさし花いちもんめポビー咲く

裾野村 小川がみごと滝になり

霽れてきて一直線の峠道

忍野村 柄杓で湧水飲ます茶屋

サティアンは消えろ富士には似合わない

寝屋川市 江口 度

雨もまた嬉し臭わぬ裏のどぶ

籠ひいて釣銭くれる店で買う

働くのみ解けぬローンに耐える汗

運賃値上げきつい暴力だと思ふ

忘れ物とりに帰れば妻いない

交野市 福崎しげお

核実験 地球にひびを入れないで

核の無い国の迫力無い意見

どちらから見ても玉虫美しい

両眼を開き天狗になる達磨

年金に残業はなし二人扶持

八尾市 宮西弥生

すこしずつやさしい父のサロンバス

喪があけて星空はつきり見えてくる

思い出の花に埋もれている渴き

安全地帯で物言わずになつてくる

梅漬ける八十歳の燃える日

岸和田市 田中文時

詫び入れる奴に相槌打ち過ぎる

お願いと脅しの文句ゴミ置場

題目の数より寄進が物言う

山肌を見せてふる里 死んでゆく

半年で十年分の事故事件

大阪市 清水利武

何処にでもあるよな妻のニュールック

梅干と辣韭 夏を乗り切る気

震災の傷癒えぬまま秋がくる

宿題を山程ためて夏終り

夏天満 次は岸和田秋まつり

大阪市 河井庸佑

口達者知って説得策を練る

施して報い願わぬゆとり持つ

口数が多くて墓穴掘っただけ

冷静になればすんなり解けた謎

事勿れ主義で過した悔い残る

大阪市 西出楓楽

夫病む絆の撚りをきつくする

六十坂の夫へ背押し手を引いて

点滴をしばし忘れる名古屋場所

夫病む神の牽制球当る

病室の夜にまといつく負の思考

大阪市 神夏磯 典子

繭の中ひととき主婦を忘れたい  
まだ親の意見を聞いてくれている  
同じ服モデルが着ると何故違う  
雨つづく今日も小さな虫殺す  
私より記憶力よいうちの犬

大阪市 本間 満津子

老化と言う曲者憎しファイト湧く  
たくさんの私が私と同居する  
どん底の体験も有り目がやさし  
心ふれ合う 余韻しばらく無口なり  
やさしい風になつて風鈴訪ねよう

大阪市 町田 達子

多弁なり花それぞれに光浴び(三室戸)  
撞く人の煩 引きずるか鐘の音が  
言葉尻しっかり個性匂わせる  
カルト性に惹かれた人のその後ふと  
震災跡まだ生々し海開き(須磨)

大阪市 板東 倫子

ふるさとでみんな優しく老いていた  
リハビリの指にも爪の化粧する  
菖蒲見に行つてサボテン買わされる  
平成七年七月七日 喜寿の宴  
日本の気骨で野茂は投げている

大阪市 稲本 凡子

税務署に取られる金をまだ稼ぎ  
あれもリモコンこれもリモコン私呆けられぬ  
苦勞した母の優しい笑い皺  
子の事になると全くあかんたれ  
過去切れば明日に向かう風にあう

大阪市 大塚 節子

京の寺町 組紐 数珠や すきやきや  
お帰りに忘れんようにお寄りやす  
今年是小ぶり隣の枇杷がもう落ちた  
見切り発車さあ自分との闘いだ  
さあ一歩 心を決めて踏み出そう

大阪市 津守 柳伸

摂理とは哀しきものよ巨木墜つ  
酪農もコントロールの牛の群れ  
ご馳走は森林浴と露天風呂  
新盆へ心ひとつになる身内  
開発の墓地お供物は持ち帰る

大阪市 松尾 柳右子

グラウンドの球児 夕日を駆け抜ける  
それぞれの腕に金の輪 水晶玉  
山歩きブームのリユック役に立ち  
ストレスは孫の電話の舌足らず  
家族して無言電話へ意見多々

大阪市 川端 一步

恥じらいの少女の顔に洗われる  
電話する後ろ姿に明と暗

凡鐘の響きに聞こゆまたあした  
大学生超氷河期だこじ開けよ  
追い越した友の悩みも聞いておく

大阪市 大河 未佐子

紫の鐘をリンロン蝶が撞く  
ラベンダーの波に女は溶けてゆく  
森を出る世間知らずの白兎  
さくら貝やさしい波の染めた色  
慈悲受けて女人高野の森を出る

堺市 柿花 紀美女

人それぞれ言い分があり投書欄  
精一杯生きたと老いのひとり言  
週七休 政治国家が気にかかり  
一徹な父へ合わせる子の会話  
悲しみも喜びも亡母の小引き出し

堺市 楊井 二南

生真面目な顔で本心打ち明ける  
下心あつて誘いに乗るつもり  
点滴の緩急で知る病み程度  
猫舌を口実にして食べ残す  
程々の診察でよい老患者

堺市 中野 樺子

鞍馬 貴船 山に感謝のうまし水  
母のよな温もり思う松風呂  
食のバランス夏と闘う私影  
風と遊ぶ団扇風鈴遠くなる  
人間勝手 去年 今年の水事情

高石市 浅野 房子

こだわりがあつて一步が踏み出せぬ  
万歩計 今日ノルマは雨の中  
不惑過ぎまだゆれているイヤリング  
徒花の二つや三つ散つたとて  
自然淘汰されて行くのは私かも

豊中市 井上 直次

情熱の引いて行くよな夕の波  
三世代 祖母の笑顔の防波堤  
血の色も緑となつて森を出る  
森に来て荒れた心に岩の苔  
森さして吊橋渡る美女が居る

笑面市 坪田 紅葉

にこやかな先生と会う今朝の夢(葉先生を偲ぶ)  
何もかも行き届くのにきらわれる  
毎朝の散歩かかさず九十歳  
父の日に孫がお供え買って来た  
震災とオウム教とで過ぎて行く

箕面市 岩 津 ようじ

ドクターストップ食ったのぐめん酒屋さん

僕ひとりだけが取り残された夢

つけばくろ さまにならない美女の真似

孫アトピー 爺花粉症 血の絆

惚けてなお隠し持ってた預金帳

箕面市 椎 江 清 芳

読書する膝に這い寄る秋の虫

胸の奥 燃える火種が風を待つ

麻酔覚め術後の水が腹に沁み

老いの身へ秋は膝から忍び寄る

切り札を持つ影武者の影が揺れ

吹田市 井 上 照 子

今日の妻 笑顔満面なにかある

木もれ日を浴びて林の香を探る

幼なじみあやしい魔女が結びつけ

重い荷を背負い二人で高波に

けっこうなお茶です母の笑顔みる

吹田市 瀬 戸 まさよ

じつと飛ぶ飛行機の高度一万

ざわざわと群れ楽しげに行く白夜

フィヨルドの無数の滝に神の虹

眼下には湖二万いぶし銀

妻ばかり撮る熟年の面変わり

吹田市 栗 谷 春 子

森に入る森はやたらに喋らない

西向いて東を向くと疲れる日

さつき風 緋すがたを想い出す

豊かなる青葉の宮の絵馬よろし

多事多難みな突然にやってくる

吹田市 山 本 希 久 子

コウホネの池にたしかな夏がある

細い雨みんな味方でみんな敵

心細げに私の影が立っている

一本の樹は少年を夢中にさせた

ねじを巻かねば止まる私の時計

吹田市 古 川 喜 美 子

鳶数羽 雲を皆食べ日本晴れ

荒波のとっても好きな鯨たち

掌中の珠をさらって行った波

梅散って桃から桜そして初夏

柔らかく結んだ帯の安堵感

茨木市 藤 井 正 雄

風邪で寝る女の別の顔を知る

旅に出る妻が派手かと聞く帽子

障子貼り手伝う 欲しいバイト料

子の夢に銀河鉄道驚進中

水溜まり一つ一つに昼の月

東大阪市 森 下 愛 論

ブライドを捨てると美味しい酒になる

ピヤホール ハルマゲドンの無い世界

赤いバラ啞えて競う恋愛論

因業な生命線にあぐらかく

可も不可もない生活へ欠伸して

東大阪市 安 永 暁 子

工夫好き生かせてみせる不用品

京ことば部屋の空気があたたかい

並ぶ列 甘味ひかえたケーキ屋に

助けを待つな父の教えに立ち向う

微に細にこころやさしい師の葬儀

東大阪市 指 宿 千 枝 子

波避けのテトラポットは母に似て

雲もなき大王崎の波を見る

二十三時 国際電話を子へかける

六十になっても好きなアイヌ菓子

美しい虹を見えますこの世です

寝屋川市 平 松 か す み

娘や孫へ焼き付けしようよい笑顔

ストレスを飛ばす五歳とフラフラプ

うっかりとオウムソングを口ずさみ

サークルの梯子 花の輪 花俱樂部

虫干しの晴着に懐う亡父の汗

寝屋川市 岸 野 あやめ

納骨へいずれ私も入る墓

お正念抜いて入れてとせわしない

ユニークな失恋なんてないでしょう

栄枯盛衰そうかあのひと退任か

サティアンと言うハーレムを持つ悪魔

枚方市 八 田 敏

妻背負い浄土に行くかわが運命

リハビリが生き甲斐になる妻の日々

諸ふかす匂いと遠い飢えた日と

花火見に来てパチンコして帰り

島の夜は釣った肴で酌む地酒

松原市 玉 置 重 人

マンネリが嫌でしつかり石を積む

生きている限り未完の絵の構図

美しい花活けてある無人駅

八月の雲キヲツケを忘れない

下積みに悔いは無かった靴すべり

藤井寺市 中 島 志 洋

金で済む相手と酒で済む相手

恋人の嘘 信じたいイヤリング

水着から食み出しそうな健康美

雪月花 二人で綴るメロドラマ

台風の進路気にしてフルムーン

羽曳野市 榎本吐来

老妻の道具になつてゐる笑顔

宴会の盃へまばたき送る妻

夢一杯詰めた二十歳の夏帽子

照れている頬っぺ見合いのゴーサイン

頬笑んで聞くお隣の痴話喧嘩

羽曳野市 田中透太

わたくしに啖呵切らせた男たち

熟年の恋も火加減水加減

つまらないことで血圧上げている

あなたならどうする棘のある言葉

鉛筆がやたらと折れる負けいくさ

羽曳野市 吉川寿美

お豆腐が旨くて街が出てゆけぬ

風がつづいて度忘ればかりする眼鏡

お互いの思わく計っている無言

峰うちの痛み情けとわかる歳

ひとりでは生きてゆけないのうぜんかずら

八尾市 吉村一風

うるさいが居らぬと母が恋しゆなる

お茶漬ははまだ怒つてる音をたて

忘れ上手のとほけを妻は知つてゐる

はじけるように笑う娘の顔思い出す

花も実もある嘘と自分に言いきかす

八尾市 山下美津留

広角のレンズで息子捉えてる

広島に来て鎮魂の雨しきり

言い訳が過ぎる未練な男だな

疑うと矢印までが怖く見え

角取れたお人と言われ主義も萎え

八尾市 高橋夕花

星の日に生れて星に近よれぬ

あじさいの今日はわたしの憂いの彩

掟なり尼僧のごとく墨を擦る

リハビリのこども老女の園なりき

野次馬を捨てねばならぬテレビ切る

八尾市 高杉千歩

天高し昭和史生きた丸い背

どん底をぬけて悲願の絵の具皿

空転の日々 秋風に背を押され

秋の椅子 自画像未完のままにして

ソロバンを合わす何でもないことさ

八尾市 宮崎シマ子

茶柱は何の吉報 老いひとり

一二の三で明日死ねたらいいのになあ

どっちかがお粥食べてるハブニング

夏本番 待つひまわりよ朝顔よ

保育所の先生 片言から覚え

岸和田市 芳 地 狸 村

長梅雨にあえぐテントの震災地

有頂天になるからこわいほめ言葉

へそくりを元に戻した妻の留守

バーゲンのダイヤと見えぬお人柄

雲つかむうまい話にだまされる

岸和田市 古 野 ひ で

人許す態度におごりないだろうか

秘めてても態度に好きと言う匂い

へまをして謝る老母を憎めない

風みどり齡を忘れた老いふたり

石老いてまあるくなって艶を出し

岸和田市 原 さよ子

記憶からどんどん遠くなる戦記

節目には不思議と亡母が夢枕

無気力な今日を燃えさす通知くる

底なしの善意にへまも許される

たまさかの湯の宿妻は上機嫌

岸和田市 高須 賀 金 太

悪しざまにののしって気がすむのなら

いくつになっても言葉はむずかしい

肌の色で扱い変えている不思議

拗ねてみたけど妻の反応はなし

利子下がり銀行に首しめられる

岸和田市 岩 佐 ダン吉

社会党の党是を答えられますか

蟻の死も自然のきまりなんだろう

母さんのパズル解けないままにある

猫の手になり被災地で汗を出し

荒れる子の心に触れた日の安堵

岸和田市 三 輪 通 彦

お墓まで散歩の日課欠かさない

風呂場では親子の対話よく弾む

孫の守り終れば病んでくる五体

居眠った妻にテレビをそっと消す

窓際を先ず対象にする整理

和泉市 岡 井 やすお

また四年くやしい思いする弱者

策の目が大分粗い自由国

天災に人災 次は何の災

これくらいではと笑わん野茂殿下

傘寿なお学ぶ気力が取得なり

富田林市 池 森 子

柔らかい手よ八度目の年おんな

細紐を凜と結んだ冬のくちびる

子猫のリズムで回るわたしと古時計

今度からたった一人の広い庭

景色から愛が枯れないよう祈る

富田林市 松本 今日子

大阪府 榎山 隆

切替えるつもり頭染めて来る  
寶石を光らせ心病んでいる  
町会も世代交代しています

夏休み思い思いの夢を見た  
戦争を知らない人も五十歳  
昨日今日明日と実感生きている  
海開きジョーズのはなしむしかえす  
敵のない答えはいつも玉虫色

無党派の旅はとつても気ままなり  
焼夷弾そんな火花はみたくない

ユーマアで自分のへまをねたにする  
緊張の余震で人を笑わせる  
ひと休み清涼剤となる笑顔  
紙のもつ伝承折紙美を究め  
蚊張をつる孫のはしゃぐ場を作り

河内長野市 井上 喜 醉

京都市 山海 友 熙

朝の愚痴 顔を背ける靴すべり  
タタラ踏む不覚も欲は離されず  
念入れて聞いた噂が悪いこと

言いつ分は俺にもあるとグラス空け  
ゆっくりと昭和が遠くなる平和

世紀末 人間短気になって来る  
いつか逢う小さな同じ町の中  
チンドン屋喜びそうな服流行る  
小さい顔ばかりになった高校生  
田舎でも花は新種の花屋さん

万歩計 御無沙汰がちになりました  
床の間に自慢話が吊つてある  
カタツムリだって見分ける好き嫌い  
善悪を計る物差し食い違い  
私の夢がときどき消える闇

河内長野市 植村 喜代

京都市 松川 芳子

大阪府 八十田 洞 庵

京都府 稲葉 冬 葉

手を触れた余韻は夜更けまで続く  
まねき猫 妻の洗面裏にある

贅沢は隣の花がよく見えて  
耳鳴りが仲間になれと寄ってくる  
外孫へ出世払いもいとやすし  
ほろほろと髪のあたりへ夏つばき

ヒトとヒトいつもどこかでイクサする  
大慈悲のひたい白毫おやさしい

陸の孤島に住んで人見知りする

陸の孤島に住んで人見知りする

神戸市 山口 美穂

生きていてよかったですと話しめくくる

震災の愚痴も生きてたからのこと

物忘れ震災呆けでと許し乞う

魚屋はわたしの視線見のがさず

若者の会話に貰うエネルギー

尼崎市 春城 年代

リハビリに通うて老婆連れになる

男ひとりカラオケバーに凝り出して

日ぐすりとなくさめられてから夏に

どうしてもカラスの黒が気にいらぬ

踏み入れた森は日毎に濃密に

尼崎市 春城 武庫坊

温顔がもう戻らない梅雨の闇(栗先生をしのび)

核実験絶対反対 巴里祭

言葉の海で抜き手も切れず浮いている

話し合う位置にビールが置いてある

集中豪雨また日本が試される

西宮市 奥田 みつ子

三味聞いて亡母を偲んでいるらしい

人去って秋の川原に星が降る

露草を活けてわたくし色の部屋

海鳴りは慟哭 亡兄は若かった

複眼の眼鏡を探す世紀末

西宮市 門谷 たず子

夫の機は無事着いたらし積乱雲

道連れの老いすこし離れてみえます

石コロを蹴っても思案まとまらず

排ガスの土手にも楚々と月見草

自画像にまだ紅を足すまだ微熱

西宮市 亀岡 哲子

氷解けて中の泡も消えている

チャレンジの駄犬一匹 樹へ登る

充電もおんなじ時にペアウオッチ

黒い貨車ごうごう長し遠し踏切

平凡に生きて波乱のドラマです

宝塚市 吉田 笑女

たとえばの話の中へくり込めぬ

おーいと呼ぶ夫の声もなつかしい

仏様を拝めなかった今日を詫び

あと一步ふんばる力がつづかない

片方の耳で聞きたい話

宝塚市 丸山 よし津

世紀末 地球に異変多過ぎる

どの風にも従う葦は倒れない

籠の鳥で飛び立つチャンス見つからぬ

ひとり生きて楽しみ多い生き上手

失敗もあって人間幅が出来る

宝塚市 中田純次

山里に木彫りの秘仏との問答  
爽やかな朝 正座して経を読む  
太古から波は無限に息つづけ  
老練の舵はうねりに流されず  
やがてくる最後の波をふと思つ

川西市 氏林洋敏

父の日も母を目当てにやつて来る  
ローンとの縁切りいつかわからない  
口べたの誠意で受けとめる  
落し物届けて損をした気分  
梅雨晴れ間 私を干しに街に出る

姫路市 中塚遊峰

先長い積立 嫌う年齢になり  
出会いこそ別れを痛む年齢なれば  
終りまで聞かず答えを先に出す  
皺の顔は生きた紋章かくさない  
こぼれ種 思わぬ場所に咲いて見せ

姫路市 大原葉香

み仏のほほ笑み仰ぐ美の極致  
代読の祝辞は頭上かすめ去る  
所得隠ししている僧のお説教  
うなずき合つてほほ笑み合つている親子  
お灯明ともせば仏語り出し

加古川市 吐田公一

一歩ずつ確かめながら行く余生  
再職のネクタイ少し派手にする  
老人の仲間入りする誕生日  
管理する方がされてる湯沸し場  
侵略を素直に飲めぬ戦中派

奈良市 宮口笛生

ランドセル百点ばかりでないテスト  
プールの日 喜んで行くランドセル  
学校が好きという子で有難し  
夏休み孫との約束多すぎる  
休耕田 今年の米は大丈夫か

奈良市 米田恭昌

降り荒ぶテントに惨い男梅雨  
疑いの眼 段々白くなる  
目的は大樹にもぐる塾通い  
自虐趣味 軍歌唄って泣いている  
石室に入れば空爆思い出す

生駒市 北山悟郎

戦傷奉公杖 僕を叱咤して鞭となる  
手榴弾破片今だに背に残り  
白旗を掲げる勇気ない不仕合わせ  
夏空に厳然生きる草いきれ  
大望は路傍の些事にふり向かず

大和高田市 岸 本 豊平次

百歳の秘訣をとともじや真似出来ぬ

隣の花 賞で合い妻の小半日

おばあちゃんさえ居たらよきそう孫が来る

あの山を越えれば故里ハイウエー

故里の改築 育った部屋が消え

奈良県 長谷川 春 蘭

生かされて生きる喜び豆御飯

さなきだに少なき余生ひる寝する

乗り降りに小さきドラマ子も老いも

ページ繰る葉の房の水色が

今とぎす葉明日もつづく幸

奈良県 田 中 紀美代

ひきつづき嫁ぎひきつづき孫生まる

猛暑には猛暑のような恋生まれ

正直に生きてしよちゅう叱られる

追伸で母のさみしさ二倍知る

メモばかり溜めてる母の割烹着

和歌山市 堀 端 三 男

一球のジャッジ リズム狂わす人生譜

陽の下でする約束は信じよう

完璧より九分で手を打ち丸く生き

よう降るのしがよう照るので梅雨明ける

八月十六日 出征万歳も無く見送られ

和歌山市 福 本 英 子

不揃いの皿のプライド聞き漏らす

待つことに慣れた私と花時計

信号待ちにいらいらして家のポチ

両の掌に受ける御恩があふれ出る

バリウムを飲んで心痛ごと流す

和歌山市 榎 原 公 子

首かけたこともなかった首である

男らしさの鎧 重たくないですか

嫁さんと軋みあつてる価値基準

子沢山チャンポンの具に勝っている

ひきずつてなお余りある戦の詩

和歌山市 岩 本 美智子

別れあまた空港沖で霞みけり

陰膳を供え息子に語りかけ

地球の裏の子とは北斗で酒を酌む

ブラジャーのファッションをみる平和です

ユダがいて核実験がなくならぬ

和歌山県 小 倉 ア サ

胸の辺りで虹を掴んでいる両掌

うたた寝と言う天国もある時計

どのプラン見ても一ヶ寺組まれてる

グラビアに載って海山荒れてくる

肩書きの値ぶみ絶えない夏の陣

砂川市 大橋 政良

シャボン玉みんなこわれて目がさめる

ネクタイをはずし残尿感がある

一本の薬にも似てる余命表

毒舌の毒マンネリになっている

化けるのが好きな鏡を買ってくる

弘前市 岡本 花匠

紫陽花の戸惑う彩の投票日

臍出しルック雷神有漏のみちに落ち

晩酌に妻の言い分 冷と爛

生ビール母の茄子焼き添えて旬

里帰り八十路の母も話の輪

弘前市 中山 雅城

俱会一処 何時か会いたい高野山(栗先生を偲んで)

みちのくに主幹の星は生きている

巻頭の主幹に涙してしまふ

髭の奥 奥から主幹微笑給う

みちのくの女を愛す師の笑顔

弘前市 浅田 隆樹

言い訳もできず思ある人の通夜

首位どうの巨人阪神 白熱す

気が抜けた妻の帰宅を待つビール

不本意な役割り演じ評価され

日曜の鏡 穏やか無精ひげ

黒石市 相馬 一花

玄関でまず誉めそやす奉賀帳

糠味噌の匂いがしない女流展

学校で許してくれぬ黙秘権

薬草も毒草も咲くけもの道

猿轡はめたい程の無礼講

十和田市 小笠原 敏人

図らずも居残り白鳥田を守る

散歩する愛犬にも意図を見透かされ

明け方のゲートボールはちよと響き

通夜の席 白い歯一際目立ちます

晩酌を休むつもり晩になる

青森県 田中 叶

缶ジュース飲む僕がいる夜の窓

座布団を枕に子等の帰り待つ

母とする焚火わが子も来てしばし

エレベーター暗い夫婦と乗り合わす

東京に着くとポケットティッシュくれ

仙台市 川村 映輝

美人見て元氣出るとは頼もしい

十四番目の旗日に決まった海の日

一人娘 母の日の日忙しい

娘の辞典 座右に置いて重宝し

小さいが息抜きできる庭がある

東京都 山口新子

富士宮市 渥美弧秀

水くれるお方へ傾斜する藪

水面キラキラ無言で重ねあう両手

父への電話 思いっきり訛らせる

再会の扉へ一歩二歩三步

桂川過去を転がす丸い石

町田市 竹内紫鏘

富山市 酒井輝

お互いの和服は知らぬクラス会

解くたびに段位が揺れる詰将棋

喜寿の日の肴 早めに寄稿する

夫婦古いカラーになったスニーカー

老兄弟いまも作文見せ合わず

横浜市 菱田満秋

お楽にと言えばソファーに正座する

決意など忘れ花見に酔っている

始末書の文章力を褒められる

クラス会 記憶違いをただしあう

何かの間違いで自殺したと言う

静岡市 安本晃授

ストレスが溜まると重くなる帽子

老いの掌にキヤツシユカードは馴染まない

本流の中で気がつく右顧左眄

年金の晩酌一合 帰依の水

運命線少し充電気味の朝

神の富士仰ぐ心が溶けていく

富士仰ぎラジオ体操 深呼吸吸

追加一こと刎頸の友傷つける

鳥が呼ぶ森の茂みに吸い込まれ

オウム本部の近くに住んで見舞われる

富山市 酒井輝

ばらばらに食べて家族がみな達者

真実を突いて落語が笑わせる

遺伝子の加工に神を超す虞れ

アメダスがプランを変えぬ独り旅

パソコンが描いた自分を怖く見る

七尾市 松高秀峰

不平など言っても通じぬこの世です

風向きが変わると対話の嫁姑

嘘言えぬ男に遠い椅子があり

強情な首もうなずく子の願ひ

運命を言い聞かせてる父と母

岡山市 井上柳五郎

少年の目にカラフルな夢が待ち

ときどきは確かめてみるおれの位置

なぜここになにをしに来たわかんない

脛の疵うしろめたいが時効知る

雑音につられて右往左往だけ

岡山市 花田 たけ志

外面は仮面ばかりの浮き世です  
恨んだが間違っていたのはわたし

仕方なく言われて出した丸い牙

ストレスのものは言えない事ばかり

深層水 越中 富山の新薬品

岡山市 川端 柳子

裏表アア人生はホロ苦い

月見草あなた待たせたこともある

松葉ボタン行く先々に夢を盛り

こだわりを風に去らして自然流

長い雨カラスが鳴いてパンを焼く

倉敷市 小野 克枝

しつとりと地味に咲かせる老いの花

麓まで運んでくれたうすき愛

さりげない頑固で締まる男帯

シャッターへ笑顔作りのうまい孫

スイッチに任せて眠る平和です

笠岡市 松本 忠三

口は重宝 申しわけありません

ハンカチを持ちましたかと妻の声

魅力満点 他人のかあちゃん

青春を涙に戦後五十年

聞く耳を持たぬじいさんばあさんで

岡山市 二宗 吟平

川柳とジバンク余生日本晴れ  
定めいでもサマタイムでいる小鳥

半世紀違うら抜きに歩を合わす

ホームラン見る気 銀鱗空に舞う

形代の前の太鼓に畏まる

岡山市 小林 妻子

重い物置くなど棚をつつてやる

騾糸老母の強かさは今も

馬鹿になる老母の真似なぞしてみよう

退院を待つ一日の長いこと

休日は家族疲れることらしい

岡山市 山本 玉恵

出世にはまだまだ遠い靴の音

耳よりな話にさとい老いの耳

中途半端な想いで押せぬ今日のドア

紅引いて女ひとりの雨を抜け

法灯のゆらぎは今日のねぎらいか

岡山市 岩道 博友

終戦記念 粗末な皿で同窓会

不平顔 何で消そうか酒が無い

家風にも夫婦の道筋 芯があり

旅をする用意に数珠も書いてくる

言い勝った積りに若者させておく

岡山県 荻野 鮫虎狼

ワープロの字へ本心が見透かせず

足跡を消し砂浜は明日を待つ

凡人でよかった平和な日が続く

無党派の知事にだんだん重い口

連絡もなしひとり者 独り旅

廿日市市 林野 甦光

留守電へ言い訳してる昼下がり

纏まった話が飲んでから毀れ

キツツキの宿も開発近くなり

風を追う秋の旅路がなつかしい

向こうさまの都合待ってる苦いお茶

竹原市 時広 一路

引力の法則が有り怪我をする

待つ方が気楽で十分前に行く

以下余白 付け入る隙を見せません

聞いてやるだけしか出来ぬまあ一杯

目覚しを淋しがらせて生きている

竹原市 森井 菁居

派手な服 意外と似合う勇退後

退職をして有難き趣味である

モーツァルトの中に私の青春譜

鬼になる日もありどんと生きている

我もまた老いたり父の七回忌

竹原市 石原 淑子

掛床に桔梗一輪夏点前

モノリザの心の奥の鬼を見た

通り雨 胸の鉛は消えぬまま

足の指 隔世遺伝の素晴らしき

悲しくて笑い袋を持ち歩く

宇部市 平田 実男

笑みこぼれそうな死顔がきれい過ぎ(義父の死 2句)

悲しみが妻の落胆ふり増し

うさぎ小屋だがオアシスとなる我が家

酔うほどに童顔となるクラス会

倅せは孫の温味が伝う膝

鳥取市 美田 旋風

風向きが変わる瞑想して待とう

きれいごとと言って寝付きが悪くなる

自白剤飲ませ本音を聞く暖簾

旧姓へ思い出さぐる師の笑顔

相槌を打って味方の振りをする

鳥取市 西村 黙光

古希祝う自作自演の同人誌

庭を築き近所つき合いやつと出来

健康に感謝してますワンカップ

喧嘩しに一升ピンを掲げてくる

齢ですね尻尾上手に振れ出した

鳥取市 春木圭一郎

赤チンの効かぬ傷口多くなる

古傷を思い出させる歌流れ

傷口をえぐる言葉にまた出会う

古傷をなめ合い真珠婚を過ぎ

ゆったりと今ぬるま湯で傷洗う

倉吉市 野中御前

あり余る品位を駄目にしたお酒

掌中の玉が傾くこれも愛

歙持てぬ嫁がどっこいトラクター

さりげない言葉のなかに刺がある

くれるなら壺より金がいいという

倉吉市 最上和枝

さし向い親しい方とティータイム

囚われの教祖ハレムの女想う

煌めかぬ星のため息聞いている

零戦で還らぬ友か十字星

どん底で人の情けに甘えない

米子市 光井玲子

充電がすっかり出来た雨三日

駆け抜けた父の足跡雨ばかり

同期会一刻タイムスリップする

又とない機会だうんと翔びましょ

亀万年生きれば月に辿りつく

米子市 石垣花子

軽い荷を持ってふる里出て行つた

同郷の夫婦で抜けぬ国訛り

気を抜けば待ってたように事故起こす

苛立った母の乳房をかむ赤ちゃん

口がすべって溝をますます深くする

米子市 川上より子

喪の奥の奥に紫陽花が開く

雲の立つ見ている太古の竜斯くや

初盆の家を数える宵待草

再就職の夫の皿に座り直す

甘えん坊の次郎が先兵でねだる

米子市 金山夕子

兄さんが癒えたら誘うコーヒー屋

会議中 張って会議が踊っている

十万の面の半分 悪の面

あじさいの陰でリズムを確かめる

おおまかな妻の日課に花がある

米子市 野坂なみ

カタカナ語やさしい嫁にきいている

かさぶたが自然に落ちていたようだ

幸せな背広の裏がほころびる

見えがくれの森へ道草くり返す

旅の約束もう済ませたぬ夕茜

米子市 白根ふみ

追憶の行きつくやさし亡母の膝

諂いも驕りもしない自然体

草屋根を抜けるコーヒーカップの香

彩のない風に指示機を出しておくれ

北向きの鬼瓦の目ホツとする

米子市 菅井とも子

巨星墜つ海原漕いでどのあたり

まだ温いパンだ故郷の老母想う

父の漕ぐ舟に安心しきっている

二人して漕げば頼りになるお方

君います時には父のごと慕い (七兄三回忌)

米子市 茂理高代

目薬をさす光を長く下さいと

目の暗さ耐えつつ今日も飯を炊く

目眩する命短い音がする

油断せず話せる人と日暮れまで

昔話するには程よい星の数

米子市 寺沢みどり

種切れになると昔を振りかえる

仕合せをつかんで欲しいもみじの手

アンパンを避けても体重かわらない

塩壺を気にして母がおちつかぬ

移り気と知って紫陽花うえている

米子市 澤田千春

会者定離いつもの駅を汽車が出る

父母に会えるか森の奥深く

会いたい人がいい絵になって身の内に

がまん袋干しておこうよ雨が降り

風邪のあと人のぬくみが嬉しくて

米子市 田中亚弥

会は厳か身内の者を引きつれて

長雨の合間に命を干しているところ

一番どりがうるさく言うてから起きる

順番待ちの長いロウカは皆無口

隣の松と年に一度の月見する

鳥取県 松下たつみ

蛍の灯 闇に一匹生きてくる

心残りの一つけじめをつけすぎた

冷や汗を拭くハンカチが派手すぎる

なにも無い生活に慣れた笑い声

割り切ってしまうえば画ける丸い虹

鳥取県 林露杖

雨十日 骨の髄まで湿りこみ

汗淋漓オンザロックで飲む梅酒

友見舞う少しヨイシヨをして帰る

OB会 互いの老いを宥め合い

宿題をする孫しない孫も孫

親しいが金の話はまた別だ

さざ波と幼児と蟹が戯れる

ただいまとホテルが戻る川になる

海原も包容力を失った

満腹に罪悪感がつきまとう

鳥取県 西原 艶子

紫陽花へ雨 私には君が居る

山野草眺め出勤できる幸

雑草にうまる田畑が多くなり

老人をまとめて世話をする時代

友情と恋のちがいは知っている

鳥取県 土橋 はるお

体重計がフンと笑うほど軽い

手抜きする事に苦勞をしています

約束をいつも守っている蓄

坊さんが病氣見舞を下さった

うしろからこらこら弥陀の音がする

鳥取県 上田 俊路

信心の深さお布施で計られる

気がつけば虹はとつくに消えていた

年金でやさしさごっこして老いる

銅像が欲しくて森に帰れない

世の乱れ教育勅語思い出す

魂はしつかり君の瞳に宿る

裸電球光るなんと切なく

少しずつ夕陽が重くなってきた

傷ついて自分にもどる日記帳

婿取りの屋根を真っ赤に塗りかえる

鳥取県 黒田 くに子

人住まぬ庭でカンナの緋が炎える

ワープロの葉書に燃えるものがない

美しい暗示に燃えるくすり指

税金を少しへらして下さいな

父と子の断絶はない背を流す

鳥取県 羽津川 公乃

自慢する物の無いのも淋しいね

年寄りを敬う嫁の居る平和

それぞれに個性ゆたかな孫五人

激やせの夫に怖い夏は来ぬ

初盆二つ息子も名代の顔になる

鳥取県 石尾 かつ乃

引越しの荷から零れている記憶

あこがれの白衣 初心を胸に抱く

万歩計 彼との距離が遠くなる

故郷の記憶の中に遠花火

浜の宿 波のささやき夜が白む

鳥取県 津村 八重子

月下美人咲いて真夜中起こされる  
シャンシャンの祭に夏の夜はもえる  
風だけが待ってた朝の無人駅  
失言の波紋つくろうすべがない  
ばあちゃんの昔話にある余韻

鳥取県 さえき や え

雨三日 畑が表情かえている  
源氏ぼたるもほたる袋もまぼろしに  
すずなりのアンズに亡父の声がする  
しようもない話はよしてアユを焼く  
合掌の手にこぼされぬ種をもつ

鳥取県 石谷 美恵子

上手ではないがこの絵は温かい  
エピソードまたかと亡母が笑ってる  
夢叶う報せ二重に虹が立つ  
親しくなるとお金を借りる癖がある  
子に笑い泣いたあの頃はなだった

鳥取県 西川 和子

目が合った時から親しくなる運命  
その時にぴったり合っている詛り  
付き合いのコーヒーアメリカンにする  
ライバルが遙かあなたを翔んでいる  
縁あって一緒に歩く薄い胸

松江市 舟木 与根一

子離れも出来ず老妻梅を干す  
頑固だが犬や猫とはうまが合う  
ハスキーな女レバーを追加する  
へそくりのコツをうどん屋で明かす  
立ち読みは雨あがる頃佳境に入る

出雲市 尼 れいじ

栗師を亡父は迎えに出たかいな  
妻不在コンビニで揃えるバイキング  
どっこいしょ多くて抄らない作業  
夢追えば追った歩幅で逃げて行く  
山守をまだ侮っているタヌキ

出雲市 竹治 ちかし

子の視線 先には二十一世紀  
子の前で余裕の父を見せておく  
片方が病んで出来ない口喧嘩  
打たれない程度に頭上げてみる  
雨乞いの顔が人間らしくなり

出雲市 岸 桂子

一言を吞んで路傍の石になる  
ボウフラの生きるに足りる水たまり  
人並みでいれば素通りする風よ  
疑いが晴れても淀む川の水  
おろおろと六十路の坂に歩を下ろす

出雲市 園山 多賀子

断ち切れぬ憶いで傘の雫切る  
考える葦 水鳥を遊ばせる  
さらさらと火宅に触れぬ砂時計  
自分史を書くペン牝豚をいとおしむ  
含蓄の一語 螢火胸に棲む

出雲市 吉岡 きみえ

くされ縁じめじめと梅雨のうつ  
のほほんとからして曆 七枚目

一年の半分 私何をした

世紀末 子々孫々を思うとき  
私にはどれも似合わぬ試着室

出雲市 小玉 満江

海と山 学校にして夏休み  
救急車又かと誰も飛んで出ぬ  
百ヶ日 涙を海へ捨ててに行く  
ジャパン語と英語とドルでマレーシア  
曲り角ここで最後のさようなら

出雲市 小白金 房子

昼の月 牛ののんと草をかむ  
立久恵の四季をもとめる絵の具皿  
ふる里の山に抱かれる安堵感  
丈くらべ柱に残る娘も二十歳  
老農の汗をいたわる青田風

島根県 石飛水煙

子育てに苦勞し絆冷える時  
父の日へ素直に育つた子の便り  
捨て難い亡母の手垢の糸車  
梅雨明けもそこまで来ている波しぶき  
いくばくの命か鈴虫冴えた音色

島根県 堀江 正朗

おいしさに鰻するりとどに落ち  
やる気出す戦盲八十路とおく置き  
もやもやをさっぱり消した盆踊り  
タイミング合わねば逆な風が吹く  
元氣よく返事し何も聞いてない

島根県 小砂 白汀

見るだけで置くには惜しい鉢の桃  
捨て駒にされそこなつた五十年  
G線上のアリアが哭くか上九一  
泰山鳴動ふるい落としたドブネズミ  
あれだけの事をしながらシラをきり

島根県 藤原 鈴江

五十年 夫への想いたちがたし(戦死した夫)  
走馬灯 再び秋にめぐりあい  
ときめきはあの日あの時朝の夢  
真実をひたすら追うたつもりだが  
友逝きてあの青春を懐かしむ

香川県 木村 あきら

月給をみな巻き上げる内助ぶり

招き猫よりも確かなこの笑顔

大物はスベアの舌も持ち合わせ

バアちゃんと呼ばれて誰のことかない

日の切れた広告もある無人駅

香川県 工藤 吟 笑

お金では買えぬ八十路のこの元氣

腹いっぱい食べて肥らぬ本を買う

人生の疲れ笑顔の裏にあり

忘れずに今年も咲いた百日紅

ノミ込みが早くて消化不充分

香川県 成重 放任

奪い合う鏡を今日も妻に負け

見ていると僕も斜めに見られてる

見えすぎた世辞にも耳を貸してやり

欲言わぬ人並にある衣食住

精勤をすれどもコネに追い越され

香川県 川崎 ひかり

正論を肴に冷酒飲んでます

共有の出来ぬメガネで見る余生

ウリの木にナスビがならぬと諦めた

種まいた時から勝負ついていた

胸に手を当てれば覚えのある話

香川県 山地 マツエ

亡母が来るそんな気がする下駄の音

主婦だった事を忘れている温泉

カウントーの隅からバラの自己主張

子に見せる背中だうかうか老いられぬ

かごめかごめ背中に夕陽落ちて来る

香川県 新川 マサエ

久し振り精彩放つ友に逢う

納品を済ませた後の茶の美味さ

我が庭でなくても嬉しい草を抜く

寝た切りのガラス窓には夢がある

安住の余生あなたの墓を守る

松山市 白石 春嶺

あまりにも善人だから気が疲れ

まぼろしの天女が降りる浜がない

福耳もいる地下街のホームレス

母と娘の絆に入る隙がない

価格破壊 父権の位置が定まらず

松山市 宮尾 みのり

不幸中の幸いという子が支え

逆らわず有象無象となり果てる

神様のようなお人は避けておく

在庫管理は見事で今を生きている

対岸の人へいつしか同志愛

今治市 越智 一水

肩組んだときはおんなじ歌が出る

自らの心と向き合いどろを出す

つゆ草のつゆの光にわく勇氣

泥くさく生きて仏のころ知る

竹筆の軸を見上げる路郎忌よ

高知市 北川 竹萌

仮面などいらぬ素顔で愛される

愛猫は過保護に老母放つとかれ

重い鍬 選って取つたはもう昔

青空を楽しむ八十三 自家菜園

百歳を終点と決め急がない

唐津市 田口 虹汀

もう三月生きると父の歳になる

ひらがなでひまごのたよりよみづらい

親らしいこともせぬのに父の日よ

トーナメントとなれば釣師も楽じゃない

どの風が病んでも卓は寂しかろ(雀友入院)

唐津市 久保 正劍

止り木の陪審員は無責任

もう一度お知らせの間にホームラン

大声を威圧している低い声

忘れたと言えば偽証にならぬ嘘

ユニークな眉では出来ぬ危機管理

唐津市 仁部 四郎

神仏に添えてもらった看護の手

歴史家の過失許せるものもあり

福引きで花摘む野辺へバスツアー

輸出日本円高という踏み絵

広告にヌードが出てる顔がない

唐津市 山口 高明

火の酒を飲んでおんなの自花受粉

いま熱くならねば時間切れになる

若者はオウム熟年ホームレス

あの方に投げてやりたい起爆剤

お隣に見られてならぬ男靴

唐津市 浜本 ちよ

歯をなくし老いの加速の兆し見る

甘い物に目の無いお人福々し

床の軸 筆勢の冴え妹の作

子の笑顔 大人の元氣引き出させ

露味噌でわが家の夕餉春となり

福岡県 横地 東川

むごいこと平均寿命の牛が居ぬ

停退をしてから増えぬ父の皿

病床の再会止そうよ退院日

胸を借る職場は土俵だけじゃない

手で払う紫煙逃れて空いた席

八戸市 島田昭治

病氣見舞言葉選びに氣を使い

かたくなに貧に通ずる道変えず

今死ぬも何が怖いか解らない

クラス会終えて友の墓に寄ってくる

弘前市 小寺花峯

左遷地で地酒がうまくなる恐さ

席ゆずる人があります優越感

街角に慣れてしまった鴉の目

涙腺が切れて一人の酒に酔う

十和田市 阿部進

真相を知らぬ野次馬さわぎたて

晴着脱ぎやつと落ちつく兔小屋

連れ合いをなくした同土息が合い

入れ知恵をされた示談がもつれ出し

羽咋市 三宅ろ亭

大雷鳴 雷神さまの託宣だ

ツユ明けば、越中雷とは、行かず

しなやかな姿態に見せた筋一本

混沌の世に美しき日本人だっていた

富山市 島ひかる

天の川 病んだ地球を見て濁り

いっぴきの蛍を町で見失う

花一輪やさしい風に狂い咲き

半分を残したままの絵ロウソク

高知県 赤川菊野

へその緒に付いてる糸がまだ切れぬ

どの部屋も師の短冊に師の色紙

変人と言わずあの人ユニークね

走るのは止そう終点見えたから

熊本市 永田俊子

男ことば使って笑うさくらんぼ

わが道を行くのみ蟹の横歩き

ほころびをつくろいながら生きてます

はるかなるもの探してゆれる蔓の先

唐津市 筒井朴竜

風倒木懲りず老農杉植樹

見栄つ張り競う母親参観日

無農薬菜園除草汗みどろ

八ツ手の葉裏に蝸牛雨宿り

鳥取市 前田一枝

七夕の笹を重たくする願い

夏祭り祝儀の厚み音もいい

トネルが出来て古里近くなる

無免許で運転できる妻が居る

鳥取市 岩原喬水

グッドバイすんなり過去の恋にされ

強情は生れつきだと妥協する

ぴったりと肌のラインを見せたがり

無事故無違反免許タンスの底で寝る

倉吉市 野口節子

満天の星が輝く生きている  
愛情に答えてキャベツ固く巻く  
癌の血を思い背筋が寒うなる  
あり余る時間に脳のしわが伸び

倉吉市 米田幸子

鈍い音たてて茶碗が割れました  
よく弾むまりで行く方が定まらぬ  
右にならって合点できない寄附もする  
抜き打ちの刃もうまく身をかわず

鳥取県 田村きみ子

むらさきの雨だゆっくり昼寝する  
まだ若いつもりファッション秋を着て  
七十の峠で趣味を持ってみる  
蜜柑むくいままの幸せ嬉しくて

鳥取県 幸家單車

軽がると命を捨てる世が怖い  
人間の無能を笑う虫もいる  
追い過ぎた夢が現実から離れ  
苦しみの中で生まれた詩に酔う

鳥取県 乾隆風

気がつくと俺の都合で歩いてた  
かねもちも年もとるのは一緒だな  
温もりは欲しいが花乞いはしない  
紫陽花も屍になるを覚悟する

出雲市 板垣夢酔

ご亭主のお陰で昼寝しています  
惚れた柄あわぬサイズの悔しさよ  
溜めた金 使わず逝くはまだ未練  
無駄話これも生きねばならぬ道

出雲市 久谷まこと

履き慣れた靴は脱げない二度の職  
老いの坂 自分だけとはいう欲目  
古里に未練が残る長電話  
花時計 四季それぞれの刻きざむ

出雲市 富田蘭水

着きしなに帰る時刻をもうしらべ  
回復の波にのってる妻の化粧  
汗流すひと時 親子の太いつな  
くたびれを知らぬ心の旅さがす

出雲市 石倉英佐子

三歩下がって今でも歩く影法師  
流れ雲 流れの果ての孤独感  
養殖の蛸なおさら儂げに  
火花という危ないものを買ってくる

岡山市 時末一灯

訣れるに橋のたもとはよく似合い  
目覚ましの綽名で恨みかっている  
いいじゃない頑固爺はボケてない  
聞く耳は持たず名医といわれている

倉敷市 井上富子

別れ話に濡れた蛇の目が乾かない

雨の日は傘をさして万歩計

恐妻が針の耳そに負けている

言い過ぎた日から扉がかたくなり

岡山県 池田半仙

土居螢 名所も今は忘れられ

父の作 高く飛ばした竹トンボ

現代の住居 硝子に囲まれる

七月にカレンダールの絵マッチする

広島市 森田文

鈍感なたばこの花が咲き誇る

ハマナスへつづけと北は花ざかり

手紙っていいね久々涙する

羊たちの身の上ばなし神のこと

竹原市 古谷節夫

善人で働き者の鋏を借り

丘の上 秋の味覚がたんと有る

生命線くつきり長い初孫で

花の名も人の名前もよく忘れ

大和郡山市 坊農柳弘

お中元義理と思惑詰め合わせ

何一つ区切りつかずに地藏盆

天神さん伝統担いでギヤル神輿

鵜飼の鵜 逆らう事を知らぬまま

和歌山市 玉井豊太

決断へわたしの心上滑り

棘抜いてあげて何時かの恩返し

調停でえにし糸が切れる音

お人好したため息ついて説明す

和歌山市 青枝鉄治

一票へあちこちの義理攻めてくる

耐えること知らぬヤングの散り急ぎ

美しい鬼の角なら受けてみる

口下手の書いたコラムに光るもの

和歌山市 山田高夫

虚と実と不協和音に響き合う

人間が好きで嫌いで輪に入らぬ

四恩にも報いる街も無く老いる

儀打ばかり打つ人生でよしとする

和歌山市 田中みね

凍て付いた心を解かず母の鈴

けらけらと笑い噂を寄せ付けず

安心は言う事なしの娘婿

逢いに行く心残りのないように

和歌山市 北山好笑

話のゆくえ考えながら口ひらく

思ふ事あって真夜中ちろろ聞く

梅干して夜が気がかり星の数

十指みんなひらめきがある母の針

和歌山市 玉置当代

脳みそが揺れる高野の急カーブ

甘やかしおんなの尻が重くなり

うす暗いニュース続いて梅雨あける

平和への意味まちがってきた戦後

海南市 三宅保州

腕組みをすると眠たくなってくる

魂に傷跡がある戦中派

綺羅星の一つひとつにある孤独

バカヤローと言っても消してくれる波

和歌山県 西口忠雄

まあだだよお呼びするからまあだだよ

触れるものあっておかめのいい笑い

胸底の鬼を隠して忍一字

相槌を打って合意に受け取られ

神戸市 木村貴代子

子を五人育て仮設に一人住む

あきらめて忘れて生きるほかはなし

そのうちに照る日も来ると他人は言う

色眼鏡 忘れてほしい過去のこと

芦屋市 黒田能子

遠近両用 真ん中辺が狂いだす

新緑の中で乾杯する草木

紙コップのお茶にわたしは生きている

がれき跡テントの店でいちご買う

西宮市 山本義子

夏休み待って引越す震災地

空部屋のベランダからすたむろする

腕まくりしてもたかだか五目ずし

老人手帳届いてちよっと気がゆるる

宝塚市 嵯峨根保子

嵯峨緑雨かえらぬ人をふと思ひ

静かなるブームだ風が吹いて来る

小雨なら行く約束の花菖蒲

千枚田の緑を守る人がいる

川西市 松本ただし

上々の笑顔で語れる人恋し

勘定が合うたら水洩れする財布

解脱して星になりたい祈り鶴

酒という味方に頼っている孤独

大阪市 北勝美

老夫婦好んで食べるところ汁

病む妻の介護へ早引きする句会

爆ぜる日を夢見て梅雨の花ざくろ

瘦せ枇杷が籠におさまり部屋の華

大阪市 寺井東雲

五十年 住んでも訛り直らない

食べ物でどんな人かを当てて見る

此の先の事は考えないように

他人から見れば結構に見えるらし

大阪市 藤田 頂留子

花形になつて戻るとそのまんま

占いのBとAとは正反対

捨てに来て使える家具だと捨て去に

台風に手心してと願う秋

大阪市 小糸 昭子

祈りからさめると熱が下がつてた

砂時計欲しいサウナの一人言

笑い死にしそう命の洗濯で

鈍行で一つのドラマ拾う旅

大阪市 奥田 良子

赤とんぼうすれるいのちみつめてる

白萩のただ一株に澄める庭

タレントの普段の顔も味がある

姿見にちよつとウイंक秋の服

大阪市 玉置 英子

のど鼻にわるい便利なとこに住み

冷えた仲戻す一言知りながら

大切にされて犬とはおもてない

アルファ波 出ているらしい妻の声

堺市 黒田 真砂

娘と意見合わず空しい梅雨豪雨

紫陽花の彩 虹の如日々変る

口争いした気まずさよトコロテン

文楽に涙して出て夜の風

堺市 一瀬 福一

駅前の工事が変える町の顔

共感をすかさず書いたペンの冴え

思うほど恋は運ばぬ春の汽車

習うより相手を盗む鬼の芸

豊中市 江口 明光

胃の隅にしこり残したジュネーブだ

傘寿まで兎 米寿で亀になる

口車レールの先の落し穴

冷雨ではおたまじやくしが育たない

豊中市 三宅 つえ子

梅雨明けを待つひまわりと車椅子

梅の実に呼べど答えぬ母を呼ぶ

朝のデート男は杖を忘れてる

語り部に語つて聞かず詩ごころ

豊中市 月原 方郎

三山が女帝を守る藤原京

古代史を娘ガイドに教えられ

教室に美人が一人居て困る

たこ焼きの店にしてから客が入る

池田市 岡本 吉太郎

老夫婦小さな秘密持ち合つて

コマージュにつられウメー酒のんです

オウム教 極悪非道に富士が泣く

拒むにもチャンスあるのをやつと知る

池田市 金崎峰子  
あずま屋で風にゆれてる沙羅をみる  
年一度 花どきに会う古い友  
一人子に三人の孫恵まれて  
ワイン入りゼリーぐらいで喋りすぎ

吹田市 茂見よ志子  
自然体これで通そう花は散る  
妥協して丸くなったと思いい入れ  
珍客へ出せばあるのよ輪島塗り  
財形の話 長寿は酷になり

茨木市 井上森生  
丹田のどこに力の隠し場所  
一念発起 第二の職場で血が燃える  
中年のやる気 夢中でタツチペン  
紫陽花の彩に叶わぬ世の変化

茨木市 堀良江  
立山の尾根行く人の八粒ほど  
親のねがい子の夢合わぬものと知る  
お食事に絵を見に旅に違う友  
塔だけを撮り仏さま忘れられ

寝屋川市 堀江光子  
この道の他には無くて日照り道  
波知らず水族館に魚生き  
人工の滝の水にも夏の色  
トップにも灰皿が無い会議室

藤井寺市 福元みのる  
女人禁制の山に女列をなし  
胸の波打ってる方は子より親  
終日禁煙 灰皿文鎮代りにす  
本物にはせ物ほどにしゃべらない

八尾市 片上英一  
柳吉と蝶子もいそう法善寺  
行きつけは南地大和屋すじむかい  
串かつでちよつと一杯 梅田地下  
布施で呑み大和路行の終電車

岸和田市 寺田甚一  
野球音痴も野茂快投に大拍手  
感謝してる言葉の端にもれる愚痴  
二人三脚すぐどちらかがへばり出す  
残り火が何故かじわじわ急きたてる

岸和田市 藪野けい子  
力投へ三奪三振見せた野茂  
通訳が日本語で話すインタビュアー野茂  
塩漬けの株NTTを今も持ち  
投資した株の底値はまだかかない

富田林市 片岡智恵子  
回転の効かぬ頭のミステリー  
土に触れた素足大地と対話する  
馬皮のボールは野茂に合うらしい  
ママゴトの会話オウムは恐いのよ

和泉市 西岡洛醉

赤い花咲いているから回り道  
友住所 浄土とやらへ一つ消え  
法話聞く善男善女で打ち解ける  
文机に昨日の想い自問する

(前月分) 姫路市 中塚遊峰

足るを知る老母のくらしがつつましい  
大切なタンスの宝 友にやり  
毎朝の生姜湯 此の身の思いやり  
老いてなお幸せ種を蒔きつづけ  
言い負けて時代の波をかみしめる

鳥取県 大角正道

降りだした雨にあやまち論される  
素直に生きる誰のためでもないけれど  
ときどきはきれいな星を見て飲む  
生きてきた私についている詠り  
波風をたてずに出世する齢だ

鳥取県 大角幸代

また逢いたくて花へその日の水をやる  
手をつなぐとても素直になつてくる  
天は地と私に雨を降りそそぐ  
わたくしの白は頑固な白である  
頑固なバラはとても真っ赤なバラである

## 第42回 八尾市川柳大会

とき 11月12日(日) 正午開場  
ところ 八尾文化会館4F第1会議室  
(近鉄八尾駅下車 西武デパート東隣)

宿題と選者 (各題2句・午後1時締切)

「結ぶ」 池 森子 選  
「決心」 久保田 元紀 選  
「頼る」 福田 秋雄 選  
「人間」 大路 美幸 選  
「握る」 中田 たつお 選  
「歴史」 鳥本 泰 選  
「見る」 橘 高 薫 風 選

会費 2000円(軽食・鉢植花・作品集呈)  
懇親宴 3000円(希望者のみ)

主催 八尾市・八尾市教育委員会  
八尾市文化芸術・芸能祭実行委員会

## 第22回 堺まつり協賛 堺市民川柳大会

とき 10月7日(土) 午後1時開場  
ところ 堺市総合福祉会館

兼題と選者 (各題2句)

「断り」 岩佐 ダン吉 選  
「長い」 板尾 岳人 選  
「立つ」 中田 たつお 選  
「軽い」 福井 桂香 選  
「勇気」 梶川 雄次郎 選  
「手」 河内 天笑 選

◎席題なし 午後2時出句締切

会費 1500円(軽食・記念品・作品集呈)  
賞 秀句呈賞

主催 堺川柳会

〒593 堺市堀上緑町2丁16-3  
河内天笑 方

麻生路郎の作品とその周辺

# 大空の、い、ろ

(56)

## 橘 高 薫 風

梅田の高層ビルの上階レストランで眺める大阪は年毎に変貌を遂げ、今や大阪城も視界には入れることが出来なくなっている。大阪

城の天守閣の完成は昭和六年十一月だから、この昭和八年には四囲を睥睨していた。市民の服装もまだ和服が多かつただろうし、大阪は水の都、煙の都として繁栄の極にあつた。

日本名所名物川柳(大阪の巻)が麻生路郎選、大西長三郎画のシリーズで特集連載されているので、以下数句ずつ抜粋してみる。

### (一) 道 頓 堀

塗下駄で通る道頓堀の雨  
行先を言わず道頓堀へ出る  
働かぬ指が道頓堀でもて

ついで来いと道頓堀の暗いとこ  
道頓堀通り抜ければ元の吾  
老境をしみじみ道頓堀に知り

### (二) 大阪の夏祭

算盤へ指落付かぬ夏祭  
末っ子は寝冷えしている夏祭  
そない押しないなと渡御を橋で待ち

葉 光  
い わ を  
雨 少  
豆 秋  
冬 光  
夢 裡  
紫 石  
柳 次  
山 雨 楼

御渡御の去年もここで雨になり  
御渡りの神主ビルをふと見上げ  
夏祭大阪城が浮いて見え  
カフェーとは別なあかりの夏祭

### (三) 四天王寺

経木書き筆で参詣者を招き  
社会鍋四天王寺を見逃がさず  
銭の無い顔が天王寺の鳩と  
大つれて四天王寺を通りぬけ  
天王寺松鶴をつれて来たいなり  
絵にすれば雲を浮べる天王寺  
天王寺妻の願いは尊かり

### (四) タ ム

角帯にタムの階段高すぎる  
切れ話タムを兎も角降りるなり  
紅涙もあろう道頓堀のタムの水  
水都祭タムへ大きく寄りかかり  
大阪のタムに蚊ばしらたつている  
大阪をたずねあぐんでタムの風  
あこがれし睡へうつる濡。

冬 光  
え い を  
鮎 美  
三 汀  
俊 翠  
白 峯  
小 柳 子  
豆 秋  
白 柳 子  
波 濤  
青 踏  
い わ を  
山 雨 楼  
翠 夢  
夢 裡  
鮎 美  
八 步  
一 笑

築港で聴くサイレンはうごくなり  
築港の記憶は二階附電車  
築港は女が派手に泣けるとこ  
築港に軍馬の目玉動きたり  
天保山悲しい人もかえるなり  
築港でそれぞれ主家にひきとられ  
築港の土へ置かれたバスケット

### (六) 新 世 界

通天閣子供のよめる字がともり  
新世界家とは違う方へ折れ  
新世界大辻司郎出て来そう  
新世界親に叛いた顔になり  
新世界短気なやつ足を踏み  
白粉焼けの女追い越す新世界  
通天閣に上れば煙りおお煙り  
チャンバラと鱈掏いの新世界  
新世界誤植の多いプログラム  
新世界変態的な人と呑み  
はこずしはよんべの色の新世界  
新世界冬が間近かなアーク燈  
拾い読みしていると大阪人として興味のあるテーマなので際限なく書き取れる。岩おこしや十日戎など、これ以上は省略するが、なつかしい『川柳雑誌』の好作家の活躍、後年親しく聲咳に接した人の若い日の句に深く頷かされる。

鶴 足  
春 光  
雀 踊 子  
鮎 美  
三 汀  
機 見 女  
素 月  
た け を  
一 八  
多 郎  
艸 楽  
山 雨 楼  
柳 次  
葉 平  
紫 石  
か ほ る  
乱 耽  
か ほ る  
山 雨 楼

# 自選集

月原宵明

瞑想の長さじつくり山葵効く  
喜ぶと怒るとすぐに出る詠り  
妻と娘の会話は聞かぬ振りをする  
酒 昼寝 晴耕雨読の一ページ  
止り木へこの界限の評論家

遠山可住

還暦と古希と二つを越えました  
うやむやも一つの処世 両隣  
大根という平凡な多種多芸  
雑草に体ひとつという強さ  
お酒やめなはれが怖いから歩く

有働芳仙

洗脳のみそぎをあびて森を抜け  
ハンカチへ嘘の涙が舌を出し  
その後で呑むスケジュール行くと決め  
年頃の涙 独りにさせて置く  
土壇場でユグの一人が見抜かれず

黒川紫香

ときどきはおだてに乗ってやるも歳  
柔らかいお手々ですねと労わられ  
いい嫁と言われる笑顔持っている  
鷹揚に包んでくれる里の風  
つまらない話が好きなお年寄り

久家代仕男

油断すると真綿に手首縛られる  
晩学の知識 世俗に長けている  
矢絰の矢に射抜かれている織子  
蜘蛛の巣に間抜けた顔がひっかかり  
塾靴提げて寺子屋通いする

藤村女

こだわりが吹っ飛ぶ朝のお早うさん  
野の仏やんわり包む彼岸花  
あやまちを優しくさとすお婆さん  
淋しさを押さえて影も立っている  
八十路来て今は許せることばかり

波多野五楽庵

因縁と因果の縁に立っている  
昔友あり桜浄土に居るならん  
雨囀々 今年も津軽泣きそう  
逢いたくて逢いたくなくて弾くピアノ  
指鉄砲やはり私的にさ

野村太茂津

氣力氣力 自己催眠で夏を越す  
背中より老いる自省に煽られる  
忌憚なく妻の背中老いを指す  
すばらしい老熟 聞く耳持っている  
付き添うてくれるひとあり杖を置き

藤井明朗

人生観 所詮ひとりでは生きられず  
狂人が戦争ごっこするオウム  
友の計を聞く八十路の坂險し  
宗教法人を買う悪徳のいる噂  
いい友に囲まれ百寿へ夢を抱く

金井文秋

笑い飛ばされそうな悩みだから言えぬ  
みくじまで凶と出ている深い闇  
芽が出ると思っていないマイペース  
回虫が蠢き出した無農薬  
練ってみるより発想を変えましょう

八木千代

雨だれの寂しき 順に死ぬつもり  
ビニール傘に縋って荒梅雨を凌ぐ  
雨に疲れたのか紫陽花も首を振る  
それでも泣きはしない 雨の日のひまわり  
大屋根の予言を忘れずに暮らす

松川杜的

鱗一枚おろそかにせぬ眼の輝り（田中一村の世界展を見て）  
奄美の杜 蝶が舞い鳥唄う  
異端者でよし奄美に散りし華  
ひたすらに自然とピカソを愛し逝く  
閻魔さんの土産にと画いた「アゲンの木」

奥谷弘朗

趣味に生き老後に張りを失わず  
気まぐれが歩こう会にも顔を出し  
革新が太って来たらあやしいぞ  
支持率が落ちても市長よくしゃべり  
人生の急所つかめぬままに老い

正本水客

水いっぱいプールから学校 夏になる  
上祐のサイン一万円というあほらしさ  
五十歳は女ざかりと世が変り  
朝顔の家とよばれたこともあり  
まがり角に来てると自分でも思う

恒松町紅

頭数居ても本家は草の丈  
知りすぎて嫌われているお節介  
友好を壊す大人気ない仕様  
頑なにこだわりをもつ指の先  
新聞を隅まで読んで今日終る

児島与呂志

影法師だけが私を信じとり  
もう昔むかしの事など夢に見る  
今少し少女の嘘も聞きかじる  
根来坂ドラマの風に耐えている  
言い訳は自分の嘘は聞きのがし

野田素身郎

さきすぎる冷房 料理まで冷える  
孫に傷つけてはならぬ爪を切る  
雨々々 園児も運動不足気味  
杖をついても様にならない後遺症  
戦後五十年もつたいなくも無駄に生き

大矢十郎

社会主義とれば脱ぎ出す踊り出す  
カラオケに歌謡軍歌は父のもの  
米貰うて貰う交渉うまくやり  
字余りで読めどオウムは読み切れず  
綺麗ごと並べて見ても武に勝てず

工藤甲吉

百姓が鉢巻をする米価月  
八・一五 口惜し戦争未亡人  
電話口ちよつと待たせて義歯を入れ  
顔色をほめられ悪い気がしない  
用の無い人から用の無い電話

辻白溪子

いたわりの言葉に慣れた車椅子  
コーヒーの値段がちがいきる店  
信頼のおけぬ男と酒を飲む  
鑑定書付いてる値段に嘘がある  
男には似合う兵児帯隙がない

小林由多香

美しい夕焼け反旗など振れぬ  
鯛を釣るえびをしつかり撒いておく  
楽しさの中で財布がやせてゆく  
錦鯉 値札を負うた泳ぎ見せ  
美辞麗句並べてゴマをすつておく

小西雄々

自己欺瞞の糸をあやつるのはあなた  
浮世まで余韻の届くルノアール  
姑の強気うわまる嫁が来た  
豊稜の神が強気になれぬ過剰米  
無党派の一票重視する議員

小出智子

わが年を数えて椅子が軋むなり  
母の死後 家には鍵を掛けて出る  
山の絵とわがふる里をだぶらせる  
天王寺詣りする友だちが一人居る  
ご期待に添えないままに終る夏

高杉鬼遊

噴水よ夏の疲れのないように  
タイ米を思う稲穂に風を見る  
気にするな気になる墓のコマーシャル  
釋尼妙寂ごぶさた詫びる一心寺  
英治忌を貧しき者よ笑い合

西田柳宏子

呵々大笑 肚には何もない顔で  
息つまりそうな気配り口乾く  
弾んでる呼吸へ野暮だなインタビュ  
興奮をなだめる水菓食べながら  
オウム教すぐに潰せず法治国

橋高薫風

平成の荒ぶる年の長刀鉾  
あの髭は黒繩地獄からの使者  
平成の補陀落渡海ムルロアへ(仏・核実験)  
どこまでが首かと蛇も思案する  
世紀末おどろおどろの恋もある

## 岸和田市民川柳大会

とき 10月21日(土) 正午開場

ところ 岸和田市自泉会館ホール

おはなし 川柳塔社理事長 西田柳宏子

兼題	「はにかむ」	牛尾 緑良 選
	「美談」	梶川 雄次郎 選
	「返事」	河内 天笑 選
	「まなざし」	小出 智子 選
	「素顔」	阿 萬 萬 的 選
	「波紋」	橋 高 薫 風 選

席題 当日1題発表 深日 白光子 選

◎各題2句 投句締切午後2時

会費 1500円(軽食・記念品・大会誌呈)

賞 文化祭賞・文化協会賞ほか

主催 岸和田市・岸和田市教委  
岸和田市川柳会

## 堺市民芸術祭川柳大会

とき 9月17日(日) 午後1時開場

ところ 堺市立榎文化会館 第1講座室

(泉北高速鉄道とが美木田駅3分)

おはなし 「仁徳陵の謎をめぐって」

宿題	「ふたつ」	中井 正弘 氏 選
	「移る」	重谷 峰彩 選
	「掘る」	本多 洋子 選
	「メンバー」	板野 美子 選
	「すこし」	野里 猪突 選
	「抜く」	河内 天笑 選
	「わたし」	田中 正坊 選
		梶川 雄次郎 選

◎席題なし・各題2句・締切午後2時

参加費 1000円(作品集・参加賞呈)

主催 堺市文化団体連絡協議会

## 小川静観堂

東野 大八

とあるから、麻生路郎と同じ歳になる。

筆者がこの御仁との初対面は、戦争前はあるかな蒙疆張家口の出会いで、岩崎柳路経営の東亜会館の別室で、柳路の招きで出現された時は、赤帯もさつそつたる少佐殿で、蒙疆陸軍病院の三等軍医と名乗られた。

その折、この少佐殿から頂いた色紙は

蒙古風みるみる天を埋めたり

というのである。練れた達筆のそれを貧しい

下宿の壁にべたりと貼りつけたものである。

この句を秀句とみたユエンは、凄まじい蒙古

特有の風塵は体験した者でしかわからないからで、若い当方も名句なりとみたわけだ。

その折、静観堂なる柳号の由来を訊くと、

「自分は元來、人生は万事静観主義と断じて生きてきたから、素直にそうつけた」

と得意のチヨビ髭をなでての御高説だった。

戦後、絶えて久しくこの静観堂先生と対面

したのは、もう二昔も前のことになる。伊丹

市春日丘の広大な青い芝生は千五百坪もあり、

その籐椅子に収まり、陽光を浴びた折の肩書

は陸軍軍医大佐五位勲三等功五級の小川伊

丹病院院長殿であった。

ベレー帽にチヨビひげの、唯一の句集巻頭

にある近影の下的一句は次の通り。

静叔の測で古城跡冬に耐え

「昭和十三年(一九三八)蒙疆張家口陸軍

病院に勤務中、同地で酒場を経営しておられた

た岩崎柳路氏と懇意となり、川柳の手ほどきを

受けました。そして私の作った処女作が

いつそちぎろうかシャツのぶらぶら釦

でありました。その頃、北支那視察、軍隊慰

問に来られた麻生路郎先生に岩崎邸でお目にか

かりました。私の右の句を御覧になった先生

は、初めての句としてはよろしい、この調

子で勉強し給え、モノになりますと、と賞め

たり、おだてたりされたものです。

その後、先生とは二、三度お目にかかり、

雑誌・新聞・著書等で御指導をいただいたの

です」(『句集はいまあと』小川静観堂)

静観堂句集はあとにも先にもこの簡単な、

まるで浴衣がけのような76頁ポケット判のこ

れ一冊きりで昭和45年の発刊。

「浴衣がけのような気軽さで、はいまあと

とまとめられたこの句集、この自序にもある

通り、著者は全くの川柳人である。幾らか若

い頃に俳句の心得もあられたらしいが、処女

句の通り、字余りも平然と作り、それを受け

容れられた路郎師も、敢えて詰屈なカセをは

め込むような凡俗の詩人でなかった為、こ

の出会いから天真さを發揮されたのである。

著者は御存知のような短軀、なで肩、やや

肥え気味で、あたかもエビスさんの再来を思

わす容姿で万人に好かれていられる。お酒が

好きで、伊丹に来られた著者は、とにかくお

元気な方で、とても八十一歳とは思えない艶

々しさである」(同句集序文・湯川銀界)

本名昌男、明治21年8月19日、愛媛県生れ

考えてみると、愛媛県の古城とあれば、もしや伊予五万石加藤藩の城趾のことではないだろうかと一書を奉ったところ、折り返し

「イヨの大洲の、大洲中学校（旧制）の第一期生です。あの城山の白いヤグラの下の脇川の流れ、そして碧潭の臥竜の湖。城山城趾にある陽明学の鼻祖といわれた中江藤樹の垂訓に悩まされての中学生生活でした」

との便りに、それではわが郷里と同じではないかとその奇遇に驚いたことである。それとも夢にも知らず、胡砂吹く蒙古の地で鼻つき合わせての酒席とは……と感無量であった。

「伊丹市春日丘の豪邸に、初めてお訪ねした折の印象は、丸い童顔の横についてる、みるからに柔らかなそうな福耳の大きさ。そのせいか、この人が幾つかの陸軍病院を歴任してきた元陸軍軍医大佐なのかとおどろくほどの柔和で、腰の低いお人柄である。まだ小さい二人のお孫さんに、「敬礼」と号令をかけて、私らに拳手の礼をさせられるので、やはり軍人さんだなあ、といつも感心する。

週に二回、伊丹の自衛隊に診療に行かれる他は、外出されたことがないとのこと、折にふれ、静観堂さんが希望されるころへ車で御案内するので、いつか私を「副官」とみんなが呼ぶようになった。

お会いする度に、戦地でのお話をよく伺った。私は医学校を出たので軍医になつたが、

本当は実戦部隊が好きだった。それで自分から志願してよく戦地へ出たといわれたが、福々しい容貌と低い物腰からは、そんな激しい人柄が感じられなかった。それは八十を越した枯れた人柄のせいであつたのかもしれない。そんな中で、同じ軍医であつた福井野迷路氏にお会いしたいとの御希望もあつて、一度大萬川柳会に御案内したが、野迷路氏が無口な方であつたのと、静観堂さんからは閣下といわねばならぬ上官に当るので、遠慮も手

伝つてか、期待したほどに話がはずまなかつた（有森信之助悼文）

福井野迷路とは、元海軍軍医中將で、なんと東郷平八郎元帥の脈をとつたという大層な先輩で、静観堂ばりのユーモア溢れた人間川柳をコナした御仁。

この両者の顔合せの大萬川柳大会が、古い『川柳塔』誌に載っている。この日の模様を

「小川静観堂元陸軍軍医大佐八十四翁が、みずから兵庫代表として余興に出演。三十九年前に中之島公会堂で、先代右団治や桃中軒雲右衛門と共に一席もち、当時の朝日新聞にこっぴどく叩かれたという因縁つきの『新家』を直立不動でうたわれた、軍人精神横

溢の一席を勇ましく披露された」と不二田一

筆者があとにもさきにも一度きりの、小川医院の豪邸にお邪魔した折、軍服姿の大きな結婚記念写真を見せられ、大いにノロケられたのが昨日のように記憶にある。

昭和50年9月19日死去、行年八十九歳。空淨院傳山寿昌居士。

裏返せば月も人間もよう似とる  
照る日曇る日女房の顔を見る

太陽をぐるぐるまわる恋だつた  
女体にはもう一つあるような乳房

太陽の処女性マリアの脛に落ちずと静観堂さんの以上の句には、お色気も堂に入ったもので、現実にはむしろ恐妻的マジメ人間であつた。一流の庶民的口語駆使は、先生の独壇場で、定形無視も頓着されない無縫の魔術師の杖は、むしろ根つからの詩人であられたのかもしれない（湯川銀界悼文）

死期を前にした晩年の静観堂吟次の通り。

俺が死んでも泣く奴居るまいいい気味だ  
敗戦の責めこの辺でご勘弁

雲に手を振つて亡妻よもうお寝み  
八月十一日という思想で僕の八十年

▼次号は「谷垣 史好」

# 柳籠裏三篇研究 (二十七丁)

七久保博・岩田秀行・紀内恒久  
西原 亮・瀬川良夫・青木迷朗  
佐藤要人・八木敬一

鈴木倉之助 故岡田 甫

## 二十七丁

始末が悪い。何日もブスブスだから、これは経験上のこと。

岡田||同。

346 やきはしやせんと女房いぶす也 高砂

七久保||「やく」と「いぶす」の縁語仕立の句である。

主題句は「焼餅なぞやんないわ」と強がり  
を言いながらも「私というものがありませんが  
女郎買いをするなんて」と心おだやかならず、  
何となく夫に対してつらく当たるとい  
うのである。

女房ハやかぬがたてていぶすなり 八三九

松葉屋へ行て女房にいぶされる 五一二四

鈴木||贊。妬くよりもいぶす方が男にとつて

347 両方へわけて寝るから中納言 高砂

七久保||行平が須磨に閑居していた事実は「古今集」(雑下)の和歌によつて知ることができよう。「伊勢物語」や「源氏物語」などには行平の流罪については触れていない。

西行の撰といわれる「撰集抄」に「むかし、行平の中納言、身にあやまつ事侍りて、須磨の浦にうつされて、もしはたれつうらつたひなどしありき給ひける云々」とあり、これによりて流罪の説が生じ、やがて謡曲「松風」となり、広く江戸の人々に膾炙されるように

なつたのであろう。

主題句は行平が須磨閑居の折、松風・村雨の塩汲みの姉妹と馴れ染んだことを詠んだ句である。

兄弟の中へ寝るから中納言

八三九

寝かへると又したくなる中納言

末四三二

行平のひとりでぬれる雨と風宝八・十・二五

「百人一首一夕話」によると、行平はこの

時に七十歳前後であつたから、松風・村雨の

二女をリードするスタミナがあつたか否か。

是とすれば、彼は余程の絶倫男であつたろ

う。

鈴木||贊。つまらぬ狂句調。

岡田||同。行平が勅勤を蒙つたのは事実だが、

松風・村雨の説話は謡曲の創作。

348 かたみわけ袴を貰ふ家来筋 桂雲

七久保||形見分は死者の衣服や所有品を親族または親友などに分け与えること。一般的に形見分の川柳をみると、

かたみ分うらみつらみのはしめ也 拾三16

かたみわけ已後はいんしん不通也 六四

泣なからまなこをくばるかたみわけ

などと、あまりよい傾向の例句はない。

一三九

一時は悲しみながらも、如何したらより良い品々を獲得できるかと互いに虎視眈々としているものである。

主題句の場合は、武家に任える身であるから、主人が亡くなっても遺品のことで、容喙する資格はない。家来だからその形見の御裾分を受けられたら、如何なる品でもよしとせねばならぬこと。家来だから下に着用するものを受けたであろうとの穿ちである。

紀内いつらみつらみのないかたみ分け。  
かたみわけ田舎ハ繩と竿を出し 二三17  
八木や賛。家来だから下に着用するものを受けたのか、余程の主思いの忠義の臣だったからなのか。

鈴木す賛。家来筋だから主人の肌身につけた衣類とまではいかない。

岡田おかハ八木氏の前半。

349 十五本火鉢の外でたき残り 高砂

七久保しちくほわかりません。よろしくお願ひします。

佐藤さとう柳沢の句でしよう。

幸ひに残る柳も十五本 二一九33

胸算が八十五万石違ひ 一三八17

柳にも雪をれのあるおしい事 二四30

鈴木す佐藤兄さとうご明解。ことは「御家騒動実

記」にも「護国女太平記」が入っている。あらまは、吉保の父、柳沢刑部左衛門安忠と、館林宰相綱吉に仕えた。その子、弥太郎が柳沢美濃守吉保である。綱吉が五代となるや御小納戸役から累進して一萬石の列に入り、お側用人となる。最後に甲府十五萬石を領す。かように異常な出世をしたため、多くの悪評をつけ、実録物などすら現われるに至ったが、もとより妄説に過ぎない。

すでの事柳百本成る所 一一2  
十五本なれハ柳も不足なし 安六松6  
大木にせず柳を灰にする 天五智3

など例句多し。

岡田おか佐藤・鈴木氏すご明解

350 風の神におくられたのは楽天 間々

七久保しちくほ「楽天」とは白楽天のこと。名を居易といい、「白氏文集」や「長恨歌」でつとに有名である。

主題句は、謡曲の神物の一つである「白楽天」を詠んだもので、白楽天が日本の智恵を計れと宣言をうけて来ると住吉明神が漁翁の姿になって現われ、詩歌問答をし、ついに負かして、神風で追い帰してしまったという筋によるものである。

しじう風の神とらく天ハおもひ 安七義3

らくてんハ日本一のはじをかき 一五33  
唐せんたうせんにふくろをはたく風の神 安八義4

また、「白楽天」を題材としたものには「竜神白楽」がある。これは「白楽天」の後段を讃えたもので、「急ぎ漢朝に帰らんとて。吹風に帆をあげ。遙の沖に。出ければ。諸神は悦び引つれく。皆本国に帰らせ給ふ。神慮の程こそ、ありがたけれ」とある。

鈴木す賛。「風の神におくられた」という表現には、当時流行風がハヤルト、鉦太鼓で「送りし〜」と囃しながら風の神を送る習俗があつたからで、この場合はそのあべこべ、白楽天が送られたというコツケイ味。

岡田おか同。

351 あやふきにちか付いて見るもミち也 間々

七久保しちくほ海あん寺・正燈寺の二寺とも近くに魔所があるために紅葉見の客が訪れたと申しても過言でない所。その紅葉をかこつけて遊びに行くことを諺の「君子危きに近寄らず」または「恐いもの見たさ」の語を借用した句。

紅葉狩りどつちへ出ても魔所ばかり三六  
本来が一物のある紅葉なり 天和1

相談ができて紅葉見ひつたらし 八28

岡田おか賛。

# 秀句鑑賞

同人吟 奥田 みつ子

— 8月号から

訪販とこんやく問答してあそび

小砂 白汀

秀句鑑賞をお願いする予定の方の都合がつかず、急速、私が書くことになりました。句の鑑賞には、その人の経験・知識・感性などが表われて、とても怖いことです。もともと作句も怖いことの一つですが…。

今、川柳の五・七・五の形は古いから、自由な形で作句するという考え方があります。

しかし、路郎先生の「川柳とは何か」には「短詩型文学としての川柳は十七音字中心の形式で構成されている。十七音字とは五音・七音・五音のことであり、その配列は必ずしも五音・七音・五音でなくてもいい。七音・五音・五音でも、五音・五音・七音でも、八音・九音や九音・八音のような他のくぎり方でもいいのである。そこに形式上幾多の変化を生じ、川柳の味に深みや軽みや、その他の力を添える上に大いに役立つのである。大たい、それらの音数が一句を構成するのに音律上ゆるぎられる範囲は、十二音字から二十二、三音字ぐらいまでの音数である」とあり、もう一度、この文章をかみしめる必要がありそうです。

一人で留守番をして、少し退屈していたところに、訪問販売の人が訪れた。一生懸命に商品の説明をするのだが、よく分からない。こちらが聞くことに向こうの返事もチグハグになる。買う気はないが、退屈しのぎにトンチンカンな問答を繰り返す。真面目なセールスの人には悪いが、下五の「してあそび」がよく効いている。落語の一場面が浮かぶ。

すれ違つ人とは今日もすれ違う

高瀬 霜石

人間には相性があり、どうしてもしっくりいかない人がいる。相手も同じ思いをしているのでは…。気がつけば家で寝ているブーメランもユーモラスでいて鋭い。

また吠えねばならぬ 飼犬に朝が来る

千葉 風樹

「また吠えねばならぬ」という飼犬の歎き。気持の良い朝であるはずなのに、飼犬イコール人間の哀しさが胸に痛い。

ペアカップ夫婦湯呑とはちがう

安藤 寿美子

同じ対の食器でも、全然ちがうから面白い。食器を詠って、それを飲む夫婦の服装から、会話の内容、話し言葉の違いまで想いを広げられるのも、ペテランの味であろう。

好きなとき好きなこととして許される

栗谷 春子

これは、ある年齢以上の人の特権。「好きなとき好きなこと」と平仮名にしているのも柔らかに効果的である。若い時から、子供のため、家のためと休む暇なく、神経も身体も使ってきたのだから、今、誰にも遠慮せず、安らかな時があつて当然。

私の名ひとり歩きをして困る

堀 良江

思いがけないところで、思わぬことを言はれる。いつの間にかこんな所にまで、と思うことがある。まして、社会的に肩書のある人ならなおさら。句も名もひとり歩きをする。

ふるさとの山に抱かれて酔うている

北川 竹萌

今春、自伝『藁稽の夢』を出版された八十路の竹萌さんの実感であろう。ふるさとのために尽くし、功成り名遂げ、「山に抱かれて酔っている」に感慨が溢れている。

晴れだ晴れだ家中の窓開け放つ

江口 度

上六のたたみかけた言い回しが、この句のすべて。浮き浮きと家中の窓を開け放つてい  
る姿まで見える。

葱壳切れニラも分葱も役立たぬ

亀岡 哲子

この句は主婦でなければ作れない。ニラも  
分葱も葱も、みなユリ科の多年草、色も形も  
似ているから、代用できるよつだが、やはり  
違つ。スパツとした切り口が快い。人間にま  
で想いを広げることもできるが、これは、こ  
のまま、素直に鑑賞したい。

目立たない私の石を持ち続け

柿花 紀美女

この石は人に投げるための石ではなく、宝  
石であろう。たとえ、価値はなくても私は  
大切な大切な石だ。『古里の森で昔の樹を探  
す』の句にも共通する温かさがあつた。

新じゃがを包むサリンの新聞紙

堀江 光子

皮のうすい新じゃがを包む新聞紙にサリン  
の記事が載っている。別に新聞紙にサリンが  
ついているわけではないのに、一瞬、ドキッ  
とする。サリンの新聞紙と新じゃがの取り合  
わせに並々ならぬ目を感じる。

掌から掌へ蜜を移す姉妹

吉岡 美房

同じ掌から掌へ移すのでも、恋人同士とは  
違つ、少女のしぐさが初々しい。

地蔵半眼 世の移ろいの風を聴く

吉川 寿美

町の辻で見かけるお地蔵さんは半眼なの  
かじっくり見たことはないが。でも、この句を  
読むと半眼で風を聴いておられると確信する。  
とりあえずお皿を褒めることにする

岩佐 ダン吉

何でも無い句であるが、世の中、案外こん  
なことが多いのではないか。とりあえずお皿  
を褒めて後、どのようにドラマが展開するか。  
「とりあえず」の導入がうまい。

欲しそうな素振りは見せぬコレクター

嵯峨根 保子

コレクターは喉から手が出るほど欲しくて  
も、決して表わさないから手に入れることが  
できるのであろう。コレクターに限らず、い  
ろいろ考えさせられる。

傘たたむほろほろ心こぼしつ

佐治 千加子

新派の一場面を彷彿とさせる。逢うてきて  
わが家の門口で傘をたたむ、その情感が「ほ  
ろほろ」に余すところなく表わされている。

負けそうになるとカタカナ語を使う

鈴木 公弘

いる、いる、確かにこんな人が居る。カタ  
カナ語で煙にまぐ。カタカナ語で句が生きた。  
遊ぼう遊ぼう思い出がいっぱいになる

大角 正道

真面目な人ほど遊ぶことに罪悪感があるが、  
本当は遊ぶのは大切なこと。可愛い坊やたち  
と楽しい思い出をいっぱい作ってください。  
主婦業の退職願却下する

時末 一灯

思わずウーンと唸ってしまった。男の人に  
は勤めの定年があるのだから、主婦業にも定  
年があつてもよさそつなものである。退職願  
却下など硬い言葉を使って、ユーモラスに仕  
立てられている。

子は巢立ち家の酸素が薄くなる

山口 三千子

子離れた後の空虚・寂寥感、「家の酸素  
が薄くなる」との表現が適確である。

八月十五日 米一粒も流すまじ

岩本 美智子

米一粒でも大切にするのは、日頃から主婦  
が心掛けていることではあるが、この句「八  
月十五日」という特別な日を受けて「流すま  
じ」と強く止めて効果をあげている。

# 私の句

## 六百句記念特集 (1)

本誌の目次ページの右と左に「座右の句・私の句」の欄があり、毎号、同人二人の方の座右の句と私の句（自選句）が掲載され、愛読されています。

この欄は、一九七〇（昭和四十五年）年四月号から掲載され、一回の休載を除いて一九九五（平成七年）四月号まで、二十五年一か月にわたって継続されています。すなわち、三百号にわたって六百人による

る六百句が誌上を飾ったこととなります。

この間、すでに鬼籍に入り、あるいは柳号を変えられた方もあり、また、すべての同人の句が収録されているわけではありませんが、ここに六百句掲載を記念し、四回に分けて掲載いたします。なお、句の漢字・仮名遣いなどは、原則として掲載時のままとしました。

（編集部）

### 〈昭和四十五年〉

凡人へもつたいなくも湯があふれ  
家計簿をきっちりつけてめとらず  
削られてゆく山肌に残る萩  
一家団欒の後芝生に新聞紙など  
戒名はなんとつくやらへソ曲がり  
男みな阿呆に見えて売れ残り  
苦笑して昨夜の夢を反芻し  
家建ててあの世の母の齢数え  
翡翠のごとく澄める心を探しあぐむ

浜田 久米雄  
吉田 圭井堂  
若柳 潮花  
大坂 形水  
工藤 甲吉  
山川 阿茶  
市場 没食子  
八木 摩天郎  
中島 小石

その笑顔 敵にまわせばこわい人  
胡瓜 茄子どっさり漬けて心満つ  
人は人 我が道を往くマイペース  
立読みの間に止んで傘忘れ  
ばやいてもやっぱり夫婦ですの話  
悔いのない今日一日の服をぬぎ  
凡人で人生つがなく暮し  
手弁当できて正論譲らない  
俗に謂う何々のうちに吾もおり

内藤 きさ子  
西出 一栄  
西田 柳宏子  
金井 文秋  
児島 与呂志  
中川 滋雀  
菊田 いさむ  
野田 素身郎  
有信 新之助

### 〈昭和四十六年〉

叱る子のわが幼少に似てわびし  
 絃の悲しみ風が来てかきならす  
 花びらの反抗 露をよせつけず  
 おむすびの上にもさくら散ってくれ  
 悲しけりや、おいでと雲が呼んでくれ  
 芸術の弥次馬として京が好き  
 洋服を着ても大工の癖を出し  
 片手あずけて甘き囁き  
 蜘蛛の巣に顔なでられて鍵を開け  
 気休めの生垣低く低く植え  
 父と子の和みて語らず朝のお茶  
 雑草でよしふる里の土に生き  
 雨やどり老いて旅路のもの思い  
 月へ行く時代なれど神詣で  
 負けん気でなしによかった娘が二人  
 運転をしとれば社長も運転手  
 人生のブレーキせつない音を吐く  
 ほめて話せばほめた言葉が返ってき  
 猫でさえ三日も恩を覚えてる  
 幕切れに涙のままで手をたたく  
 職人の父を尊敬して継がず  
 打明けてくれた十字架ともに負い

原 独仙  
 久米 奈良子  
 正本 水客  
 河内 天笑  
 松川 杜的  
 阿萬 萬的  
 横山 一声  
 直原 七面山  
 竹中 綾女  
 竹中 肖二  
 尼 緑之助  
 藤井 明朗  
 岸 南柳  
 木村 水洞  
 高橋 操子  
 田垣 方大  
 岡崎 祥月  
 河村 日満  
 隠岐 不醉  
 福井 野迷路  
 吉岡 美房  
 八木 千代

雲に手を振って亡妻よもうお寝み  
 堯 舜にまさるうれしい子の善意  
 〓 昭和四十七年〓  
 運向いた時は 人生曲り角  
 人生を問えば山僧茶をすすめ  
 貸傘が親類回りして戻り  
 現実に戻ればひとり風の音  
 合掌をしても雑念かけめぐり  
 忍耐忍耐だれかに囁かれ  
 投げ売りを値切ればあんた去になはれ  
 すて石になつてうれしく雨も受け  
 手をつなごなんて結局みな孤独  
 結ばれた枝のみくじも春を待つ  
 また転ぶ起きる男の貌である  
 釘の音永遠にへだてる釘の音  
 ふみ台になる倅せの重み知る  
 新築の設備良くして維持費に困り  
 残雪に立つ掌があたたかし  
 塩だけは切らさぬ母の台所  
 平凡な夫婦で人に羨まれ  
 自叙伝に恋の頁の遠まわし  
 駅長の拳手で特急通過する

小川 静観堂  
 宮地 双楽  
 傍島 静馬  
 石倉 旅風  
 城 一舟  
 藤岡 花梢  
 天正 千梢  
 野坂 つき子  
 福島 鉄児  
 越智 一水  
 中川 晃男  
 川端 柳子  
 小幡 里風  
 仲 どんたく  
 堀江 正朗  
 山田 季賛  
 三井 醉夢  
 光好 陽子  
 山内 静水  
 林野 甦光  
 大江 秋月

好きと言う心を肩の手が語り

そんなずるさ罷り通る世で酒があり

初春の鏡しみじみ年齢おもう

ここに詩ありて路傍の石となり

ありがとう抱いてイエスにかえる日々

△昭和四十八年△

元旦や我泰山の如く座す

いつの世に俺に後光のさすことか

借金はないが人情に借りができ

お帰りと迎える妻がいて足りる

背伸びしている爪先の痛いこと

イミテーション今日の身飾るにふさわしく

寝たきりの七十になり世の流れ

刺の無いバラになりたい割烹着

プランコの揺れを残して始業ベル

スパルタで家出 放任でも家出

岬まわればもう故里の波の音

のんびりと牛 噴煙に逆らわず

戸を開ける音さえ違う長女次女

遭難の遺品ライターまだともし

献血のひと足先を蚊にいかれ

長かった短かったと夏やすみ

林 瑞枝

小林 孤呂二

村田 瓢太

水粉 千翁

土岐 トク子

西尾 葉

菊沢 小松園

清水 一保

奥谷 弘朗

小出 智子

河野 君子

浅川 八郎

小野 克枝

吉岡 通児

久家 代仕男

宮尾 あいき

浜田 儀一

黒川 紫香

森田 布堂

石川 侃流洞

河井 庸佑

返答無用 腕力で解決し

切れ風の如 去った夫だが日々想う

静けさとあそぶ楽しさみつけたり

女房に買彼られたまんま老い

君が代へ姿勢忘れた日本人

倅せな夫婦で欠伸うつされる

色どりは料理の本の通り出来

ふるさとの山河は母の膝に似る

△昭和四十九年△

仮借なき生きる掟に身が縮む

肉親に抱かれ勲章ひとりごと

おしめ干す手さばき妻の座固し

不発弾抱いておんなが母でいる

人情に負けて返らぬ金を貸し

春雷を遠くに聞いて寝るとする

水仙の花から冬が解けはじめ

かけっこしてはくの雲 君の雲

子の出世肩身の広い親となり

槍となり桶ともなつて子を育て

親よりも息は親の日々思ってくれ

幸福は親子に嘘のない暮し

風車素直な回りようをする

弘津 柳慶

藤村 女

本田 恵二朗

木山 遠二

本多 清人

岩本 雀踊子

西森 花村

川竹 松風

福田 丁路

和田 維久子

村山 光輪

関 美子

両川 洋々

大塚 勇

宮口 笛生

村上 春巳

築山 快夢起

藤井 春日

葛城 伊三郎

江城 修史

戸田 古方

睡蓮は万丈光の光源よ

しずかなる祈り八月十五日

倅うすき人への言葉行きづまる

水飲めば水の味するすばらしさ

ペレー帽被つて鏡見なおす気

バラ開く 朝の心を失わず

なすこともなく脈搏をみていたり

頂上は見えず学びの途遠し

ほつといて見よう息子は嘘が下手

運はあるが掴む力は運でなし

暗闇で靴の個性を探しあて

〈昭和五十年〉

積雪の底から春の水の音

祈るとき人間やナと思う

雨宿りうっかり踏んだ自動ドア

手さぐりの世へ煩惱の骨が折れ

チャイコフスキーの甘さもの憂し老いの坂

満月の地蔵の胸に眠りたし

辛うじて住む東京をうらやまれ

万物に感謝安らかな余生

青春に悔いなし青春の友と老い

足跡にきれいな花の種を播き

橘高 薫風

高橋 鬼焼

高橋 千万子

板尾 岳人

原田 明春

小浜 牧人

三宅 不朽

古川 鶴声

大矢 十郎

長野 文庫

月原 宵明

浜野 奇童

神谷 凡九郎

室谷 徹舟

桑原 喜風

阪上 止庵

高橋 夕花

山根 白星

落合 思月

竹内 翁童

鈴木 村諷子

吹けば飛ぶいのちの今日を長らえる

雨滴すら刹那を光る欲をもち

育つもの育てるものか木も人も

袈裟ころも脱げば毛脛の凡夫なり

メモ帖に今日の句がある主婦日記

半分はきこえてほしいひとりごと

濃い緑一色となり塔沈む

わが道を行く蛞蝓

三遷四遷 孟母を真似て子を育て

さびしさはちよこ一ぱいのわれとなり

靴はいているのに話むし返し

人間の限度で神の重さ知る

嬉しさはひとさまの句が抜けたこと

疑うて信じて夫婦の歴史なる

〈昭和五十一年〉

悟道とは南無阿弥陀仏と言う事か

神様にふれあう鈴を子にひかせ

それぞれの鍋それぞれ味の煮え

春の宵デッカイ喧嘩見たくなる

西風へ西を歩いてくれた父

生かされていのちの重み夫がいる

二人四脚夫唱婦随婦唱夫随

羽原 静歩

嘉数 千代香

川村 好郎

若本 多久志

伊藤 茶仏

遠山 可住

西 いわを

若林 草右

北川 春巢

吉田 水車

宮川 珠笑

松下 梁水

河原 みのる

柳原 静香

小西 無鬼

中村 ゆきを

川口 弘生

大路 美幸

岡村 久志良

堀江 芳子

柳楽 鶴丸

# 水煙抄

西田柳宏子選

今治市 塩路 よしみ

スランプとは哀しいものよエレキバン

紙人形 胸のときめき知らぬまま

生きている受話器の向う生きている

仮りの世に右往左往の日が悲し

私生活みんな知ってる影法師

今治市 田辺 鹿太

近すぎて妻の長所がわからない

国税も市税も払い職がない

マネキンの陰の部分にある尻尾

俗界は男も齢のサバを読む

素人が彫れば仏が笑いだす

堺市 神原 文

好きな酒飲んで血圧下げている

退屈な日にしようむない電話来る

抜きやすい雑草ばかり引いている

お金ない人ほどカード持ちたがる

不景気かうちにも銀行来てくれる

西宮市 牧 淵 富喜子

エンジンのかからぬ体もてあます

頑張ろうという声のあり日が暮れる

近くいて遠いと思う刻しきり

二人とも寡黙になつた熱帯夜

仮りの地の四角い部屋の白い闇

今治市 渡辺 南 奉

愛してるつもり愛されてるつもり

そして朝 雲はつかめぬものと知る

一瞬の迷いで二兎がすりぬける

愛してる百まで生きてほしい嘘

スランプになると神様 仏さま

八尾市 大内 朝子

這いはいをしてからわかる孫の視野

一人居へ夫婦茶碗買うウフフ

いい便りティファニー気分ティータム

紅い風ならばなびいていくわたし

ウンウンとあんたほんまに聞いてんの

富田林市 藤田泰子

大阪市 一本勇太

休み明け企業戦士の顔になる  
吹き降りにやっぱり欲しい男傘  
隠しても手紙の文字が弾んでる  
迎えには来ないで欲しい一周忌  
旅がえり関空で聞く大阪弁

宝塚市 永田 暁風

和歌山市 古久保 和子

男の胸をガラスの靴が踏んでゆく  
花束に寓意ばかりが詰めてある  
これも一つの楽譜なのかも心電図  
お喋りがすぎるパレットで待つ時間  
死者たちも眠る時間だ灯は消そう

名古屋市 藤井高子

趣味 特技 いっぱい書いて不採用  
久しぶり会って夏風邪までもらう  
植え込みの中にモラルが落ちている  
人質のような気分で禁煙車  
ペンネームこれで何でも書いてやる

岡山市 中嶋 千恵子

枕の下を思い出一つずつ流れ  
朝を起しに来たのは今日の矢印だ  
軸足が流されているやじろべえ  
真ん中に父の根を見た七回忌  
ダイエットやせる茶碗はないですか

藤井寺市 高田 美代子

咲き切って芯まで晒す花の種  
視野ひろげ互いを許す相聞歌  
ひと言を吞んで夜風に語りかけ  
夢を追う孫は受験へまっしぐら  
何時の日か乗って見ようか誘い舟

綾部市 藤田 芳郎

待ちぼうけ今夜は眠れそうにない  
山越えて来た極楽の余り風  
朝顔を数えてる間の平和なり  
のっそりと猫も夏バテしたらしい  
一本の釘が見事に効いている

お独りでどうぞと妻がにべもない  
お日柄もよろしく金の要る話  
人間が好きで低空ばかり飛ぶ  
惚けたんと違うか父が礼を言う  
仏さまに熟れたら貰うメロン買う

西宮市 古谷 ひろ子

一心寺 無縁仏がよる句会

義理だけが連名できたお香典

すみません踏まれた方が口走り

自販機に飼いの慣らされて無口です

聞かれると無党派層と逃げておく

新潟県 高野 不二

アンケート何かくれそうだから書く

持参した薬が終り旅終る

一ぺんもささない傘をもう忘れ

誰でもいい訳ではないがほしい嫁

残高がなくてもカード持ち歩く

尼崎市 長浜 澄子

独りから抜け出したくてポストまで

妻の手の堅さに頼りきっている

一抜けて身軽になった紙コップ

シャネル五番まだ幻を追っている

ストレスをゆっくり溶かす糖衣錠

羽曳野市 芦田 絢子

吊橋をこわごわ渡るから揺れる

四畳半 女一人にいい広さ

五月病持ち越したまま梅雨に入る

草を引く幸せ土と生きている

句読点ここから先は譲れない

旭川市 朝倉 大柏

ところどころほんとも混じる裏話

休刊日 一日眼鏡持て余す

常識を言えば古いと弾かれる

泣いた子に泣かした方も泣き始め

八尾市 平川 幸枝

真剣に生きたさかなの目がこわい

まな板のさかな女の目をしてる

お茶漬の顔で広重日本橋

いたわれ少し病気のままでいる

仙台市 小寺 九

思春期という腫れ物に触れない

ただ酒をただと思つて吞んでいる

止まり木に鳥の寄らない日が続く

観光用ささやかに咲くれんげ畑

今治市 野村 清美

割り勘で下戸もちやつかり誘い出す

未来まで子の子の子へと血をつなぐ

一方的に話す電話が切れている

ピーマンへ空気がいっぱい詰めてある

唐津市 浜本 治幸

飲むだけの友達だから遠ざかる

同窓会 花を咲かせる寡婦の群

つきあいも金がかからむと遠くなる

年寄の腰痛 医者は気にしない

泉佐野市 内田倫子

森を出て陽のまぶしさに立ち止まる  
笑顔でも目は笑わないセールスマン  
思考ゼロ金魚の動き目で追って  
泣き言を犬 分かつてる顔で大きく

相生市 中塚礎石

れんげ草もつたいないが荒起し  
单身赴任 男が臭う洗濯機  
テニヲハに間違いがない木の枝葉  
お互いに玉虫色で握手する

十和田市 阿部喜久江

人間の価値は学歴だけでない  
期待したほどでなかった初デート  
親ばなれ屁理屈ばかりならべたて  
倅せになりたく人の倍稼ぎ

高知県 桑名孝雄

忠と孝まだ字引には載っている  
年寄りの冷水ですが男です  
七人も敵がおつたらどうしよう  
ゲートボールいやでゴルフの無理をする

宿毛市 岡村千鳥

還暦がなんだまだまだ恋もする  
子等去んでああ気楽だなさみしいな  
いい明日をつれて来そうな星が降る  
妬いているわけではないがおんなです

大阪市 尾崎黄紅

じいちゃんとはあちゃんがいて一人です  
指切りをするから愛が切れるんだ  
不退転の決意は誰も信じない  
亡母の青春仕立物致します

八尾市 生嶋ますみ

何故だろう嬉しい時も泣けてくる  
能書きを飲めば痛みもなおりそう  
明日もまた怒り笑って終わりそう  
アイスコーヒー妻をねぎらうティータイム

枚方市 前たもつ

茄子胡瓜に朝のあいさつして回り  
仲人を今さら責めている夫婦  
靴音が現役ですと抜いて行く  
罌上で助っ人同士よく喋る

八尾市 村上剛治

降れば降る照つたら照るでやかましい  
転ぶたびなにか摺んで起きあがる  
がんばると言えば安心してる老母  
人氣絶頂 落し穴には気付かない

八尾市 村上ミツ子

かあさんを泣き落とすのは簡単だ  
ひとりごと大きな声で言わないで  
無印になってからでは遅すぎる  
土用丑避けてうなぎを買ってくる

河内長野市 大西文次

約束は逆立ち出来てからにする

紙吹雪桜の花に憧れる

アベックに仁王見て見ぬ振りをする

門灯がついているのでほっとする

横浜市 清水潮華

ふじ色の蛇の目につんと横切られ

大正の価値観を子に否定され

地下鉄の怖く都心へ遠回り

設計図私の居場所忘れてる

札幌市 三浦強一

老婆の小言に明けて暮れる日々

老婆の小言あなたのためと言ふ

老婆の小言みなモノクロの走馬灯

来し方はみなモノクロの走馬灯

堺市 宮本かりん

蹴ってほしそうにあき缶立っている

くされ緑のようにわたしの影ほうし

おぼつかなくて二人三脚しています

政見放送 住みよい国になりそうです

秋田県 湊修水

一泊で芭蕉と会いに梅雨晴れ間

沿道の田に島が浮く珍しき

落ちる陽に心の狭き思い知り

この海に核を捨ててな朝の風

鳥取市 田中友子

子育てを終えて身軽な旅に酔う

死に急ぐようにバイクがぬって行く

歩く日を待てず小さな靴を買う

気取らずに蟹のうまさにしやぶりつく

豊中市 石川勝

パントマイムの熱意に雲は動き出す

馬鹿にするなど大根に花が咲く

ブランドー夫婦げんかもうやむやに

悪人と見破ったのはレントゲン

和歌山県 中村君枝

ほんとうの痛みは他人に語らない

もう齢にまだこれからと鞭を打つ

見暮の強さが語る均等法

お多福もうり顔もあり故郷の宴

羽曳野市 酒井一壺

無人駅 誰が世話する金魚鉢

飼っている金魚が弱り夫婦もめ

古都の雨 蛇の目一本買いました

夫婦して晴耕雨読ロスタイム

和歌山県 山根めぐみ

フワフワと脳細胞が雲にのる

ぼつぼつと草抜きをする無言劇

無駄口を叩いて腹のさぐり合い

人間のメッキがはげる手術前

南海市 谷口義男

掌中の珠を盗られた父の顔  
大臣病罹つて見たいのが本音

似なくとも良いのに似てるのが絆  
平均寿命だけは生きたいなと思つ

鳥取市 岸本孝子  
やじ馬を笑う私がかつけける  
食べるより寝させてほしい朝を抜き

色々とあるが万歳ことがすみ  
万歩計 気休めだけどつけてみる

大阪市 池田一男

夫婦箸どちが先に折れるやら  
直球の生きざま悔いることはない

退職で句点を打って行を変え  
うまし国その日本が揺れている

兵庫県 玉田三重

嫁が来て家族の言葉にござらせる  
通夜のお茶 好き放題に呑む他人

自動ドア開いて気づいた夏の風  
妻の勤とろ火で夫は煮つめられ

鳥取市 植田一京

どん底のいたみが神に届かない  
生意気な口ポット僕を見て笑う

弱い過去あつて妻には勝てません  
袖の下効いてきたのか風が止む

岡山県 富坂志重  
シャッターに手間どりポーズ取りそこね  
人生はこれから薬のみながら

宅配から母の元気が転げ出る  
順番に咲かぬ花にも水をやる

岡山県 大石あすなろ  
葉桜の頃から焦れいつか秋  
いつまでも泥縄式で恥ずかしい

この川で春に目覚めたメダカたち  
おみくじを引いて結んで焦れている

大阪府 澤田和重  
多情多恨 盛った皿とは気づかない  
夕飯のメニューは猫も知っている

ピヤホール星が詩人にしてくれる  
偶然と言う顔にあうピヤホール

今治市 越智青園  
水すまし真面目に今日もパトロール  
いい話聞く座布団を裏返す

蠅たたき持てば殺意が湧く不思議  
ただ今と金魚に言うて一人住む

鳥取県 原みさを  
いい歳と言う分別に縛られる  
三つくらのサバなら神も目をつむる

金に揺れ女に揺れて未だ死ぬぞ  
定石に一つ違った手で生きる

出雲市 浜 圭三

一枚の若葉 不思議にゆれている  
空を見て庭を眺めて深呼吸

五月雨やしきりと人を恋しがる  
歯の治療まだ長生きをするつもり

泉佐野市 河原崎 礼子

静止画像 針千本の顔みせぬ  
生返事ばかりあなたは読書中

王子さま白馬に乗っていったまま  
ネーミング変えてヒットのカップ麺

兵庫県 安達 厚

打ち明けて秋晴れとなる胸の内  
健康法 三つ四つを重ね古希

神風を信じたむかし笑えない  
肩が凝る細い身体が凝る

藤井寺市 楠 昭子

度忘れが多く話の輪に外れ  
馬鹿になり切れたら薬などいらぬ

ありのまま自然のままがむつかしい  
こんどこそ期待ばかりで日が暮れる

和歌山市 木村 親 踏

幻が横で寝息をたてている  
泣けるだけ泣いて女はうどん食う

元氣ないその理由聞けば銭がない  
好きだから許せぬ古い女です

倉吉市 松本 よしえ

跳び越えた川の向うに忘れもの  
うしろから迫る靴音高くなる

あや取りに男が入り纏れ出す  
回れ右して一番になってみる

出雲市 原 章峰

お彼岸のタラップつなぐ虹の橋  
梅雨晴れ間ややとり戻す含み損

落しどころに石を落して静めさす  
梅雨が絡んで森もおんなも美しい

大阪市 中橋 恵美子

詳細地図まず我が家から確かめる  
挨拶のいい娘だ美人に見えてくる

花束と花瓶も持って見舞客  
結婚式次回も僕を呼んでよね

河内長野市 木太久 正一

震災の仕事済んだか釜ヶ崎  
平成七年あと半分は無事祈る

北鮮に米を贈ると言う今年  
空洞化 列島沈む前兆か

鳥取市 藤 ふうこ

蝶が逃げ造花の自信ゆらぎ出す  
ふるさとのいわしが届くクール便

新鮮と書いた野菜に水をかけ  
時効にはしないあの世へもって行く

愛媛県 中居善信

人の肌にまつわる癖を静電気  
アイデアは何処も同じ水車小屋

臆病な母は何時でも遠慮する  
艶ばなし少しばかりかした方がいい

豊中市 藤原桂子

仏壇の夫はいつも聞き上手

花に会い仏に会える矢田の寺

夫とゆく旅の終りは伊根舟屋

踏む砂も今はひとりの須磨の海

高槻市 乙倉武史

人の事許り気にして生きている

冷夏子報 心配症の米の出来

たそがれの欲がまだあり株価見る

サボテンの花の短さ撮ってやる

河内長野市 印藤智子

一人旅こんな気楽をありがと

衝動買い後から地獄ついて来る

これだけは亡母に貰った偏頭痛

梅雨上がり私のうつも今日かぎり

久留米市 鶴久 百万両

旧道の風に押されて蝶になる

マネキンでも抱いて寝ますか月の夜は

流れ矢が怖くて不倫できませんか

俺より先に死ぬなと妻のこと思っ

熊本県 高野宵草

寄進帳見ると反応鈍くなる

良心の痛む仕事金が金になり

ポツカリと老けこむほどの暇が出来

熊本県 岩切康子

草取りを寝坊が起きた頃止める

主婦ながら外出ばかり多忙です

椅子の上 正座してから楽になり

寝屋川市 井上すみれ

包装の合理化まこと粗品となり

福耳が悲しい話ばかりする

情報の渦に血圧剤効かず

弘前市 相馬銀波

轢き逃げの記事に私をダブらせる

忘れ傘また叱られているわたし

握手する別れは泪脆くなる

大阪市 亀井円女

どの医師も遂にガンとは言わなんだ

個室では身の上話するナース

入院でチラホラ見えた別世間

和歌山県 杉山精子

大皿も小皿もあって救われる

自惚れて終る私の初舞台

なないろの錠剤 今日を生かさされる

駆け出しへ傘さしかけた栗様  
人生の達人往生美事です

唐津市 山門 幸夫

山笠を見るボロ椅子の背がぬくい

唐津市 山門 タミ

この事は医者との立場で申し上げ  
物忘れひとときアホを笑い合ひ  
人の知恵 自然の知恵に負けました

唐津市 山口 ふさ子

オウム被害 嵩んだ電気メータ表

土のない庭で毎日土いじり

助手席へ満艦飾が乗ってくる

愛媛県 安野 案山子

子報官 空振りさせて戻り梅雨

ハイレグのギャルにためらいなんかない

お茶を汲む女子大生は採りません

和歌山市 楠 見章子

思出し笑いファスナー閉め忘れ

パンフレット集めただけで盆も過ぎ

ウエスタンかけて疲れを吹っ飛ばす

砂川市 武田 正美

反戦歌うたいつづけて五十年

忘却の波で消せない五十年

戦後史も萎えて私の五十年

泊ってとせがまれている見舞客  
先取りで買った金貨の値が下がり  
六月の花嫁だつて離婚する

尼崎市 野瀬 昌子

倉吉市 山本 玲子

ハードルを上げてやる気をみせてきた  
散策のコースでワラビ取りをする  
松林 青赤黄のテント村

寝屋川市 後藤 黎之助

タレントの名札がほしい永田町

父の日に携帯電話プレゼント

お互いに頑張りましょう黒い服

東京都 清原 悦子

嫁として引かれた線が太すぎる

娘の恋に応援団の母でいる

久し振り青空を見て主婦でいる

鹿児島県 大山 舞鳥影

食事どき病室のぞく鳩夫婦

ドクターとナースを信じ鯉になる

見舞い客と付き添いだけがよく喋る

兵庫県 円増 純子

見過ごした信号今になって悔い

眠れない夜は難しい本開く

びつたりと子感あたって怖くなる

高知県 百田 幸  
丁寧な言葉に少し距離をおく

ボロボロの辞書父さんの匂いする  
素面では言えず呑んだらなお言えず

犬山市 早川 盛夫

一生が何度あるのか願うこと

人前でしか使わないねえあなた

惚れたのか惚れられたのか茶碗むし

米子市 足立 由美子

夏最中もう秋の日を考える

ひばり館見るとプランの中にあり

今頃になってやる気が芽を出した

鳥取県 山内 芳江

贅沢に慣れて不足を並べ出す

一線を越えぬマナーで仲が良い

地酒しか置かぬお店に人が来る

島根県 福岡 博利

かくれんぼそのままそこで眠りこけ

くねくねと拗ねて気をひく葱坊主

ほんとうに多忙か長い立ち話

島根県 武島 ちよえ

今もってソロバン抜きのおつきあい

襷にも帯にもならぬ絆だが

好きでない顔によくよく出合う日だ

静岡県 沢田 きん

あの笑顔優しい人に違いない  
入れ違う札を押し出す両替機

一病が急に私を老けさせる

鳥取市 近藤 秋星

夏休み計画表が立派すぎ

タクシーの運転手には惜しい人

おじいさんと呼ばれることにいつか慣れ

静岡市 三浦 つね

親の目が届かぬところ子は好み

みみず住む畑の野菜無農薬

孫達のやさしい言葉財布開く

島根県 松本 聖子

日々老いる夫の愚痴を聞いてやり

自己紹介どれも立派なこと並べ

スーパーの田舎豆腐も味がおち

摂津市 井上 源一

栗師に呼名一句の春弥生

四男の沙汰を都会の風に聴く

童心に戻るキャンプのサバイバル

島根県 菅田 かつ子

がさがさの掌で幸せを掬わんか

子が便りくれぬ達者と思わねば

冷凍庫閉まる間もない夏休み

兵庫県 北川 とみ子  
切り株に新芽の意地が顔を出す

隙間風他人の痛み見てかえり  
噂など風に流した赤い服

弘前市 須郷 井蛙

スケジュール全部こなしてうまい酒

無記名の手紙が届くサスペンス

お土産の分は充分飲んでくる

唐津市 江川 青琴

無理をして無理が効かない齢と知る

正直であればよいとは限らない

有難い梅雨の晴れ間を大事がり

島根県 三代 朝子

散る日まで花を咲かせていたい夢

ほどほどに妥協しあっている暮し

いい知らせ来るまでみなに黙つとこ

今治市 渡邊 伊津志

アスナロの素直を嫌う風当り

海の蒼 今日を負い目を吸うてくれ

負けるのに慣れて気楽な波に乗る

香川県 山崎 はつ恵

衣食住 片目つむって生きてます

まんまるい月に愚痴など言ってみる

ひとつ覚えふたつ忘れる情けなさ

河内長野市 水谷 笙子

「俱会一処」高野の山でお弁当

転びなや言うて別れるクラス会

立っているだけで駅長さまになり

唐津市 松本 圭

おばけとも遊んだ古い倉の中

ダンボール ケースの中の別世界

新聞の字がゆらゆらとゆれて見え

堺市 谷平 照

離陸する心もふつと軽くなる

さり気なく歩幅合わせてくれる人

ビール飲む私らしい時となる

米子市 鹿島 蘭

愚かにも若返ろうと服を買い

花柄の傘で雨の日はずみだす

一生をかけた結婚だったはず

羽曳野市 麻野 幽玄

冷蔵庫に入らぬ分は腹へ詰め

食べ頃のメロンが三個老い一人

思い掛けぬ人の見舞にはしゃぐ老い

寝屋川市 太田 藍子

母の夢 晴れの日を待つしつけ糸

五人部屋責任問えぬいびき癖

両隣からの木魚に手を合わす

寝屋川市 坂上高栄

まだ足らん万歩計から急かされる

花の声 鳥の声聞く菖蒲園

夏休み単身赴任の父帰る

尼崎市の場 十四郎

もつれ糸解けたら長い愛になる

弱音吐く男で高い山が好き

復興の水は素直に流れだす

香川県の堤くに子

不器用に生きてこの世の裏を見る

夏帽子貰うて地藏涼しかろ

瀬戸の浜 向いはむすめ棲む都

鳥取県の山本正光

ライバルの鉄先いつも光ってる

歯に衣などはいらぬ日々となり

馬鈴薯を掘る掘らないと梅雨最中

岡山県の国米きくゑ

故郷の山が心を開かせる

三猿のままでは越せぬ峠道

喪が明けて女にかえる耳飾り

高槻市の小林一閑

病人はひそひそ話 気にしてる

消すことの出来ぬ歴史に縛られる

隅っこで賢い人は黙ってる

静岡市 浅子まつゑ

定年と言う人生を登り終え

ほんやりと座り幸せ考える

世が進み土に還らぬ物を生み

和歌山県の吉田武治

すみません何時も一言多くなり

ゴミの山 地球のうめき聞こえるか

ああ余生 無邪気にひる寝するとする

岡山県の福原辰江

私の代りはないと腹をきめ

家中の楽しいベルを母が持つ

少々のことでゆれない老父が好き

青森県の西谷鐵郎

幸運に縁が薄いが無事で居る

老いてなお花に心を奪われる

雪肌に見惚れて月も露天風呂

茨木市の久保田恵美子

燃え上がる火にはなれないうろ火です

友達をついつい選ぶ癖がある

牛が寝る向こうにサリン仮設小屋

羽曳野市の川田晋

完熟を待てば野鳥が打つ先手

不眠症 昼寝したのを忘れてる

年寄りの名に相応しくない歩幅

静岡市 松下正枝

眠るまであれやこれやと明日の事

手の届く所で採れる梅わずか

受付は終わりましたとそつ気ない

唐津市 岩崎 實

忘れてる傘に思いをよせており

長雨に被害の出ぬを喜べり

電話する娘はまだ一人元気です

羽曳野市 徳山 みつこ

陽明門にねむって歴史見てる猫

椅子が硬くてノック笑顔もこおりつく

ヨシモトに笑ってばかりおれぬ世だ

高槻市 傍島 克治

土産物 受け取りながら値踏みする

欠点がないから他人にうとまれる

正直に弁解をして馬鹿をみる

尼崎市 岩倉 キク子

しくじって何でやねんと一人ごと

吊橋がこわい高所恐怖症

人生はひとり芝居の泣き笑い

大阪市 平井露 芳

金持ちがしても貧乏ゆすりです

悪い事したらテレビにばらされる

タイガース親がこけたら子もこける

神戸市 向井 泰子

大雨に青いシートも泣いている

ありがとうそのひと言を持って生き

炎天に無色無臭の白い服

広島県 森川 抜智

どっちともつかぬ議論をなが引かせ

おしっこを出すのにビール飲んでみる

退院を待ちわびている万歩計

豊中市 みき わきみ

長雨に感謝 砂漠でない日本

価格破壊だけど修理の高いこと

警笛を鳴らす相手を見きわめる

尼崎市 立谷 勇次郎

均等法 俺にも出来る玉子焼き

誰とでも気軽に出来る片思い

妻の友来れば二階に追いやられ

岡山県 土居 ひでの

虚と実の狭間で揺れる核の杭

結び目が少しゆるんで神の杭

ママゴトの延長線に母の杭

阪南市 正橋 忠男

右顧左眄するなでむし雨しとど

われ思う故にわれあり夜の雨

雨に濡れ濡れて弥増す自己嫌悪

兵庫縣 高見末野

寝返りの闇に亡母が見えて来る  
頼りない母でも我が子 寄って来る  
年金で少し自由な夢を買う

西宮市 池田善守

不景気の森の出口はまだ見えぬ  
町の地理くわしくなった孫の守り  
今度こそ今度こそはと夢を買おう

松江市 佐野木みえ

奥出雲そばの美味しい店があり  
幸運をいつも逃して独り住む  
驚草のすくつと立ったほどの良さ

岸和田市 井斉一斉

裸婦像に負けぬポーズの更年期  
株式の無配通知が威張ってる  
車間距離守り次々割込まれ

米子市 小塩智加恵

居酒屋と言えば家内の許可もでる  
講演会オウムの話まだうける  
酒の味うまいと思うそれでよし

尼崎市 中澤向西

へそくりが煙のようにすぐ消える  
宅配へ孫が真っ先とりに出る  
久し振り父の逆立ちピクニック

寝屋川市 富山ルイ子

息子にも嫁にも味方せず平和  
修羅覚悟 胸に溜まったものを吐き  
輪の外へ弾き出された自己主張

池田市 藤井計光

崩れ落つデパート日本も笑うまい  
人情は紙の如しの遺産分け  
妻がいて歯切れの悪い電話口

鳥取県 橋谷静江

隠し事した日の飯は旨くない  
耳元へ小声で話す孫の無理  
好きだから約束ごととすぐ決まる

八尾市 神原まさと

数字だけすぐに出て来るもの忘れ  
長電話さけてハガキで用を足す  
サンオイル塗って海辺の身づくろい

松江市 松本知恵子

山の端に原風景の陽が落ちる  
秘やかに聞く笹百合の告白を  
笑顔なく求人欄をのぞく群れ

大阪市 中井正秀

山伏の力強さに付いて行く  
口下手は言訳せずに黙々とく  
保険料 払い切るまで死ぬまへん

茨木市 島元ふみ  
少し無理しよう残りの日はわずかに  
開発の森に悲鳴を聞く思い

ちまちまと庭木もあってマイホーム  
堺市 吉本菁風

老いた子が老いたる親の世話をする  
飼主のレベルで犬も躰けられ  
年上がするから下が真似をする  
松山市 丹下美津子

自慢の子育てオウムに攫われる  
花一杯咲かせて女独り住む  
同居する条件 祖父が家を建て  
尾宮弘治

思春期の缺 母娘が噛み合わせる  
飯設住 絆を越えた汗貰う  
菟集の蝶に詫びつつ麻酔針  
松江市 安食友子

ほっとけず断られても手をつなぐ  
土農工商わたしのルーツ知りまへん  
溺れると三下り半を妻が出す  
静岡市 大村正雄

いつまでも生きるつもりで予定組み  
洗車して帰れば夜の大嵐  
悪口を言えばその分言われます

羽曳野市 西村りつえ  
若さかなばんばん捨てていく勇氣  
鳩時計 暑さ呆けて進みがち

各停で涼しさかせぎ白昼夢  
富田林市 欄智久

花言葉紫陽花いやな予感する  
あす雨か神経痛が予告する  
退院日ベッドに軽く一礼す  
豊中市 岸田知香子

バイトの子値上げ前借り休みとり  
グイエットよりも心配事で痩せ  
仕事切れ肩がこり出す貧乏性  
和歌山市 津村武春

飢える児が地球の裏に居る不安  
後ろ指差されてからの不整脈  
悪態をついて可愛い魔女でいる  
高槻市 執行稲子

北向きの窓に厄除けかけて夢  
君が代へ口だけ開けている不信  
ジョーカーを引いて強か目が笑う  
岡山市 藤原一平

白黒をつけると味方 減っていく  
子の投げる石がだんだん大きくなる  
ライバルのチームは美女が揃うてる

貝塚市 池田 寿美子

高槻市 江原 秀夫

距離おいてもつれぬようにする意見  
保険証のコピーはいつも持っている  
善悪を上手くからませ生きて行く

庭木には庭木の心枝を切る  
浄土への切符 毎朝般若経  
ニュース解説ますます冷えてゆく心

東大阪市 今岡 貞人

米子市 林 風子

出直して来ますとセールスくじけない  
芽の出ない僕を笑っている日記  
もめん針 働く汗を知っている

雨の向こう星が誕生したばかり  
鎖から外す逃げない象となり  
子を想う何処へ流れる天の川

唐津市 市丸 晴子

米子市 永井 三津子

マニユアルの挨拶だけはうまく出来  
復興に役立っているはずれくじ  
バトンタッチ済んで見守るだけとなる

寡婦の意地 表の部屋に灯をともす  
わたくしがわたくしらしく生きたがる  
ありがたや何事もなく終える今日

和歌山県 村中 悦男

泉佐野市 稲葉 洋

漢方薬煎じるにおい効くおもい  
ガンバレと試験の孫のテレビ切る  
入浴剤変えて小さな旅気分

朔日の灸をしつかと老い暦  
化身かな身にまといつく墓の蝶  
ポアなんかしないでどうせあとと僅か

今治市 村上 久美子

徳島県 安宅 美代子

百の恥 重ねて一つだけ悟り  
明日の身も知らずに豚の食べっぷり  
仏壇にはこり積っている平和

だだぶの靴で生涯走れない  
鬼の留守どこへ隠そか玉手箱  
ほっといて欲しい年頃気もめる

伊丹市 小熊 江美

島根県 森 茂美

又ピンチそんな時だけ来る便り  
濡れぎぬを間違いだとは言わせない  
医者に行けば旅疲れだと言うばかり

老母看取り終えて虚ろな安堵感  
月並みな挨拶交わす梅雨の朝  
野良犬のボスらしいのが身構える

河内長野市 橋本弘美  
親切な隣ほとほと余す  
すそ分けのそのすそ分けの枇杷一つ  
試食して心ならずも買う羽目に

八尾市 與田明

売れ残りうしろに置けば先に売れ  
薬にも毒にも使う注射針  
一言が多いと十言叱られる

和歌山市 福重美子

清水も汚水も受ける母の海  
日に一度オウムの話聞く日課  
山崩れ気になりながら立ち退けず

寝屋川市 森茜

一句一句うなずき史好集かなし  
ぶつかつてくる素直さに眩暈する  
青鉛筆削る放哉がつぶやく

唐津市 福島紀一

さつき咲く花も答えてくれている  
夫婦旅行なんとはなしに夫婦かな  
ハイジャック一人芝居におどらされ

尾張旭市 三浦きぬ

誠まこと情けは自分の為だった

水平線 地球はやはり丸かった  
意見する私も同じ過去がある

芦別市 齋藤房子  
マスメーム目立ちがりやがひとりいる  
草萌えてまた好奇心起きあがる  
はかなきは人のいのちや沙羅双樹

尼崎市 軸丸勝巳

灰になるまで時効は来ない元兵士  
矢印の通りに行けばガスに遭う  
携帯電話 一人芝居のように見え

大阪市 鈴木トヨ子

人許し心の壁に灯りつき  
一張羅の顔してさとの夏まつり  
軒下がなつかしビルの雨やどり

大阪市 三浦千津子

古里の遠い景色よ村芝居  
浮かれてる夫へ信管抜いておく  
自分史に折れた矢ばかり多過ぎる

大阪市 川原章久

どちらともとれる言葉で買わぬ客  
底抜けの笑いの消えた老い二人  
熱い陽にももの言いたそう野の仏

米子市 池尾保子

新品の靴が大事で雨やどり  
栄枯盛衰 本家の屋根に草繁る  
曲り角まがってからの手をつなぎ

大和郡山市 榎原 慧心

うらやまし美女と野獸の夫婦仲

二匹目のどじょうねらつて生きている

金曜の夜はストレス消えている

鳥取市 山宮 愛恵

赤ちゃんの仕草リズムも詩もある

今でなく明日穏やかに話そうか

一肌を脱ぐいのししで好きになる

高槻市 芦田 静江

ギャル御輿孫恥じらいもなく担ぎ

裸一貫おとこは八起き目を生きる

主張する嫁のあとからついていく

鳥取県 藤山 弘子

ビー玉を拾い集めて金魚鉢

無農薬野菜を作る老いの汗

小声でも地獄耳には届きます

宝塚市 黒台 伊佐武

思い遣り勘違いして受取られ

憎いのに逢いたくなつて情けない

心では許していても厭と言ひ

静岡市 中西 雅

白シーツ眼を刺す梅雨の中休み

山肌のどうだんつつじ眼をうばひ

心まで緑に染めた山の道

静岡市 永倉 柳華  
ドアチェーン用心深く住むおんな  
殿方の猪口は美人に寄りたがり

出雲市 荒木 恵美子  
生き方をひっそり変えて歩きだす

静岡市 佐藤 次枝  
風の中 勝手な時に神だのみ

悪口を言つて溜飲下げている  
出欠の届出やつと意を決す

砂川市 中里 つね一  
草千里 風の行方に足が向き

変る世を棹のさばきで生きている  
熱帯魚ガラス越し追う小さい指

姫路市 福島 姫女  
剪定の疲れワインで暑気払い

兵庫県 倉垣 恵美  
裏切りも演技もしない雨蛙

ゆさぶればたしかな欲が残るだけ  
河内長野市 妹背 尽呂久

顔見たらやつぱりできぬ仲直り  
出欠の返事を決める台所

寝屋川市 籠島 恵子  
楽しくてやがて重たくなる仲間

おかげさま苦勞を舐めてきたらしい

岸和田市 亀井皎月  
サテイアンへ行ったカナリアもう啼かぬ  
リストラが進み馴染みが見当らず

犬山市 森正

老いの日々割り切っていて口けんか  
犬を飼う反対しても餌をやり

高槻市 庄野澄子

おくりもの無理しなはったなと思ひ  
承諾の笑顔に一寸無理がある

大阪市 松永会美

てのひらに温もり残し師は逝きぬ  
さるすべり真っ赤に咲いて陰涼し

寝屋川市 北岡波留吉

円高に便乗してるバスポート  
神様が色気を煽るギャル御輿

寝屋川市 宮崎菜月

蟹に似て穴を違えず帰宅する  
わが心とても見られたものじゃない

寝屋川市 太田とし子

歴史街道こよなく愛す道しるべ  
七夕もはるか遠くなる願ひ

大阪市 岡本久峰

車道脇ここにもねぐら敷布団  
兄サンと呼ばれ奮発するミナミ

米子市 木村春枝  
置き場所を変えたばかりのハブニング  
鍵っ子のいたずら書きがうますぎる

米子市 堀江美月

ぬるま湯の暮しに私錆びて行く  
大切な火種冷凍しておこ

鳴門市 八木芳水

子は宝 世間知らずが増え続け  
不思議だな美人の絵だけうまく描け

島根県 槻谷仲子

人の知恵 窺っているカラス二羽  
あの話聞かなかつたらよかつたに

松江市 浦辺静江

舞台裏いつもお酒が置いてある  
仏様 内緒の話筒抜ける

鳥取県 橋本多哥由

人生の窮屈な道のぼつてる  
人形の衣洗濯して変える

鳥取県 奥谷彩子

半眼を開き世を視る人を見る  
鈍行で温かそうな村に佇つ

鳥取県 高尾京

平和への誓いゆるがぬ原爆忌  
父の日に鮎を頼まれ釣りにゆく

八尾市 鷺見章  
梅雨晴れの街へ押し出す車椅子  
美しき人 美しき手話の指

兵庫県 中野とよ子

全快の喜び赤飯分かち合い  
まわり道 今度は運に乗る番だ

和歌山県 藤井春子

変化球 投げて相手を打診する  
パチンコへ退屈なひと誘われる

千葉県 大川晚翠

甘皮の健康隠すマニキュア  
無農薬 虫がつくので嫌われる

出雲市 西尾和子

ビヤガーデンたくましく飲む女たち  
喜びをぐつと堪える時の顔

岡山県 福原悦子

追憶の切符一枚破られず  
手を貸さぬりハビリ情に見守られ

佐賀県 木屋広一

何時の日か目尻の小皺気にかかり  
言葉では易いができぬボランテニア

和歌山県 吉村さち子

たのしくて余命のことが気にかかる  
逆転があるやも知れぬ影法師

和歌山県 山裾かず子  
会釈して通う背中のレストランセル  
身勝手なうわさに私まけません

和歌山県 中後清史

今に見ておれと冷や飯食べている  
三猿の意地を張り合う寒い風

和歌山県 木村初子

思いつきの絆 紡いでいる余生  
愚痴いわぬまだ足と爪切れている

和歌山県 上岡正直

やんわりと断わることを考える  
山田さん一日知事によく似合う

香川県 高橋たみ

風呂の湯気みんな美人にしてしまふ  
セーラー服と朝の挨拶よい日です

香川県 田中ふみ

物溢れ冷蔵庫からゴミが出る  
子の住まぬ家へ風入れ昼寝する

弘前市 櫻庭順三

臆病の風に押されて先に発つ  
醜悪粗悪 太っ腹には通じない

鳥取市 坂田和歌子

頑張ろう仮設小屋から見える星  
何らかのドーピングして生きている

魚心 水心あり横流れ

縦糸と横糸の妙夫婦織り

飽食のグルメよ奢り過ぎないか

背信の胸にざんげの石を積む

反省もその日その日で気まぐれで

テレビ見て体操真似て呼ぶ元氣

たこ焼のついでにまわる投票所

旅帰りシジミの汁で生き返る

古い一人 淋しいときは経を読む

金のない身内ちからになると言う

頼まれてきれいさっぱり忘れてた

小遣いがほしい自分で買うと言う

足し算が下手で茶ばかり飲んでいる

借金をして見栄を張る意地を張る

無器用な指だと思つてセロテープ

暑い日が続き墓参を無精する

鳥取市 津村 静枝

日立市 加藤 権悟

福岡市 井崎 ミサ子

宝塚市 飯西 ミサヲ

姫路市 服部 一典

沖繩県 杉谷 一栄

尼崎市 森安 夢之助

大阪府 原 美恵子

二の腕の傷は短氣を物語る  
夫婦でも他人のようにも言わす

いじめなの仲間外れにされたのも  
辞表持つ勇氣はたかが知れている

一人より旅は二人がもつとい  
上と下ミシンの糸がかみあわぬ

松江市 松浦 登志子

宍道湖の夕陽にみとれけつまずく  
見送りもこの踏切りで引き返す

松江市 小西 素子

背のびせず一步一步と地味でよい  
遺言状 短氣おこすな欲だすな

富田林市 山原 昭水

故郷の岩に座つて町を描く  
ふるさとのお墓に野花供えます

交野市 山川 日出子

来た日から帰る帰ると孫が言う  
パイオとか野菜の季節まで変わり

出雲市 川島 和歌子

和歌山市 和田 美寿子

樫原市 西本 保夫

松江市 松浦 登志子

松江市 小西 素子

富田林市 山原 昭水

交野市 山川 日出子

出雲市 川島 和歌子

鳥取市 谷口 侑里

カンニングしたけど答違つてた  
中元を贈り済ませて医者通い

吹田市 西岡 豊  
赤い灯に見透かされてる腹の内  
一泊に唄と踊りがセットされ

静岡市 増田 扶美

草刈りもすんで緑の風に酔う

ああ義足 歴史を変えた日が疼く

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

両刀を使えぬ妻と向い合う

ふぐ料理あなたとならばいただけ

池田市 木村 一笛

街中の雑魚は雑魚なり目立ってる

泣き寝入り子供のほっぺ皆こつく

鳥取県 吉田 孔美子

薄物の女を誘う合歡の里

引き合わせただ事でない気をつかい

鳥取県 岩崎 みさ江

建前を剥いで本音を確かめる

孫の目と心かよわす腰を折る

鳥取市 岸本 宏章

総領に生まれて重い荷を背負い

白バイにびびったり付かれこそばゆい

泉佐野市 大工 静子

子宝のお札参りに矢田の寺

老いの用 洗濯物をたたむだけ

西宮市 岡本 道子  
真実を誰に告げよう青ほおずき  
殴られるほどの悪さか耐える釘

箕面市 木村 天弘

定期健診 脳の検査は別と言う

憧れの据え膳に酔う妻の旅

出雲市 中村 トク子

紫陽花がはにかみながら頬を染め

今宵また誰を待つのか月見草

鳥取県 権代 康女

路郎師の面影追えば遙かなり

手術台ああ神様よ仏さま

尼崎市 向井 末貞一

幸せを気付かぬ平和呆け進む

気取ってもたかが知れてるツケ焼刃

米子市 服部 朗子

我慢して長い看護を口にせず

いちにちが明るい門の花ひらく

倉吉市 山中 康子

捨てようか情けかけるも紙一重

スタミナに土用鰻が大いばり

尼崎市 河津 正治

毒舌の中の薬味が身に沁みる

良く効いた葉内緒にして居れず

しくじりを陽気に笑う電話口  
明珍の火箸がすずしい夏の音

枚方市 森本節子

老いの眼に大胆な洒落分かりかね  
隣保班 一人暮らしも均等割

熊本県 増田一乗

優しさを知らぬ振りしてやんで居る  
夏場だけ生花は活けぬ蚊がふえる

海南省 南口和子

耐えた母わたしも耐えている婚家  
初盆を迎える友の写真帳

島根県 谷岡婦美

財布だけがっちり持ってぼけた振り  
カタログが夏だ中元だと急かす

大阪府 遠藤正敏

クラス会 孫の話で盛り上がる  
すきま風ゆれる心に亡母の声

出雲市 加藤スズコ

ライバルに見せたくはない水面下  
女です灰になるまで燃えたいの

今治市 白石サダ子

パソコンを習って孫に冷かされ  
戦後五十年 生きた見本がここにある

大阪府 乾哲静

なすすべも知らず住みつく善と悪  
二度の職 努力努力もままならず

岡山市 山磨行子

親馬鹿と思う息子もそう思う  
朝市に専業の主夫われひとり

高槻市 古見萬勇

ああ言えばこう言う相手ほっておく  
時々手綱ゆるめて泳がせる

鳥取市 福永ひかり

ひいき目に見ても勝てない駒の位置  
綿菓子をねだられついで行く祭り

羽曳野市 山本たけし

笹巻きを包む母の手遅くなる  
母さんがこっそり通う英会話

島根県 安部美恵女

快い杏子の種の肉ばなれ  
垣根越し怒鳴る相手は猫らしい

鳥取市 山本崇

決心がついてのんびり湯に浸る  
お節介またまた財布軽うなる

兵庫県 酒井靖子

月並みの祝辞にムード白けだす  
レットルを貼らぬ地酒の味が良い

鳥取市 杉本孝男

鳥根県 児玉幸子  
朝咲いて惜しまれて散る沙羅双樹  
お食事にはこれに六道湖 七珍味

東大阪府 松山隆

慈悲のある観音の手がもどかしい  
我を通す親の意見が留守電話

大阪府 勢理客 トミ子

戦争はもう忘れない夏木立  
車酔いせぬが梅田の人に酔い

福岡県 本田忠男

がらくたに商売がある村祭り  
ガス事件 旅館マスクの備えする

羽曳野市 福田悦子

またですか台風ラッシュ泣く九月  
鯛雲 秋はあなたの側にいる

寝屋川市 瀧本八十八

抱く不安 日本あちこち活断層  
演習でふと見た空にキノコ雲

大阪府 今西静子

あの日から母はひとりの戸籍抱く  
きびしさは生き抜くことと知った風

兵庫県 大谷幸次郎

土用丑うなぎは知らず餌に群れる  
猿知恵か英知か知らず妻の知恵

大阪府 中田 あい子  
よい人とみられて席をゆずらされ  
あばれるといわれ亥の年あばれすぎ

鳥根県 岩田三和

吉の札コンピューターから出てこない  
文化村だから水力自給の灯

静岡市 小木久子

夜店には財布の口も軽く開く  
キッチンへ男気軽に出入りする

(前月分) 弘前市 須郷井蛙

通勤は三分なのに車買い  
休日は二食 昼から缶ビール

樹齢千年見事に生きた肌を撫で

広島県 森川 拔智

藤の花腰をかかめて通りぬけ  
病室の花ゆれている浜の風

### 水煙抄・茴香の花の選者交代について

水煙抄および茴香の花の選者は、7月15日締切・9月号発表分から交代して、水煙抄は西田柳宏子、茴香の花は八木千代となっておりますが、『川柳塔』7月・8月号の作品募集欄には、高杉鬼遊、西出楓楽と掲載しました。訂正し、お詫びいたします。

# 湖抄

## 小出智子選

六法全書のどこにも愛は出て来ない  
虫搏つてたわいなき死を手にのせる  
鉛筆を削りに立って空の青  
雨を待つ吾一本の苗になる  
帽子かぶらぬ児はすでに自我を出し  
つながつている足跡の一つひとつ  
妻を亡くしてボタンには穴がある  
父の中に学ぶ男の良き悪き  
纜の許す範囲でゆれている  
ニュース暗ししばらく初夏の風に佇つ  
老人会写真映りが悪いと言う  
「オイ」と呼ぶ亭主関白ではないが  
菩提樹の下で悩みが深くなる  
雑音がはいる補聴器はずしく  
近所には葬式以来恩がある  
きつちりと飲んだ葉があまつてる  
正座して読まねばならぬ本もあり  
大阪弁通じるところで気兼ねなし  
振り向くな母の声聞く丸木橋  
退院日門を大きく開けて待ち

鳥取県 新家 完司  
西宮市 岡本 道子  
五所川原市 斉藤 嘉  
弘前市 相馬 銀波  
八尾市 宮崎シマ子  
米子市 林 荒介  
宝塚市 永田 暁風  
吹田市 山本希久子  
鳥取県 江原とみお  
寝屋川市 堀江 光子  
唐津市 浜本 治幸  
高槻市 乙倉 武史  
米子市 鹿島 繭  
大阪市 本間満津子  
松原市 小池しげお  
横浜市 菱田 満秋  
吹田市 栗谷 春子  
川西市 松本ただし  
弘前市 佐治千加子  
唐津市 山門 幸夫

前の車について走っていた不覚  
古傷に愛染祭が触れに来る  
友だちの財布も鈴がついている  
罪のないジョークで笑う小銭入れ  
六十歳まだ現役の傷のあと  
荒波の岬回ってからひとり  
ものごころついて花火の赤を憎みける  
終章は私の彩で舞うつもり  
着くずれが出だした私もライバルも  
遺言状のような日記になってしまふ  
わが年を際限もなく甘やかす  
カタログを見ている妻の目をのがれ  
膝抱いて無念無想の羅漢さま  
男の友情おんな立ち入る隙がない  
仏にも鬼にもなれず二日酔  
華やかさなくとも父の日を祝い  
内緒ごとなんにもなくて夫の留守  
阿と呟をつなぎ合せた夫婦の絵  
白鷺のすつくと一羽田に立てり  
わが影も濃く生きてみん鳳仙花  
らつきように梅漬け終り邪気払う  
夫は旅でゆるりと舐めるアイスクリン  
星の雫うけて梅干艶を増す  
楽しみを朝の菜園から貰う  
思い切り手足伸ばしてから素直  
麦藁帽に亡父の面影亡父の汗

岡山県 小林 妻子  
富田林市 藤田 泰子  
八尾市 高橋 夕花  
名古屋市 藤井 高子  
八尾市 宮西 弥生  
鳥取市 小谷美ツ千  
尼崎市 田中 薫  
豊中市 辻川 慶子  
米子市 政岡日枝子  
島根県 松本 文子  
尼崎市 春城 年代  
大山市 早川 盛夫  
弘前市 一戸 ツネ  
倉敷市 小野 克枝  
岡山市 藤原 一平  
香川県 成重 放任  
西宮市 西口いわゑ  
出雲市 園山多賀子  
米子市 林 風子  
河内長野市 水谷 笙子  
大阪市 松尾柳右子  
西宮市 門谷たず子  
岡山県 矢内寿恵子  
倉吉市 最上 和枝  
八尾市 大内 朝子  
羽曳野市 吉川 寿美

バックミラーどこまでも過去ついてくる  
 回り道自分の地図を広くする  
 原点にかえって虹をもう一度  
 唐突なチャイムだ味方かも知れぬ  
 陽の当る方へ傾く枝も人も  
 ペン先が昨日の続き書きたがる  
 這い上がる縄一本がみつからぬ  
 水鏡心のゆれを映し出す  
 たそがれの坂で愛語を集めだす  
 今日をめぐって明日にころろを預けよう  
 頑固な石は橋のふもとにおいてくる  
 病む人の方角星に折るのみ  
 父と子の距離を縮める政治論  
 ありがとごめんが妻にまだ言えぬ  
 いくたびの挫折へ電話してくれる  
 “めし”の文字すくのうなつて美美子の忌  
 浮気ではないよ駅まで歩こうか  
 雨上がるなにはともあれ腰上げる  
 袋掛けの苦勞を癒やし桃熟れる  
 鏡よ鏡この老いはれはだあれ  
 病室から見下ろす街は生きている  
 子は巢立ちやつと夫婦のレクイエム  
 しばらくというおクスリが効いてくる  
 兄さんの土の匂いをふところに  
 一円を押し戴いてレジ通過  
 測量が済んで自然がまた消える

西宮市 奥田みつ子  
 八尾市 村上ミツ子  
 米子市 林 瑞枝  
 尼崎市 長浜 澄子  
 大阪市 北 勝美  
 米子市 堀江 美月  
 堺市 桜沢あかり  
 堺市 宮本かりん  
 大阪市 西出 楓楽  
 富田林市 池 森子  
 米子市 澤田 千春  
 東京都 山口 新子  
 和歌山県 杉山 精子  
 綾部市 藤田 芳郎  
 大阪市 稲本 凡子  
 八尾市 片上 英一  
 青森県 田中 叶  
 旭川市 朝倉 大柏  
 和歌山市 福本 英子  
 兵庫県 遠山 可住  
 鹿児島県 大山舞鳥影  
 和歌山市 山口三千子  
 和歌山市 木本 朱夏  
 米子市 金山 夕子  
 寝屋川市 井上すみれ  
 和歌山市 桜井 千秀

故郷は鳥も親しい声で鳴く  
 洗面所の鏡はとても正直だ  
 そのうちに妻の荷物になる子感  
 枇杷実る社宅不況とは見えず  
 遠い日の約束石になつてゐる  
 わだつみの叫びが脳裏から消えぬ  
 留守番のたのしみ姉を呼ぶプラン  
 もめ事が好きな補聴器老眼鏡  
 恨みっこ無しに長屋の水浸し  
 振り向かぬよう渾身の杭を打つ  
 まだ飢餓を知らない鍋の底磨く  
 女子寮からあけつびろげな声がする  
 万病に効くと言われて飛びついた  
 花も木も植えてわたしの防風林  
 わたくしのためアンパン焼いている  
 いろはにほへとちりぬる夜半のさくら哉  
 かえられた靴のかかどがちびていた  
 本当の自分がわかる負け戦  
 ショーウインドー女の溜息にくもり  
 注意書に明日は淵瀬と書いておこ  
 久し振りとときめくものをひた隠す  
 図書館のかすかな和音本を繰る  
 手抜きなど出来ぬ性格肩がこり  
 悩みごと母は上手に繭にする  
 開発か保護か見守る森の栗鼠  
 失礼を詫びるチャンス逃すまい

鳥取市 植田 一京  
 羽曳野市 芦田 絢子  
 高槻市 川島颯云児  
 八尾市 神原まさと  
 鳥取県 西原 艶子  
 和歌山市 宮口 克子  
 枚方市 森本 節子  
 唐津市 市丸 晴子  
 大阪市 日坂 秋子  
 米子市 白根 ふみ  
 砂川市 大橋 政良  
 堺市 神原 文  
 米子市 光井 玲子  
 和歌山市 古久保和子  
 米子市 寺沢みど里  
 唐津市 浜本久仁於  
 今治市 矢野 佳雲  
 羽曳野市 田中 透太  
 奈良市 米田 恭昌  
 大阪市 藤田頂留子  
 鳥取県 石谷美恵子  
 和歌山市 岩本美智子  
 米子市 小塩智加恵  
 高知市 桑名知華子  
 茨木市 藤井 正雄  
 貝塚市 池田寿美子

臆病だから誘惑には負けぬ  
カナリアは歌を忘れた振りをする  
妻と子が不信任案審議中

ころころと笑う本音が読み取れぬ  
体重計が危険信号出している

色即是空今宵の月がまん丸い

敏感に騒ぐハートを持つている  
人間を笑う鴉に羽根がある

病歴を披露しおうて五人部屋  
小さい傷シャワーで流すほどのこと

だんだんと苦い薬が効いてくる  
利き足が明日へあすへと飛びたがる

控え目な女に風が凪いで来る  
満たされぬ思いを壺に溜めている

弱者です隣近所と仲が良い  
一石を投げ逆風待っている

ことと言う時阿吽の友がいる  
一つだけ褒めれば妻のかくし味

行商のお国訛りに気を許す  
妻も齢近頃猫と仲がよい

雨の日は雨のリズムで惹きざむ  
貧乏が甘い声して寄ってくる

七十歳自覚する時しない時  
相づちが少しずれてる昼下がりに

風船と種がつくつたい話  
肉親へ花三年の事故現場

唐津市	久保	正剣
茨木市	堀	良江
寝屋川市	岸野あやめ	
鳥取県	鈴木	公弘
大阪市	上田	柳影
京都市	松川	杜的
倉吉市	野口	節子
鳥取市	武田	帆雀
泉佐野市	河原崎礼子	
大阪府	榎山	隆
出雲市	竹治ちかし	
和歌山市	榎原	公子
香川県	山地マツエ	
和歌山市	山田	高夫
寝屋川市	後藤黎之助	
富田林市	片岡智恵子	
京都市	都倉	求芽
今治市	塩路よしみ	
鳥取県	西川	和子
福岡県	横地	東川
堺市	黒田	真砂
八戸市	島田	昭治
豊中市	安藤寿美子	
守口市	結城	君子
羽曳野市	徳山みつこ	
大阪市	渡部さと美	

反骨で存在価値を認められ  
不覚にも泣きたいとこで笑う癖

七夕にかける願いが多すぎる  
独占欲あり平凡なおんなです

それなりに波がたつてる金魚鉢  
涼し気なポロシャツ甘酒吹いて飲む

思い出す事あり易の灯に怯え  
噂などそしらぬ顔でいるゆとり

あじさい寺強い陽ざしは似合わない  
あれ以来地下鉄乗車恐怖症

一石を投げて人気を確かめる  
出発へ心弾ますとかが花

空かんを拾う勇気を買ってやる  
真実を語って溝を深くする

醒めた目で日本史観のやり直し  
先生が言っていたって聞かぬ孫

久しぶりの母にいい顔だけ見せる

九月号から、平成八年度の作品を頂くこととなります。どうぞよろしくお願致します。

宛司さんの句。当然のことが書いてあるのに、この句を読んで改めて頷いたことです。六種の法律によって、法治国家として秩序は保たれ、個々の愛も護られていることを知らされます。道子さんの句。自身が博つて死んだ虫を掌に置いて、じっと見詰めている作者は、命というものを考えられたのです。嘉さんの句。句には何の作為も見当らない。ありのままの思いを纏められての雑詠の佳さを見て頂きました。銀波さんの句。自然を頼りの農作業をされる人の、切なる願いを「一本の苗になる」との表現は深く読む者に伝わってきます。

海南市	谷口	義男
今治市	村上久美子	
鳥取市	前田	一枝
和歌山市	玉置	当代
八尾市	村上	剛治
守口市	森川まさお	
姫路市	中塚	遊峰
倉吉市	奥谷	弘朗
岸和田市	古野	ひで
唐津市	筒井	朴竜
羽曳野市	酒井	一壺
静岡市	沢田	きん
米子市	宇波屋太郎	
鳥取県	上田	俊路
東大阪市	松山	隆
和歌山県	村中	悦男
鳥取県	原	みさと

水煙抄

# 秀句鑑賞

— 8月号から

大橋 政良

腹立てる事が無いのも淋しいね

谷口 義

腹を立てることを忘れた心の丸さが、淋しいねのひとことで、痛いほど伝わってくる。テレビを見ながら憤慨する、単純な自分が少し恥ずかしくなった。

金のない縁者はかりで仲が良い

木村 親路

金が万能の世の中、いざこざの発端は、金が引き金になっているようだ。そこにゆくと貧乏はしているが、心の温かい肉親の思いやりがほほえましい。

誘うたらまたの機会と逃げられる

小林 一閑

最近の車社会のもたらした弊害か、または女房殿がきびしいのか、上役をこきおろして飲む、うまい酒を忘れてしまった。プライバシーに土足で入り込む野蠻さを嫌ってか、軽

く体をかわされてしまふ。淡々としたタツクで人情の機微を掴んでいる。

深い訳聞きたくなった紙コップ

的場 十四郎

地の果ての駅まで信じていてゆく

山宮 愛恵

人を信じられなくなった男と、どこまでもついてゆくこうとしている女と、対照的な心理描写が、私の心を掴んで放さない。

無事旅を終えて保険が惜しくなる

村上 剛治

人間の欲がこんなところまで微妙に動いている。人間の心理をズバリ言い得て愉快ではないか。

どん底を見てからはもう怖くない

松本 よしえ

この句を読んで、どん底を見た人間しかわからない、一つの開き直りが伝わってくる。

酒はよい俺とお前の仲にする

前 たもつ

酌み交わす一ぱいの酒から、十年の知己のように振舞える、酒が楽しい。

無駄なこととしている時が楽しいな

宮本 かりん

こんな時間のある人がうらやましい。『楽しいな』とは言い得て妙。

仮設にも花嫁がきたふだん着で

古谷 ひろ子

未曾有の被害を出した阪神大震災の悲惨な状況が稲妻のように脳の中を駆けめぐる。避難所の不自由な生活、胆づ玉母さんの奮闘記、十数日ぶりに救出されたワン公など、報道されつづけられた震災のニュースが、この句を読んで一べんに噴き出してきました。被害にあわれた後、間もなく結婚された明るいニュースが強く残っていただけに、ふだん着で、という言葉が印象深い。

そつと覗いてみたい私の死んだ後

村上 久美子

こんな形で、嫉妬と言おうか、未練とでも言うか、死後の自分を見ることができたら、素晴らしいドラマが楽しめることだろう。

馬の顔長うて馬は馬らしい

大西 文次

あたりまえの事を、当り前に書いて、こんな楽しい句ができるとは、造化の神の傑作をかいま見せていただきました。

終りに心に残った秀句を列記します。

それぞれの闇を背負っている笑い 暁 風

阪神が負けると妻は取り乱す 鹿 太

やりくりの巧いおとこでよく遊ぶ 美代子

老い楽し年の数だけ馬鹿になる 大 柏

# 尚香のむ

八木千代選

ふらんすばんほどの頑固を持ち合わせる  
 わたしが厭なことは他人も厭である  
 風鈴の他力に徹しきる音色  
 大それたこともついでに書く手帳  
 カラスよう鳴く日銀行口座閉じ  
 ダメージは尾骨弛めて始まった  
 生まれかわったら生まれ変わったらと稼いでる  
 かげろうの向うにもあるあわだち草  
 その方が得かも知れぬ回れ右  
 手も耳も攫われそうで立ち上がる  
 山の奥でとろとろしてる風でない  
 梅雨が明けたらこころを真っ先に干そう  
 原色の母降ろさせてもらいます  
 そそくさと白旗あげる訳でない  
 母の過去おもうこの橋渡るたび  
 綾取りの手順で昔よび戻す  
 左 右どっちにしても己が道  
 種ぼつんと皿に落としてひとりの西瓜  
 陰干しをすると話がうまく行く

和歌山市 木本 朱夏  
 大阪市 本間満津子  
 米子市 林 風子  
 吹田市 栗谷 春子  
 豊中市 安藤寿美子  
 松江市 安食 友子  
 八尾市 宮西 弥生  
 米子市 青戸 田鶴  
 倉敷市 小野 克枝  
 和歌山県 小倉 アサ  
 米子市 政岡日枝子  
 藤井寺市 高田美代子  
 弘前市 肥後和香子  
 尼崎市 長浜 澄子  
 和歌山市 宮口 克子  
 熊本市 永田 俊子  
 米子市 鹿島 蘭  
 大阪市 堀 いくの  
 和歌山市 古久保和子

理が勝って青いりんごは落ちたがり  
 時計もペンもわたしをすこしずつ刻む  
 自然淘汰まだ必要とされるらし  
 百科事典のページを歩く無為の日々  
 空気淀んで頭の上の重石  
 肩書きにこだわりすぎるアヒルの子  
 立ち読みで充電している軽い飢え  
 わらび餅老いに優しい風がある  
 時の流れに軋む椅子なら未練ない  
 父母のいろ脱色させてたくましい  
 赤い土少し夕焼け食べている  
 明日からまねる森光子の笑顔  
 予告には無かった今日を演じ切る  
 妻に勝てば怖いぞ後の揺り返し  
 正直に言うてしもうた後始末  
 あの方の指を刺すまい鬼薊  
 当用漢字もつばら辞書に頼っている  
 深奥にくいこんでくるシヨベルカー  
 消去法で残る本音にうろたえる  
 フランス小咄がとてもし上手なピーコック  
 今はただ喜劇の人になっておく  
 行間で読み取る癖がつく手紙  
 向う岸までの余白を漕いでいる  
 手を清めいつかはすがる千手観音  
 どの花も逆らうことは知らず咲く

大阪市 神夏磯典子  
 西宮市 西口いわゑ  
 米子市 白根 ふみ  
 西宮市 奥田みつ子  
 米子市 林 瑞枝  
 和歌山市 福本 英子  
 羽曳野市 吉川 寿美  
 尼崎市 春城 年代  
 和歌山市 桜井 千秀  
 寝屋川市 平松かすみ  
 鳥取市 酒田和歌子  
 和歌山市 榎原 公子  
 岡山県 山本 玉恵  
 米子市 石垣 花子  
 具塚市 池田寿美子  
 和歌山市 福井 桂香  
 米子市 野坂 なみ  
 西宮市 牧淵富喜子  
 鳥取県 岩崎みさ江  
 名古屋市 藤井 高子  
 寝屋川市 籠島 恵子  
 東京都 山口 新子  
 米子市 寺沢みど里  
 八尾市 高橋 夕花  
 鳥取県 田村きみ子

TPO携帯電話容赦なし

喋らない貝のお腹がふくらんで

目が薄く冷たい目にも気がつかぬ

ときめきを風はわすれたのだらうか

針の穴 万本数え生きている

長話みぞれの背丈気にしつづ

うわつくと鏡がこわい顔をする

信号無視いつかの私見るような

真心はこっそり運ぶものですね

猿の威嚇 人が尻尾を垂れだした

気が付けば渦のまん中でもがいてた

こっくりをしたから合点したらしい

テープカット リボンの端が腑に落ちぬ

限りあるいのちゆつくり髪をとく

半分が味方だったら上出来だ

納骨を写す遺愛のカメラにて

蔓草よ地蔵縛ってなんとする

巻きついて離れぬ蔓になっている

あの会もこの会もあるホームラン

絆とは子とは納豆糸を引く

やさしい顔で靴をふまれている

倒れかけた自画像ささえてる私

孫よりも犬がかわいい時がある

子の気持 先取りせずに待ってやる

あの星の横は私の予約席

大阪市 津守 柳伸

鳥取県 最上 和枝

米子市 茂理 高代

鳥取市 小谷美ツ千

米子市 堀江 美月

守口市 結城 君子

大阪市 町田 達子

羽曳野市 芦田 絢子

兵庫県 円増 純子

米子市 田中 亜弥

大阪市 鍛原 千里

出雲市 園山多賀子

鳥取県 倉垣 恵美

鳥取県 西原 艶子

乳呑子も乳をはなして聞いている

雑音だけいやに大きく耳にいる

裏切りを許せたつもり自己欺瞞

母となる顔はきらりと光ってる

この一念 岩を通して見せますぞ

どんぐりの群で個性を磨いてる

線香の灯し方にも老姉妹

うちのひと踏み台にして壁登る

札束を見たら畏敬の目に変わる

クラス会一合の風に逢いたくて

重箱の隅から波が押しよせる

沈黙の好きになわたしの貯金帳

再会に名で掘り起こす半世紀

真実はまだ書き切れぬま余白

鳥取市 前田 一枝

枚方市 森本 節子

和歌山市 岩本美智子

和歌山市 和田美寿子

米子市 光井 玲子

鳥取県 羽津川公乃

西宮市 秋元 てる

八尾市 村上ミツ子

倉吉市 米田 幸子

米子市 木村 春枝

兵庫県 北川とみ子

岡山市 川端 柳子

米子市 服部 朗子

鳥取市 植田 一京

木本朱夏さんの句―朱夏さんの句は心情が匂います。ふらん

すばんのお洒落っぽさと、はじめて食べた日の歯ざわりの対比、

この頃は鉛入りだつてあるんです。女らしい彼女の内側に触れ

た気がします。香りがあります。本間満津子さんの視点は謙虚

です。一歩も二歩も引かれた姿にまわりまで静かに和らぎます。

惻隱の情こそうたごころの源泉だと、つねづね思っているので

すが、自然体を書いてくださるから、読む方もすんなりと

満津子さんの心に入ってゆけます。林風子さんの句には作者の

精神姿勢が見えます。硬い語感もかえって効果的に響かれています。

風鈴に託したごころの音色はひたぶるに響きます。真剣です。

粟谷春子さんの句は「ことのはひたぶるに響きます。真剣です。こ

ころが味噌です。大それたことが何やら面白くすぐりがあります。あ

雨

羽津川公乃選



雨グツズ揃えて雨の日も楽し  
 パチンコの楽しさ知った雨やどり  
 雨たのし傘一本で足りる仲  
 水滴が残るバラソル恋しきり  
 移り気の雨に泣いてる花時計  
 寺が好きあじさいが好き雨が好き  
 菩提樹の下に雨宿りをしよう  
 雨三日あちこち電話したくなる  
 雨だれを亡母鎮魂の歌に聞き  
 雨に負け風にも負けて抱く孤独  
 写経するところに沁みる絹の雨  
 戦災忌胸に焼き付く黒い雨  
 ハイテクの世に雨乞いがまだ残り  
 傘さすと小さな世界出来あがる  
 雨つづきビールがまずいので困る  
 雨の音忙中閑に酒がある  
 良い雨だ悪い雨だと人が決め  
 よく当たると予報も憎い今日の雨  
 浮世絵の雨は斜めに音を立て  
 罪を消す雨なら凜と濡れていく  
 毒消しのように浴びてる俄か雨  
 雨の日へ読みたい本を積んでおく

慰霊祭の余韻が雨を歩かせる  
 私も雨が嫌いとうまが合い  
 紫陽花を多弁にさせる銀の雨  
 わたくしに罪はないけど雨女  
 雨男通夜の晩から降りはじめ  
 雨しとど聴く校正のペンをとめ  
 どしゃ降りの雨がシナリオかえさせる  
 狐雨にだまされ虹を褒めていた  
 基金会へ行こう手頃な雨が降る  
 青い瞳の僧が竹む雨の古都  
 京に降る雨は京都の音で降る  
 雨の日は雨のリズムで竹を踏む  
 もう泣かぬ涙かぬ女の雨嫌い  
 雨よありがと一冊読み終える  
 窓際で一番さきに雨を知る

新造 盛夫 鉄治 和歌子 清芳 倫子 隆風 典子 彩子 大柏 たず子 高夫 甚一 照孝 孝男 宵明 ちかし 洋 俊子 さち子 寿恵子 艶子

雨の日は富士の葉売りが来る  
 ポツンポツンと悔恨も雨だれも  
 グム満ちて蛇口へ雨のありがたさ  
 雨三日平気な顔でいる金魚  
 雨のポストへ別れましようという手紙

天弘 あやめ よしみ 寿美 しげお 白光子 あすき 雄々 帆雀 正剣 南奉 杜的 蝋 保州 佳雲 是はお 希久子 可住 正子 美代子 京子 満秋

若いつていい斜面一気に駆け上る  
 赤い糸すぐに手繰っている若さ  
 お若いと言われてそっと鏡みる  
 若者の冷えた心と向い合う  
 おしゃれして六十路若いと言われたい  
 たとう紙に若い私をたたみこむ  
 村祭り今年も若い顔が減り  
 老若の味とりませて夕ごはん  
 青春をとときとく捜す古日記  
 若かった終戦記念の写真見る  
 情熱のかたまり若き日の無謀  
 盆の島 若者乗せてフェリー着く  
 輪廻転生若い命の芽が伸びる  
 Tシャツの胸つきあげている若さ  
 お若いと言われつついつい無理をする  
 砕け散る波青年の主義主張  
 春雨に濡れた若さも速くなる  
 ぼろぼろの辞書ににじんだ青春期  
 ファミコンの虜にされたおじいちゃん  
 一直線そんなあなたの目が若い  
 パーゲンの指輪若さで光らせる  
 呼び止めてほしい若さの鼓動鳴る

若 い

小林一夫選



よしみ 時弘 あきら 三重 姫女 寿恵子 清芳 艶子 強一 博友 とし子 明水 めぐみ 露児 晋 高夫 多賀子 洋 清史 美代子 さち子 愛論

ひまわりの元気が似合う女生  
若いねと言われやっぱうれしいよ  
背中にもある若者の反抗期  
二〇歳の頃は弾んでいたボール  
一筋の若さを残す紅を引く

若い血がさわぐ妥協など知らぬ  
酸欠のデイスコで若い血が踊る  
五十歳まだ若僧でございませ  
若いから着ても脱いでも美しい  
若い日の写真が褪せていく早さ

若者はジーンズで乗る国際線  
若い血が一直線の恋をする  
若い頃の疵は言わない古帽子  
そんな目で見ないで私の若作り  
色褪せた写真に若い僕が居る

夢を抱くあみどり児の土ふます  
他愛ない若い言葉に立ちくらむ  
愛も憎も忘れ眠っている若さ  
若き日の日記葉が挿してある  
まだ若い積りで明日の米を研ぐ

風の駅から旅立った若かった  
若いっていいなあ海が風いている  
抵抗はなかった若い日の勅語  
若者の影連なりて夕木立

和歌子 一壺 志重 美子 正雄 勇太 雅城 一花 ちかし 隆 ひで たず子 克治 喬水 晴子 玉恵 希久子 虹汀 一平

仕立てる

有働芳仙選



仕立てるもの届けてはつと母の顔  
シリコンの乳房見事な出来上り  
新入りをロボットに仕立て悦に入る  
褒め言葉孫を良い子に仕立てあげ  
盆栽のようににはゆかぬ子の仕立て  
黄八丈 仕立て直して亡母を着る  
仕立て屋に体のくずれ叱られる  
知らぬ間にアイドル歌手に仕立てられ  
衣替え仕立てておろしの糊の効き  
入社式仕立てておろしの紺映える  
味噌仕立てて亡母が自慢の匙加減  
偶像に物ってたかって仕立てられ  
仕立てて得意の母の手が欲しい  
荒縄に汗も締めこむ鉾仕立て  
モデルハウスどれも特別仕立ててなり  
お下がりや仕立て直して育った子  
母子家庭ミシンの音に夜が更ける  
お揃いの浴衣仕立てる夏祭り  
結局は妻の好みに仕立てられ  
初孫へ仕立てるゆかた手が弾む  
冗談に仕立ててて釘を刺しておき  
仕上がった晴着に孫のおちよぼ口

よしみ 照 次男 シマ子 宵草 礼子 南奉 よし津 武史 俊路 武春 美州 美子 良江 洋敏 倫子 ちかし 典子 四郎 晴子

時弘 旋風 義男 志重 大柏 新造 俊子 ちよ 寿美 さち子 白光子 久仁於 倫子

仕立ててゆつくり髭を剃る  
可住  
影武者を仕立ててゆつくり髭を剃る  
天  
仮縫いのままであなたに嫁ぎます  
門合たず子  
再婚の見合いへ紅の色を選び

# 初歩教室

題一カ

吉岡美房

形は五七五になっているのですが、作者の存在感がなく上つ滑りになって深みの無い句が散見されました。決して初歩からむずかしい表現は要求しませんが、作者の心が見えるような句作りをお願いします。

それでは添削句から発表します。

実力がないのででかい声を出す ますみ

(実力の無さを補うでかい声)

力ずくますます固い貝の蓋 秀夫

(貝になる娘へ無力知る意見)

単身赴任見送る夫力なく 一典

(単身赴任私の力送りたい)

力瘤孫と比べる細い腕 姫女

(力瘤くらべを孫に挑まれる)

力瘤過去のくらしの証言者 方子

(生きて来た命の証 力瘤)

優しさを内に秘めたる力こぶ 鐘造

(優しくして美男の上に力持ち)

茶柱へ今日一日の力出す

志重

(茶柱へ今日も希望の力瘤)

チャンス待ちこっそり磨く力瘤

りつえ

(チャンスまでしつかり力磨いとく)

我が家の四隅ママがとつても力持ち

和歌子

(細いけどママが一番力持ち)

皮下脂肪の下は柔和な力です

玲子

(優しさと力を秘めた皮下脂肪)

呱呱の声力は無限若き母

文子

(母と子に無限の力呱呱の声)

底力出し切り初声高らかに

トヨ子

(初声に総身の力ふりしほり)

力負けした振りして孫のばす

彌弘子

(伸びて行く孫の力を讃えよう)

気弱な癖に力んで見せる孫がいる 円女

(気弱だが私の前で力む孫)

曾孫泣く抱く力なし見てるだけ

因静子

(曾孫抱く力を皆に危ぶまれ)

孫話すポパイの力はほうれん草

日出子

(孫はまだポパイの力信じてる)

腕相撲孫にやっばり出ぬ力

隆

(腕相撲孫の力に負けておく)

力には弱い女を笑えない

照

(女には口も力も負けている)

ゴールまで走る力を蓄える

ミツ子

(人生のゴールへ力蓄える)

弥陀の力仰ぎ慕うて八十路坂

ツネ

(八十路坂弥陀の力にすがりつく)

百歳と生きよう力湧いてくる

八重子

(百歳は生きるときめて力湧く)

二人三脚老いて力まずかばい合っ

俊一

(支え合う力で越えて来た二人)

猛暑に張り切り婆さん力尽き

ふさ子

(猛暑来 乗り切る力萎えてくる)

満身に力を入れて唄う老

美寿子

(カラオケで老いの力をふりしほり)

体力の衰え新湯きらう夫

幸枝

(体力の衰え弱気見せる夫)

晩年だぐつと下腹力いれ

半畳

(晩年を乗り切る余力溜めておく)

老いて行く力はないが気力あり

タミ

老いてなお力おきなう気力持つ

忠男

借金が残りくらしの力抜け

君江

(ローン済み何か力が抜けたよう)

肩パット力を抜くと楽になる

一乗

(肩パット力を抜くと楽になる)

次期抱う力だ君ら通学生

美羽

(頼もしい力が育つランドセル)

おじょうさん芸では力弱くなる

とし子

(お嬢さん芸で力が入らない)

力貸してと無理を承知で言うてくる

とし子

(ポリーナスで返すと力借りに来る)

今更に力不足が身にしみる

一壺

(頼られて力不足が悔まれる)

その日その日を力一杯生きている

例 静子

(毎日力を一杯生きている)

力一杯天志す青い葦

正

(青い葦力一杯天を指す)

つい惚れた金も力もない人に

太郎

(惚れたのは金も力もない男)

彼の愛力すくでも向かせます

知香子

(力すくだろうが欲しい彼の愛)

顔ぐらい貸すが力にはなれぬ

孝男

(金のことだけは力になれぬ僕)

薬の力借りて元氣をとりもどす

多哥由

(点滴が僕の力になつて行く)

実力者常にけい古を忘れない

剛治

(稽古の虫とどん力つけて来る)

心にも入れておきたい力すな

タミエ

(心には私支える力綱)

綱引きの側で旗振る力持ち

ふみえ

(綱引きの綱に力がかじりつき)

目に見えぬ花粉の力悩まされ

よし子

(この私泣かす花粉にある力)

寄り合つて力引き出す霜柱

信敬

(寄り合つて土持ち上げる霜柱)

方円の水の力が恐しい

高栄

(方円の水で暴れる力持つ)

山門に力みなぎる仁王像

旭

(山門の仁王は力もてあます)

力走へ沿道拍手惜しまない

志華子

(力走のゴールへ拍手鳴りやまず)

エサ運ぶアリ全身の力込め

三重子

(集団の蟻の力に見た凄さ)

知らず知らず力の入る大相撲

ふゆ子

(場所中はテレビ機敏で力む父)

名古屋場所力のこもる名勝負

例 和子

(今場所も力一杯名勝負)

力すく押し切る政党今いずこ

幸夫

(一党で押し切る力抜けた党)

権力は多数の方に行くしくみ

あいや

(権力に靡く力を笑えるか)

着想・表現ともに立派な句

落選に力及ばずしか言わず

瑠美子

腕力はないが根気で勝負する

例 幸子

求愛の雄の力は命がけ

仲弘子

力水つけてやりたい蟻の群れ

かず子

非力さを補う頭よくまわる

芳水

力にはなれぬが愚痴は聞いてやり

義男

悲しみに力尽き果て座り込む

辰男

いざという時に女の底力

行子

喜寿の坂力も知恵も底をつき

勝巳

継続は力と信じ句をつくる

彰

力なら僕に負けない妻が居る

円高へ最後の力ふりしぼる

宏章

やりくりに見せる私の底力

君枝

正論も数の力に押し切られ

武治

処世術 深慮遠謀力抜く

ルイ子

ライバルに負けたくなくて力みすぎ

彩子

力関係子の目はちゃんと知っている

絢子

力には力火種を持つ地球

黎之助

縁の支ええる石にまだなれず

幸次郎

指相撲出番なかつた力瘤

まさと

言い勝つて肩の力が抜けて行く

めぐみ

本当の一人になつた底力

キヨエ

こつそりと母の力を借る電話

三重

握る手に思慕の分だけ力込め

美津子

父逝つて思わぬ母の底力

美子

父母の力を越える葦となれ

アキ

力むのはよそう名もない花だから

淳子

筆力はまだ衰えぬ父の文

強一

### 私の句

核持つて力競べがしたくなる

男だと言える力は秘めている



題「元氣」9月15日締切(11月号発表)

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

# 路郎賞 候補作品中間発表

## 川柳塔賞

平成七年五月号〜八月号

### 路郎賞候補作品

#### 小池 しげお

ぼっくりと逝けたら拍手してほしい

弁解はしない男の靴すべり 玉置 重人  
目を入れてからのダルマはよく転ぶ 稲本 凡子

海軍の星は桜の花だった

土橋 螢

大往生 虹が出ているお葬式

新 正子

油断してゆっくりでできる人と飲む

榎山 隆

順番が来るし残しのないように

吐田 公一

避難してもう三度目の瓜を切る

秋元 てる

フルコース水が一番うまくった

江原とみお

最少しませるとみんな寄って来る

久谷まこと

春蘭が芽ぶいて疑惑とけました

細川 稚代

他人様の火の粉を被ることはない

浅野房子

本番になると小さく見える的

平田 実男

来た道に残して置こう花の種

園山多賀子

花菖蒲とり越し苦労せぬように 辻川 慶子

#### 板尾 岳人

おとこには男のいくさ種子を播く 林 荒介  
ほんまですほんまにいのち考える 上田柳影  
マイペース短針すこしも悪びれず 小砂白汀  
夢だけを残し女の焼く手紙 小野克枝  
石は永久 人を裏切ることほなし 山海友照  
まごころを知ってる豆のまるさかな

憧れてまだ近寄れぬ紫よ 大角 幸代  
点滅の余生に下絵まだ序章 本間満津子  
終章へあけずにおこう玉手箱 久保 正剣  
夢と風かさなりあえば詩を孕む 松本ただし  
なすこの文字に涙の淵れるまで 田中 隆  
火の匂い花の匂い一日よ川流る 輝子  
いつも赦し許し濁ってゆくばかり 時広 一路  
裁くには傷つきやすき白桃 政岡日枝子  
野村 京子

#### 吉岡 美房

火の匂い花の匂いにする土偶 政岡日枝子

どの指も一つのビジョン持っている

大橋 政良

おとこには男のいくさ種を播く

林 荒介

振るたびに短くなってゆく尻尾

江原とみお

弱虫が集まり怖いことをする

本間満津子

弁解はしない男の靴すべり

玉置 重人

人間国宝 壺に流れる思づかい

宮西 弥生

午後三時 疲れに紅をさしてみる

西原艶子

まごころを知ってる豆のまるさかな

大角 幸代

これも縁 同じ呼吸で生きてゆく

小谷美ツ千

やさしさの真ん中に居てひとりばち

石原 淑子

シャッターの遅さに笑顔くたびれる

池内かおり

アリバイのために指紋を残しとく

氏林洋敏

ひとを恋う胸に流れている小川

高瀬 霜石

明日散る花にも水をかけてやる

赤川 菊野

#### 小島 蘭 幸

孫が来る可愛い曾孫抱いて来る 田口 虹汀  
事故現場踏んでゆくのはみな他人 木本朱夏  
父になる練習せず父になる 千葉 風樹  
一日がジョークで終わることもある

金山 夕子

ネクタイを選ぶ楽しいひとときよ

小谷美ツ千

弱い人と比べてばかり弱くなる

新家 完司

大往生 虹が出ているお葬式 新 正子  
サティアンに一本もなし鯉のぼり 靄山 隆  
どの辺りからあの世だろっか空深し

藤解 静風

耳鳴りが今も鳴りやまない戦後 三宅 保州

頑固さは寿司屋に任しとくことに 江口 度

弱虫が集まり怖いことをする 本間満津子

彫刻展 裸婦はいずれも逞しい 榎本 落児

トキが消えた次はニンゲンの番だ

高須賀金太

輝いて妻が温泉から帰る

佐々木鳳笙

## 河内天笑

死ぬまでどれほど水を汚すのか 新家完司

似たような話があつて救われる 田中 輝子

恐ろしいことにはふれず花の下 松本 文字

赤ん坊の泣き声 存在感がある 大橋 政良

九十になつても明日を考える 川村 映輝

深刻な顔で演じている喜劇 上田 俊路

淋しさと背中合せのこの自由 赤川 菊野

目を入れるまでは謙虚なダルマです

玉置 重人

フルコース水が一番つまかった 江原とみお

選挙には行くが政治家信じない 高瀬 霜石

迷つたら買わないことにする財布 新 正子

私を円くするより術はない

石原 淑子

躰かぬよう慎重に背伸びする 園山多賀子

とりあえずお皿を褒めることにする 岩佐ダン吉

仏像をほとけになつて彫っている 野坂なみ

## 川柳塔賞候補作品

### 宮口笛生

半壊の柱けなげに立っている 牧淵富喜子

転んでも起きても街は笑わない 田辺 鹿太

新聞に名前のほど悪じやない 小寺 九

嘘をつく人に仲間頼み込む 大西 文次

平和呆けしそつ冒険したくなる 岡村 千鳥

八起き目が済んで今度は転ぶだけ 亀井皎月

話はずんだなかなか酒が出て来ない

松本よしえ

禁煙を立派なことのように言う 安野案山子

好い顔をしようと思えば金がいる 権代康女

貧乏は気楽泣きたい時に泣く 渡辺 南奉

以心伝心嫌いな人に嫌われる 與田 明

方程式越えぬ男でつまらない 長浜 澄子

腹立てる事がないのも淋しいね 谷口 義

金のない縁者ばかりで仲が良い 木村 親路

知らぬ間に毒がまわつていた日本 村上剛治

### 川島 諷云児

泣くほどの種も仕掛けもない夫婦

安宅美代子

貧しくも明るい妻の片えくぼ

大村 正雄

自分史をアツハアツハと振り返る

久保田恵美子

似たような喜劇私もその一人 村上久美子

のと鉛を噛む連題の黄が眩し 松本知恵子

他人ならぐちに相槌つてるのに 内田 倫子

天井に句を遊ばせて不眠症 堤 くに子

貧乏は気楽泣きたい時に泣く 渡辺 南奉

以心伝心嫌いな人に嫌われる 與田 明

魂を売らぬ誇りの無位無冠 流 奈美子

連れ糸最後は母に縋りつく 吉村さち子

百態の雲 百態の風を生む 原 章峰

ふとこころにしまつ炎となる秘密 遠藤 正敏

そのうちにロボットだけになる地球

高田美代子

いい夢が膨らみすぎたシャボン玉 島ひかる

## 榎本吐来

待つ人がいるしあわせな急ぎ足 岩崎みさ江

やんわりと言われきくつとして帰る

ぜいたくな猫で困るといふ自慢 西村りつえ

黙つたら黙つて妻が注いでくれ 楠 昭子

入園式 母と女の顔がある 柳倉 大柏

補聴器を忘れ言葉のない笑顔 浜田 良知

嘘をつく人に仲間頼み込む 尾宮 弘治

考える人で終るか花も見ず 大西 文治

南座の余韻が雨を歩かせる 平川 幸枝

真剣な妻が鯛の前に居る 今西 静子

年度末また公道を掘り起す 桑名 孝雄

妻と腕組んで歩いたことがある 高田美代子

君が代は忘れまじと疵を見せ 石川 勝

尾崎 黄紅

色あせたのぼり好評分譲中  
母の小言 信号待ちの顔で聞く  
傍島 克治  
富坂 志重

### 小林 由多香

桁ひとつ消したら此の世住みやすし

高田美代子

余震なお孫の怯えが治らない

円増 純子

たとえ話が嫌いになってゆくさくら

原 章峰

今日の胃は素うどんだけで丁度いい

古久保和子

アクセルとブレーキどちら踏むべきか

木村 親路

以心伝心嫌いな人に嫌われる

奥田 明

目立たない特技持つてる落ちこぼれ

藤井 春子

校門を出ると子供の顔になる

坂上 高栄

目に余ることを見た日の目を洗つ

武島ちよえ

さわやかな朝だみんなのパンを焼く

山宮 愛恵

子のために祈ることしかしてやれぬ

村上ミツ子

父の日を忘れぬ嫁がいて嬉し

浜本 治幸

ユーモアがひと匙欲しい雨の午後

一本 勇太

泥水も待てば上から澄んでくる

西井つや子  
岩崎みさ江

### 福本 英子

跨がれて夫婦というは恐ろしき  
絵に描いた餅 通販に誘われる  
早川 盛夫  
藤井 高子

軌道修正うしろは見えないことにする

木下 道子

赤い糸女が切った糸切り歯

野村 清美

よく滑る口が階段踏み外す

村上久美子

苺つぶつぶ一日邪魔をして暮れる

岡本道子

割箸が自然破壊を企てる

杉山 精子

貧乏性なのでメロンが熟れすぎる

原美恵子

頂上は冷たい風が吹くところ

藤田 泰子

薫風に少女の足は長くなり

槻谷 仲子

はりせんぼん どこに触れてもやっかいな

森 茜

箸よりも重たいペンを持っている

高田美代子

蛇口から倅せが出るどつと出る

森安夢之助

仮設にも花嫁がきたふだん着で

古谷ひろ子

その裏の裏読む二本目の煙草

藤田 芳郎

## NHK全国川柳大会

とき 11月19日(日)午前10時から

ところ くにたち市民芸術ホール

宿題 「一」「教」「音」「貝」「満」

◎宿題は事前投句・10月10日(火)までに

投句料二千円を添え、所定用紙を使用。

投句先 国立市富士見台2-36・大会事務局

### 第29回 文化祭参加

## 東大阪市民川柳大会

とき 10月8日(日)正午開場

ところ 東大阪市民社会教育センター

(近鉄布施駅北へ5分)

おはなし 「河内の昔物語」

東大阪市民俳句会会長 鈴木火外氏

宿題と選者(各題2句)

「流れ」 天川 春堂選

「夜」 高橋 白兔選

「抱く」 竹山 逸郎選

「深い」 友田 茶の子選

「辞典」 田中正坊選

「人」 榎本 信治選

「実り」 西田 柳宏子選

◎席題なし 午後1時出句締切

会費 1000円(記念品・発表誌呈)

賞 各題秀吟賞

主催 東大阪市文化連盟  
東大阪市民川柳同好会

# 川柳とおもしろ

川柳こぼれ話

田中正坊

岩波書店のPR誌「図書」に一九七〇年一月号から一六六回にわたって掲載された『一月一話』が一冊の単行本にまとめて刊行された。サブタイトルは「読書こぼればなし」、この欄の「川柳こぼれ話」は、実はこれを借りて命名した。『一月一話』の匿名筆者は、淮陰生。古今東西万巻の書から名言・挿話を例に引き、現代の世相に風刺の矢を放った傑作エッセーの著者は、本名を名乗らぬままに亡くなり、読者の推察に委ねられている。

閑話休題—今回もユーモアについて書く。句会で選者が入選句を読み上げ、呼名が続くと、どっと笑いが起こることがある。その句が特にユーモラスでなくても、作者の個性がよく表現されていたり、巧みなフィクションであったり、あるいは女性とみられる句の作者が男性であるなどの意外性が、選者の情感をこめた披露によって笑いを誘うのである。

口誦文芸としての川柳、そして座の文芸としての川柳における句会の醍醐味を味わうことができるひとときである。

しかし、これが清記されて句報や柳誌に掲載されると、多くの場合、その妙味はほとんど消えてしまい、何の変哲もない句の羅列となる。柳誌の投句欄や句集も同じである。このため、戦前における雑誌の川柳欄や句集においては、作者または漫画家が句の内容にちなんだ絵を添えて興趣をそそった。富士野鞍馬の『川柳鞍馬集』は数ページごとに絵を配しているし、元禄から昭和初年までの作品に宮尾しげおらが絵を描いた『川柳漫画全集』（川上三太郎編）も刊行されている。

このような試みが川柳にとってプラスであったか、マイナスであったかは議論の分かれるところだが、川柳の三要素というような古めかしい定義を持ち出さなくとも、ユーモアは今も昔も愛され、今後も尊重されるであろう。そこで数少ないユーモア作家の一人として知られる須崎立秋の句集「ふるさと」から私なりに十句を挙げて例句としたい。

骨立てたまま二次会へついで行き  
手ぶらでは鹿も相手にしてくれず  
記念品もろてきれいな首になり  
けなげにも家主の犬を噛んできた

速よいかな消えてしまつと火事見舞  
病人へみんなたかつて嘘を言い  
親に向つてホッチッチカモテナヤ  
電話口花千代さんは舌を出し

日本人やたらにソースかけたがり  
院長があかん言つてる独逸語で  
ついでに近來、ユーモア句がとみに少なくなつた中で、川柳塔欄で光彩を放っていた土居耕花の作品から七句をひく。

好きな物言わせて医者皆禁じ  
銀行へ入る真似してまた歩く  
急カーブ美人の方へみな倒れ  
オッサンと言つなよ今日はモーニング  
宝塚見て来て足を振つてみる  
恍惚と言われ勅語を言つてみる  
川柳を見せて閻魔を笑わせる

例によつてしまらぬ一文となつたが、終わりに「平成柳多留」第二集に掲載された時実新子の川柳エッセー「根はおもしろにあり」から川柳とユーモアについて示唆を与える文章を引用して結びとしたい。「私は演じてまで『笑い』を取る必要はないと書いた。しかし、川柳のというよりも、文芸の根は『おもしろ』にある。『おもしろいやんか』の世間評は当たっているのである。おもしろくないものを誰が読んでくれるか（以下略）」。

# 西尾 栞先生追悼句会

七月二十三日(日) 八尾グランドホテル

西尾栞名譽主幹の遺徳を偲ぶ追悼句会は、数日來のぐずついた天候とは打って変わった晴天に恵まれ、予想をはるかに上回る二七〇名の参加により開かれた。

正午の開場前から続々とつめかける参会者によって一時、受付がパニック状態となり、うれしい悲鳴をあげるという有様で、さしもの広い三階大ホールも埋めつくされ、他柳社からの参加者も多く、今さらながら栞先生の人徳を偲ばせる盛会となった。

会場の正面舞台には、和服姿の大きなカラ―写真の遺影や遺墨、勲記・賞状・感謝状が飾られ、午後一時十五分から板尾岳人氏の司会により開会、高杉鬼遊副主幹が開会の辞を述べた。つづいて橘高薫風主幹が主催者を代表してあいさつ、「人間は生きている時だけがその人の価値ではない。特に短詩型文芸では、数百年の歴史を経ても光彩を放っている作品がある。路郎の『一句を残せ』という言葉は

このことを言ったものであり、今後、栞先生の作品に学び、その精神を生かしていきたい」と強調した。

この後、全日本川柳協会の山本翠公務局長、川柳塔みちのく主幹の波多野五楽庵氏のあいさつがあり、西尾家から川柳塔社への金一封贈呈が美与子夫人から薫風主幹に対して行われ、遺族を代表して舜介氏が謝辞を述べられた。さらにふあうすと川柳社・川柳塔おっぱこ吟社や石原伯峯・月原宵明・佐藤一粒西村左久良・林荒介夫妻らからの追悼句会に対する来電が披露され、西田柳宏子理事長が栞先生のありし日を偲ぶおはなしを行った。

これで開会行事がおわり、午後一時過ぎから入選作品の発表に入ったが、課題はいずれも栞名譽主幹にちなむものだけに、各選者とも披露前に故人の思い出をしみじみと語り、黒川紫香「アンパン」の入選者には、賞品としてアンパンが贈られた。

句会終了後、午後五時四十五分から同会場で百五十名が参加し、河内天笑氏の司会で栞先生を偲ぶ会が開かれた。

はじめに小林由多香鳥取川柳協会会長の発声により栞先生を偲んで乾杯、にぎやかで楽しいことが好きな故人を偲ぶ会だけに終始、和やかなふんい気の中に進行され、奥山晴生都大路川柳社主幹をトップに小島蘭幸・土橋螢宮西弥生・笠原吸江・安藤寿美子・赤川菊野八木千代・森田熊生・那須鎮彦・小出智子・板尾岳人氏らが次々と立ってスピーチを行い、最後に田中好啓氏が万歳を三唱して閉会した。

## アンパン

黒川紫香選

アンパンの美味のような栞さま  
鉛パンを割って鉛だけ食べてる子  
確かめるようにアンパン割って食べ  
敬老日アンパン売り切れ申しソロ (備) 君子  
アンパンも天神祭も好きやねん 岳人  
サイクリングアンパン配り小休止  
鍵つ子にアンパン一つ置いてある  
先に鉛食べるとパンは滓になる  
ふるりに昔の味のアンパン屋  
アンパンを半ぶわけて老夫婦  
アンパンは本木村家ときまつた

吟 平  
弘 直  
恵 子  
子 人  
光 子  
はつ 絵  
斗 升  
明 朗  
笛 生  
良 子



アンパンのよくな顔した患だった  
アンパンが好きなら女でまだ嫁かず  
アンパンが好きです仲のよい夫婦  
好啓  
水聲  
奥美智子

リリックサククにアンパンがある富士登山  
アンパンに隣がついてるあたたかさ  
「アンパンですか店の主人は覚えてた  
アンパンは小倉に限ると古い頑固  
行列をしたアンパンを頂戴し  
手のなる方へ行つてアンパンもらつて来  
焼きたてのパンであんこがまだ熱い  
アンパンを片手に思考する詩人  
アンパン二こたつぷり話もつ夫婦  
アンパンのへそに桜の花かざり  
アンパンと麦茶震災後の夫婦  
アンパンから貰う他愛のない話題  
河内音頭とアンパン好きな留学生  
不機嫌はアンパンが売り切れていた  
張り込みの刑事アンパン食べている  
復興の町へアンパン買いに行く  
アンパンへ郷愁に似た甘えあり  
アンパンがこんなに美味い震災地  
アンパンを食べて小説書いている  
半分にしたあんぱんが置いてある  
旅のアルバムにアンパン顔を出す  
アンパンを一つ供えた辻地蔵  
いい孫の顔とアンパン比べられ  
アンパンマンになって亡母の海へ逝く  
アンパンを奪い合つてた遠い日よ  
アンパンで苦しい話せぬように  
いさむ  
保子  
亜弥  
柳宏子  
半銭  
千梢  
まこと  
夕花  
ひさる  
世津  
サナエ  
千代  
弘美  
冬葉  
はつ絵  
隆  
菊野  
熊生  
章峰  
千春  
高栄  
杜的  
森子  
はな  
太茂津

アンパンをはんぶんこして老いふたり  
佳  
あんぱんのへソからピョンとわらべうた  
スーパの籠へアンパン二つ入れ  
信玄袋のアンパン貰う上野駅  
兄ちゃんのアンパン食べて叱られた  
アンパンが好きでおだてに乗りやすい  
人が  
雨が止んだらアンパンを買いにゆく  
地  
お好きですかとアンパンをくれた方  
天  
アンパンを持つて家来にしてもらう  
軸  
どちらかと言えばアンパンから食べる  
紫香  
遊  
玲子  
春子  
千春  
千鶴子  
狸村  
新一  
楓  
美津留  
晴生  
千歩  
茜  
きみえ  
しげお  
薫  
外吉  
幹斉

髭

小松原 爽介 選

赤ひげや青ひげにあうエアポート  
無精ひげの息子がふつと他人めく  
この髭が大阪弁を喋るとは  
シナリオが終り男は髭をさる  
寝たきりの髭に指図を乞うまつり  
髭面のところが温いテント村  
貧乏のにおいが消えぬ髭の先  
少年の髭うつつらとして男  
親に無い髭を息子がたくわえる  
遊  
玲子  
春子  
千春  
千鶴子  
狸村  
新一  
楓  
美津留

ワイルドな髭で息子が帰宅する  
 髭書けば指名手配の顔となる  
 母の絵に口髭つけたのは次郎  
 花を買う理由あり髭を剃っている  
 脛かじる方に立派な髭がある  
 喪が明けて髭は女の胸の中  
 髭そつた訳は誰にも話さない  
 変心は口髭付けただけのこと  
 長雨に保身の髭がのびてくる  
 水鶏庵の髭は誇りを持って  
 こわもての髭が隠したやさしい瞳  
 自画像に省略出来ぬ髭である  
 サンタより立派な髭と誉めておく  
 個性派の役者で髭を生やして  
 愛憎のはざまで髭が伸びてくる  
 剃り残す髭に古傷埋めてある  
 恩師より立派な髭で逢いに逝き  
 チョビ髭で演じ通した泣き笑い  
 消しゴムで消せるぐらいの髭はある  
 花城 金太  
 徹し過ぎずやさし過ぎない髭を持ち  
 追い風に乗り遅れてる無精髭  
 ジャンギャバンの髭はわたしの青春だ  
 沈黙も言葉のひとつ髭を撫で  
 髭おいてダンディーのまま逝き給う  
 つけ髭をしてもピエロはピエロです  
 親ばなれ子ばなれできぬ髭が伸び

(関)寿美子  
 (内)倫子  
 千鶴子  
 岳人  
 ふみ  
 緑良  
 ますみ  
 一壺  
 紀乃  
 幸生  
 美津留  
 (楠)昭子  
 としを  
 (中)昭子  
 香子  
 公一  
 花城  
 金太  
 希久子  
 義子  
 智恵子  
 五楽庵  
 一志

味噌汁が少し苦手な髭である  
 青髭の傷みを少女まだ知らず  
 髭そつてそれから長い定年後  
 口髭に女の愚痴をみな隠す  
 髭剃つて裏切ることも考える  
 逃亡の疲れを髭にためている  
 うつすらと髭たくわえて妻たらん  
 鼻髭のあたりに妥協癖がある  
 髭剃つてから生ゴミを捨てにゆく  
 こけおどしの髭一匹の哀歎よ  
 女とは切れないわけのあるおひげ  
 人  
 ボトルの底と髭があしたを語り合う  
 地  
 脱線をする日の髭を剃っている  
 天  
 売れぬ詩をこつこつ書いている髭よ  
 軸  
 無一物髭は容赦をしてくれぬ  
 仕合せ  
 一本の葉に仕合せ頂きぬ  
 待つ人がいる仕合せな夏帽子  
 鳥籠へ仕合せ置いてきた小鳥  
 一汁三菜の仕合せかみしめる

幸生  
 (関)美智子  
 けい子  
 隆男  
 夕花  
 由多香  
 晴美  
 章峰  
 ふみ  
 サナエ  
 弥生  
 美幸  
 (中)昭子  
 天  
 (関)芳子  
 爽介  
 いわゑ  
 (関)云児  
 (楠)英子  
 天笑

藤本 静港子 選

仕合せ捜しに花子は村を出たまんま  
 だとしても仕合せだった蟻の列  
 仕合せと握手をしたら惚けそつだ  
 歌っているからって幸せではないの  
 仕合わせに今日と言う日は直ぐ逃げる  
 仕合せをずっと見てきた掘炬燵  
 しあわせは夜汽車のように走り去る

楓 楽  
 洋  
 玲子  
 ゆかり  
 修六  
 純隆  
 遊



仕合せの隣の席を予約する	紀乃	仕合せが背なに回って気づかない	妻子	下駄の音外湯めぐりへ美女の群	美津留
仕合せと思えばそんな風が吹く	保子	仕合せと書かず日記は以下余白	一	主婦返上温泉やどのかくれんぼ	義子
仕合せで逃げないようによく笑う	外吉	凡庸の極みで仕合せに気付く	晴美	温泉療養やと見付けた古本屋	晴生
仕合せでリズム体操しています	三千子	仕合せの中で仕合せばかり追う	凡子	温泉に入らず徹夜でパイ閉み	甚一
老残の身に仕合わせのない瓦礫	水聲	仕合せを	佳	逃亡者がひとり湯治場のつばめ	サナエ
悪友が突く仕合せな本音	茜	今日を終えしみじみ充つものがある	はな	温泉と地酒が好きな原稿紙	森子
あんころと酒父ちゃんのうれしい日	月子	仕合せを口に出したら泡になる	花城	名物に桃林堂とラドン <small>の湯</small>	公一
仕合わせの波ゆくりと岩田帯	千寿子	仕合せな構図に青色が足りぬ	芳子	温泉で首脳会談してみたら	金太
仕合せが今日も泊ってくれました	恵子	仮縫いのままの仕合せごっこかな	緑良	温泉卵で元氣出してと恐い妻	恭昌
病院へ行けば仕合せだとわかる	完司	仕合せは無色でとてもいい香り	外吉	フルムーン名湯秘湯はしごする	由多香
ともしびも生命も仕合せに燃える	諷人	人	巨城	句碑を訪う湯布院霧と湯煙と	巨城
ソウメンが冷え仕合せな夫婦	一志	五次元のいまウエディングベルが鳴る	鹿太	万病に効く温泉に杖を曳く	ルイ子
透明に生き仕合せな絵を残す	国公	地	仕合せのゆくえを探す虫メガネ	仲直り夫の誘う有馬の湯	けい子
仕合せにおかめひよっこしています	杜的	天	仕合せは真つ赤で夏を告げにくる	河鹿聞く湯女にも淡いものがたり	巨城
いい顔をして仕合せなんだろっ	金太	軸	半壊というしあわせな屋根の下	直哉の噂外湯に耳を傾ける	修六
仕合せは和泉式部を妻が舞う	好啓	温 泉	携帯電話温泉街で絵にならぬ	年金で湯宿平和な世に思う	青湖
阿修羅の面うらに仕合せ棲んでいる	岳人	温 泉	銀婚へ温泉行きを子がくれる	年金の夢 温泉をはしごする	ただし
慕われて輪の真ん中にいつもいる	文子	温 泉	温泉や日本人やええ国や	星の下皆仙人になる秘湯	楓
仕合せの角度で天を衝く両手	正雄	温 泉	わが町に温泉が湧きラッパ吹く	俗塵を払う秘境の湯のみ唄	正坊
仕合わせをつかむとぬけぬつぽの口	新一	温 泉	がム噛んで聞く雲仙の殉教史	埋められてここは天国砂の風呂	寿美
仕合わせな女が髪を指に巻く	寿	温 泉	ジバンクでこころゆくまで露天風呂	温泉で右も左も河内弁	シマ子
泣き伏しているのは仕合せな女	緑良	温 泉	わが町に温泉が湧きラッパ吹く	掘り当てた温泉に賭けている父子駒	幹斉
野に咲いて野の仕合せとする握手	森子	温 泉	がム噛んで聞く雲仙の殉教史	温泉の熟女を追って来たレンズ	一風
片目つぶって仕合せごっこしています	サナエ	温 泉	ジバンクでこころゆくまで露天風呂	秘湯とか成る程テレビ置いてない	弥生
ハミングへすいすいと来る赤とんぼ	千津子	温 泉	温泉水の朝市ズワイ蟹値切る	温泉の朝市ズワイ蟹値切る	落児
仕合せを画布いっぱい描くまでは	ひさゑ	温 泉	温泉水の朝市ズワイ蟹値切る	温泉水の朝市ズワイ蟹値切る	としを

温泉で流す汚れた自尊心

愛論

湯治場の人情にふれ癒やされん

楓

温泉の好きな男の浪花節

千津子

比翼塚古き湯宿も雨季明ける

青湖

なかりさんの喉聞いている松風呂

寿

廃線の秘湯へばくを捨てにゆく

薫

温泉でゆとりを充電しています

奥美智子

温泉付き別荘の鍵ます老母へ

はつ絵

青い目もゆかたが似合う湯の町は

世津子

田んぼ湯と言つてた頃もあつたつけ

吸香

佳

お湯の華今日は別府か登別

隆

温泉で男みせ合う手術跡

かすみ

ときめいて温泉宿で妻と書く

射月芳

湯村から帰り夢千代日記よむ

楓楽

喪の明けた男を誘う雄琴の灯

千鶴子

人

踊り子の幻影をみた伊豆の宿

はつこ

地

フルムーン子を授かつた昔の湯

由澄子

天

ふる里のいで湯無限と信じよう

みど里

軸

温泉のない国ばかりパスポート

いさむ

旅

橋高薫風選

旅に出る一番好きな服を着て

いわゑ

鈍行の旅すこんぶを頂いて

完司

札所巡礼花の名所から始め

千梢

隣席の会話楽しむ一人旅

内倫子

漓江舟遊戯にうかぶ師の温顔

武庫坊

さあ夜明け真白い靴で旅に出る

夏子

不器用なわたし出直す旅ばかり

かりん

旅いつもひとり青空友にして

千津子

旅逢か漂う雲のふたつみつ

年代

空港で連れの女が派手すぎる

水聲

無事帰国富士はやさしい顔をする

重人

針ほどのことを喜ぶ旅なれば

三窓

グループも一人も旅は包みこむ

まさよ

意気込んで女ばかりの旅に出る

美房

日本語で迎えてくれたエアポート

文

メルシーとタンケ女の旅つづる

信子

ムーンルージュいかわたしも男の目

楓

生意気にジュネーブにてと娘の便り

正雄

円高に思いきつたるフルムーン

純隆

もつ少し生命永らうフルムーン

雅城

ゆつくりと時を遊ばすフルムーン

奥美智子

やはり旅アダルトビデオ妻も見る

勇太郎

我が儘が出る頃旅も終りなり

保子

旅帰り卵しかない冷蔵庫

義

叛いた子ひまわりを背に発つてゆく(奥美智子)

旅に出る娘を信じる他になし

新幹線午後には日本の端にいる

最果ての旅若者とすれ違ふ

花の香が利尻札文の旅みやげ

網走の獄舎覗いて旅終る

面影や旅の花火は海に咲く

一人旅ホテルへ早く着きすぎる

一人旅ホテルへ早く着きすぎる

星まつり冥府の旅も楽しそう

夏休み僕はニルスの旅に出る

人生の旅は知らない駅多し

旅の身にオアシスと見る古本屋

五能線風をつかんだだけの旅

ふるさとに旅の一夜として泊る

嵯峨二日寂聴尼にも会えた旅

月欠けて満ちてひとりと思つ旅

旅に出ん形見の秋の帽子着て

# 追悼句会参加者

青戸田鶴 赤井花城 赤川菊野 安藤寿美子  
 赤松隆男 秋元てる 浅野房子 磯野いさむ  
 芦田静江 尼れいじ 井上信子 去来川巨城  
 伊藤 武 伊藤定子 一本勇太 指宿千枝子  
 池 森子 石原英子 板尾岳人 生嶋ますみ  
 稲葉冬葉 稲本凡子 岩井三窓 池田寿美子  
 岩内外吉 岩崎 遊 上田柳影 岩本美智子  
 牛尾緑良 氏林洋敏 内田倫子 太田とし子  
 内海幸生 卜部晴美 江口 度 大河未佐子  
 榎本信治 榎本吐来 海老池洋 奥田みつ子  
 大内朝子 大路美幸 大塚節子 奥山美智子  
 岡本久峰 奥田良子 奥山晴生 小椋世津子  
 香川水聲 籠島恵子 片上英一 柿花紀美女  
 笠原吸江 鍛原千里 金崎峰子 梶原サナエ  
 金村青海 神原 文 亀岡哲子 片岡智恵子  
 川見絹子 河井庸佑 河内月子 神夏磯典子  
 河内天笑 河瀬芳子 北山悟郎 神原まさと  
 楠 昭子 栗谷春子 黒川紫香 川島颯云児  
 黒田能子 小出智子 小島蘭幸 河原崎純隆  
 小玉満江 小西幹斎 小西夏子 木村富美子  
 小林一閑 小林妻子 小林一夫 小林ゆかり  
 小山紀乃 酒井一壺 坂上高栄 岸野あやめ  
 阪部房子 阪本国弘 坂本和樹 久保田元紀

澤田和子 澤田千春 桜井千秀 小池しげお  
 志田千代 椎江清芳 執行稲子 小白金房子  
 島元ふみ 庄野澄子 新家元司 小林由多香  
 菅井知子 楳元世津 住谷石舟 小松原爽介  
 諏訪柳々 諏訪夕香 田中亜弦 佐伯マリ子  
 田中好啓 田中薫 久谷まこと 坂野はつこ  
 田中正坊 田中新一 田中輝子 柴田英壬子  
 田辺鹿太 高杉鬼遊 高杉千歩 嵯峨根保子  
 高田星子 高田博泉 高橋夕花 瀬戸まさよ  
 竹内良伸 多田蔵人 玉井豊太 園山多賀子  
 玉置重人 谷川重蔵 辻白溪子 垂井千寿子  
 恒松町紅 谷口義 高須賀金太 高田美代子  
 恒松素子 寺岡はな 寺田太一 丹波三千子  
 寺田甚一 寺西文子 天正千梢 綱木けい子  
 津守柳伸 土橋螢 寺沢みどり 富山ルイ子  
 金井文秋 中野弘子 中井昭子 西田柳宏子  
 清水斗升 中川一 西口いわゑ 西村佐久良  
 中原俊香 中山雅城 長浜澄子 野村太茂津  
 二宗吟平 西出楓楽 西原艶子 長谷川春蘭  
 野瀬昌子 中川楓 吐田公一 波多野五楽庵  
 林はつ絵 橋本弘美 浜田良知 春城武庫坊  
 春城年代 原さよ子 板東倫子 平松かすみ  
 長谷川彰 平田香子 平川幸枝 蛭子千鶴子  
 福岡雅子 福本英子 福浦勝晴 福元みのる  
 藤井明朗 藤井正雄 藤原一志 藤本静港子  
 藤村亜成 原章峰 藤田頂留子 古川喜美子

藤岡花梢 藤東清子 古本修六 堀江としを  
 細谷如水 芳地狸村 坊農柳弘 堀江くに子  
 堀江光子 堀端三男 那須鎮彦 本間満津子  
 中原諷人 中野樺子 前たもつ 中原みさ子  
 松川杜的 松川芳子 町田達子 松谷マサ子  
 宮西弥生 宮口笛生 水谷笙子 松本ただし  
 三輪通彦 保木寿 宮崎シマ子 宮園射月芳  
 光井玲子 松田巖 前川千津子 宮本かりん  
 森田熊生 森田華子 森下愛論 宮内ひろこ  
 村上剛治 榎山隆 森川まさお 村山勇太郎  
 吉川寿美 八木千代 山崎君子 山本希久子  
 山本義子 楊井二南 結城君子 山本憲太郎  
 森茜 山川日出子 山下美津留 山本ひさゑ  
 吉岡美房 吉村一風 吉田大輔 吉岡きみえ  
 吉本菁風 米田恭昌 和田恭子 中山キヨ子  
 吉川晋吾 綿野春香 細川稚代 松本正とし  
 榎本露児 宮崎弘直 山本半銭 村上ミツ子  
 西村哲夫 野坂なみ 山本翠公 友田茶の子  
 橋高薫風 門谷たず子 (二七〇名)

## 悼吟

七月の句座にきらめく鴉尾浄土 林 荒介  
 盛会と言つても悲しき追悼会 月原 宵明  
 水鶏庵もつ居てはらん笛の主 佐藤 一粒  
 思い出す握手した手の温か味 石原 伯峯  
 追悼やまるく大きなお父さん 藤本静港子



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

溝口町川柳会

小西 雄々選

花が好き作る喜び無の心  
信じてるあなたの好きな彩にぬる  
充実の暮しが続く今が好き  
好きという言葉胸に溜めて生き  
大山が好きで村から離れない  
好きでこそ筆の一つも取ってみる  
好きだから約束こともすぐ決まる  
勉強が好きで進学校めざす  
好きという言葉喉を通りかね

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

富士の藍は一礼をしたくなる  
柩の母はきつとお礼を言っている  
ベット逝く楽しい日々を有難う  
廃屋に礼を言いつつ一枝折り  
バックから落ちるほど持つ旅葉  
一円貨拾ってくれる人待ち  
ポツリポツリ雨落ちてきて迷い出す  
弱肉強食落ちる涙は血の色だ

薫風  
シマ子  
田実子  
香住  
留吉  
千枝子  
能子  
欣史子

いつか落したペンに逢いたくなくて  
またひとつ落したようだ知恵袋  
ひっそりと卵の花腐しまだ起きず  
うたた寝へ掛ける羽織のいい匂い

川柳塔おつばこ吟社 木村あきら報

一席を設ける言うて音がない  
気マグレの趣味が本気で歩き出し  
ネギ刻むくぼみに妻のウツ溜まる  
平凡な女も悪い虫を飼う  
期待され応えられずに四苦八苦  
ヒョウキンに踊る姿に沸く拍手  
長くなれ一日私の歩幅ほど  
天仰きはやし立ててる雨蛙  
古希祝う酒の肴を皿に盛る  
横道は素通りします旅の道  
土日休診ケガも病気もやめとこう  
鮎解禁溪流めざす釣天狗  
子が命かえて卒寿の老母まもる  
オウム漬今にもテレビ腐りそう  
鳥が啼き花咲き乱れメルヘンへ  
あの時は米に泣いたり笑ったり  
外米が流しの下で眠ってる  
新米は美味いと自慢お父さん

川柳クラブわたの花

片上 英一報

組の鯉も貴方へ時に跳ね  
魚偏すし屋のネタがおもしろい  
太公望獲物を持った妻は亡し

あずき  
喜美子  
弘直  
清芳  
吟笑  
ふみ  
マツエ  
かおり  
よしみ  
文仙  
坊太郎  
くに子  
いさむ  
マサエ  
あきら  
治延  
チカエ  
放任  
正雪  
ひかり  
はつ恵  
中なみ子

故郷でメダカの泳ぐ川に逢い  
まな板のさかな女の目をしてる  
逃げ回る雑魚が事件の鍵らしい  
釣れぬ日のみやげに買って来る魚  
冷凍も旬には旬の魚食べ  
雑魚でいい元氣な雑魚で生きてくれ  
骨立てる魚いよいよ嫌になり  
おしゃべりの口が小骨に苦勞する  
魚偏の湯呑をひとつ陶器市  
慈悲深い弥陀のふところ花が散る  
歴史にはうそとまことつづれおり  
あちこちに仮面が落ちている屋台  
おたふくのお面の陰で泣いている  
釈迦如来生まれる時は丸裸  
忘れられてる今日はわたしの誕生日  
追いつ風の生んだ定めにつつまる  
白魚の指に抜かれた鮎の骨

川柳東大阪 森下 愛論報

きつねうどんに夫の軽い昼がある  
蚊を叩きそこねて昼寝から覚める  
雑魚などの読みが野望の昼下がり  
味方だと信じずんなり入る傘  
ずんなりと自白はしれない黙秘権  
今の地位ずんなり取れない黙秘権  
母の日の母ずんなり受ける花  
難題をずんなり解かすカギを持つ  
ずんなりと彼の噂を聞き流す  
公園のベンチ晩年見えてくる

川柳東大阪

森下 愛論報

春枝  
幸江  
トシエ  
道子  
朝子  
実希子  
まさと  
英一  
弘直  
剛治  
ミツ子  
明子  
ますみ  
一風  
鬼遊

元紀  
雅文  
真柳  
恭信  
昌治  
文秋  
孤舟  
太一  
度

六月の雨公園は無口だな  
夜の公園ひとり来たあほらしき  
目立たぬが日進月歩の群れが行く  
ゆっくりと進む老に策がない  
両手には喜怒哀楽が染みている  
買ひ物のお供両手に持ち切れず  
両の手に乗った男を飼育する  
両手つく阿吽の息の肌艶

岩美川柳会

羽津川公乃報

衣がえすんなり美人出来上がる  
焼酎で命洗濯しておこか  
人形の衣洗濯して替える  
頭の洗濯出来ぬ私は没句責め  
洗濯機心の痛みわかるまい  
洗濯が済めば内職待っている  
洗濯のシールをつけたままで達う  
ストレスも洗い流せる洗濯機  
洗濯と掃除が好きでよく眠る  
洗濯物見て勧誘の策を練る  
ちぎれ雲洗濯ものがよく乾く  
愛犬を洗うと死んだ真似をする  
いつまでも泡切れ悪い私です  
胃袋の洗濯白うものを飲む  
相席に洗濯匂う女がくる

川柳高知

川竹

松風報

湖風 恒明 頂留子 猪太郎 正博 柳宏子 晋吾 愛論  
孝男 単車 多哥由 嘉津江 睦子 公乃 忠良 芳江 美恵子 照女 螢 きみ子 和歌子 喜与志 大漁  
子龍 千鳥

日本の素顔神話に程遠い  
自分では若いつもり同い年  
若いからもっと励めという科白  
北の旅桜前線追いかけて  
桜の下主婦と言ふ名をぬぎ捨て  
ランドセル桜吹雪に迎えられ  
ブランドは娘吹雪はバーゲンで  
飢えている心を埋める赤いバラ  
補聴器を付けて話の輪に入り  
連休の谷間で主婦は息をつく  
純情の素顔うれし愛無限  
さて筆を何処から下ろす無垢な画布  
真白い気持で同居しましたが  
白い画布誰にも恥じることはない  
全身を耳にして行く白い杖

川柳大阪

坊農 柳弘報

雨宿り濡れて芽生えた恋一つ  
雨宿り言い訳にして赤のれん  
医師たちを悩ます影はレントゲン  
出なくていい行く先々に妻の影  
むつまじく何を語らう影法師  
雨宿りロマン無くした折りたたみ  
空想は楽しくありたい雨やどり  
還暦の素顔出さない妻といふ  
借景の風情見惚れる雨宿り  
赤提灯雨は気にせぬ友わんさ  
雨宿りここで一息つけと言ふ  
面影でタイムスリップクラス会

朱坊 幸 孝雄 千恵子 菊野 三郎 有佳 春枝 功 さち 竹萌 佳風 京子 圭風 松風 吹笑 河南子 かずお 太元 和子 喜楽 青道 川童 希久志 柳昌 司 柳昌 かよこ

のれん街男の肩に影がある  
コマーシャル梅酒とは粋なもの  
梅酒漬け妻が仕切つて平和です  
どのように生きてても影が淋しがる  
影があり無口でもいい男  
青梅が琥珀にかわるうれしい日  
影法師喜怒哀楽を共にして  
影武者で終る人生とは悲し  
影武者が一人ほしいな多事多忙  
一杯の梅酒でなめらか妻の口  
梅酒ひと口ブラトニッククラブの味  
満面の笑みを曇らす誤字ひとつ  
雨宿りしばらくため息つく女  
焼酎に漬けられ梅は山を恋う  
やさしくていつも大きい母の影

佳句地十選 (8月号から)

永田俊子

他家のめししつかり食べた太い骨  
一夜干し言いたいことがたんとある  
陽なたはぼく噂ばなしを干し上げる  
封をしたはずの悪事がこぼれ出す  
合格の子のブランドコが空を蹴る  
曖昧な距離で義母との和を保つ  
結び目に小さな嘘をひそませる  
五月閨女結びの解けやすし  
投げられた石をにっこり受けて置く  
盃を交わし心の戸を叩く

信醉 末坊 しげお 美花 美子 洛醉 雅巢 敏 まつお 一步 比呂志 与呂志 金太 笑風 楓人 重人 美智子 まさお 達子 愛子 いわゑ 希久子 四郎



万年青の実私らしさを失わず  
花散つて万年青よそこに居たのかい  
丹精の万年青本家の床の艶  
知事賞が光る万年青の七回忌  
サリン禍で万年青迷惑しています  
避難所へ後生大事に來た万年青

南大阪川柳會

金井

文秋報

花形の素顔コロッケ買っている  
チビ玉と呼ばれ一座の人気者  
樂觀をしてリスクを背負わされ  
花形の涙を知っているジンタ  
足元に火が点くまでの樂觀だ  
ワンマンの社長にもある泣き所  
八百屋の店頭季節が消えました  
花形は武野茂伊達と一面に  
大きな声だワンマンだと思つ  
威張り屋で淋しがりやでワンマンで  
悪魔除け村に伝わる火の祭り  
花形の驕りにやがて秋の風  
空中プランコ夫婦の息がびたと合  
入口の魔除けの札もセピア色  
悪魔除け我が家を守る鬼瓦  
イチローの出番スタンドどつと湧き  
ハウスもの並べ八百屋に四季がない  
白内障樂觀してた目にも年  
山登り行者の腰に鈴が鳴る  
嫁が来るまで樂觀はしていない  
花形も我にかえれば孤独なり

ダン吉 金太 萬的 狸村 鬼遊 柳宏子 重人 寿美 恒明 柳伸 文秋 庸佑 直子 東雲 度 柳宏子 萬的 勝美 真砂 凡里 千里 憲太郎 良 章久 スミ子 智子 頂留子

くよくよはすまいあしたの風を待つ  
ワンマンの広い背中が燃えている  
魔除け札有効期間書いてない  
核廃絶まだ樂觀は許されぬ  
樂觀の咄めを食つた大地震  
花形の夢を捨てたらボケはじめ  
塾へさへ行けばと親は思つてる  
宅配の取次ぎまでもする八百屋

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

両手でも話し足りないほどの手話  
絵日記にへチマが伸びてゆく夏日  
エビフライ頼んでひとり飲むビール  
形勢不利揃つた顔が消えて行く  
被災地のテントに夏日容赦せず  
三本も傘失つて梅雨明け  
夏日待ちかねて梅干し布団干し  
価格破壊の先陣切つているビール  
大ジョッキ天下国家を論じ斬る  
妥協したのが味ととんで飲むビール  
缶ビールたつたつとつて乗せてくる  
揃うまで右往左往の団体旗  
出る杭を揃えて守る軋む椅子  
漕ぐちから揃いはじめて海に出る  
見慣れない靴が揃えて脱いである  
命綱ふたりで掴み歩が揃う  
人間讃歌せめて別ればバンザイで  
愛一途母の両手が荒れている  
両手に花を持たしてくれた事がない

志華子 正博 シメ子 清水 久峰 久子 トミ子 智久 保州 裕美 紫香 正博 武春 愿 美子 射月芳 吞天 鉄治 公二 利治 豊太 三男 寿子 重治 高夫 金太

パパママに両手預けて跳びはねる  
我慢した両手のこぶし持ち帰る  
人臭い鬼の両手に影がない  
無愛想な両手に眠つていくワイン  
一人ずつ子等をはなして行く両手  
両の手は揃つた条件書いておく  
釣書にはほしいとおおる大ジョッキ  
聞かないではほしいとおおる大ジョッキ  
言い訳に使いたくない大ジョッキ  
ビール飲みしばらく女お静かに  
銘柄はどうあれ今日のこのビール

川柳岩出

小倉

アサ報

人はみな望みを持った輩となる  
くやしさを洗う家族の和が温い  
望まれてまだ渡せない玉手箱  
触れ合つた花一輪に開ける窓  
出せなど望みもせず靴が減る  
触れ合つた数だけ光る子の未来  
まだ明日があるから望み捨てられぬ  
お前だけと合鍵を渡される  
エリートで望みボタンをかける違い  
五合目で麗容富士が顔かくし  
人間の弱さを神に手を合わす  
くやしさが辛抱しては嫁を見る  
勝負ごとあの日やめればくやまれる  
親と子で望みが違う塾通い  
五十年合つてくれたはお前だけ  
好感を以て望めば通じ合う

柳宏子 和重 栄美子 輝笑 好子 めぐみ ゆみ子 稚代 英子 ダン吉 克子 保子 綾子 幸子 和子 紳一郎 アサ 愛子 春子 良一 重徳 英子 哲雄 千鶴子 正義 正義 ふみえ

その涙くやし涙と知っている  
条件が合はずかえって縁ならず  
くやしいが妻の戻り待っている  
今更に望み並べてどうする気

久保 正劍報

わが母は看護出来ずに他人を見る  
老いたれど美しものはよく見える  
一病とつまつき合ひ老いの坂  
正直であれば良いとは限らない  
朝々にブチトマト採る老いの幸  
綿入れも引張り出して梅雨の冷え  
人の世の情けに縋るコメ支援  
部長室腰巾着がノックする  
宗教が人を殺すという歪み  
吾が庭は芍薬ボタン百合も添え  
親らしいこともせぬの父の日よ  
退院日ボチの狂喜に目が潤み  
激戦の島鎮魂の土俵入り  
手を腰にあてて早苗を見て回る  
広告につらい悲しい嘘も混ぜ  
四コマの諷刺三コマに躍進し  
新聞紙包装洋傘要注意  
救急車無口で早く来て欲しい

井上 直次報

波立てて海のイメージ出すプール  
春の海和顔愛語の波の音  
追憶の海に浮んだ母の愛

悦男  
瑞穂  
忠雄  
与呂志

ふさ子  
紀一  
治幸  
青琴  
ちよ  
タミ  
久仁於  
高明  
高主

旭恒  
虹汀  
幸夫  
晴子  
實  
四郎  
あき  
朴竜  
正剣

博史  
直次  
祥風

愛深い母の心かそれは海  
グループで山が越せないある理性  
フランスを保つ善意の嘘もある  
日頃からフランスばかりで味気ない  
フランスの限度をこえる薄化粧  
フランスが崩れて味のあぬ夫婦  
弥次郎べえ右に左に揺れている  
家計簿のフランスくずさぬ程の見栄  
フランスがどこかでくずれ個人的  
思いきり日記に書いて貝になる  
飾らない言葉書くのはむづかしい  
夏の宵書いてまた消すラブレター  
お話は苦手書くのはなお苦手  
紙一枚されど重たい筆のあと  
どなたにもきつとあるはずよい月日  
きつとと言う喫茶店での待ち呆け  
妻よりもきつと長生きしてみせる

川柳塔まつえ吟社 恒松 町紅報

太い杭打って溺れぬようにする  
溺れると決めているから泳げない  
家中の愛に溺れる一人っ子  
このままでゆけばあなに溺れそ  
愛欲に溺れた果ての鉄格子  
愛情に溺れて理性見失う  
新しい恋に溺れることにする

地球くるくるアポロが飛んでいる夜空  
また一つ地球ふくらむ呱呱の声  
宇宙から見れば地球のこぜりあい

竹二  
福一  
佳秋  
吉太郎  
つよし

保子  
敞子  
昭子  
恭子  
ただし  
明光  
清史  
英子  
桂子  
純次  
眞郎  
方郎

久枝  
邦代  
清志  
きみえ  
清子  
多賀子

早苗  
房子  
雄々

地球にもあちこちがたが来たらしい  
地球上どこから見ても陽は照らす  
心地よい言葉が耳の奥にある  
丁度よい言葉が出ないもかきさ  
子が果立ち言葉少ないなる暮らし  
犬猫もやさしい言葉待っている  
やわらかい言葉にもどる別れ道  
言葉とは裏腹刺は根が深い  
文学の中でいじめは似合わない  
顔色でいじめに気付く母の愛  
頑なにいじめの話はしない  
しらぬ顔やがて素通りするいじめ  
引受けた肩書いじめ覚悟する  
朝顔がいじめにあつたままで咲く  
屋根の下ルーツも知らずのんびりや  
美しい嘘だな天皇家のルーツ  
ルーツをたどれば中国かも知れぬ  
由緒あるルーツ重んじ飢えに泣き  
一国のルーツに女が棲んでいる  
探し出すルーツ絆が太くなる

城北川柳会 吐田 公一報

看病へ桜も見ずに夏近し  
居心地がいいか雷二日目だ  
父親の一喝 雷のごとし  
楽そうに何でも見える他人事  
学説の誤りただす柱跡  
明るくて楽しい友に救われる  
安楽死ひと事だからうなずける

史風

静江  
みえ  
茂美  
静恵  
知恵子  
満江  
たつみ  
与根一  
日出子  
登志子  
午朗  
桂子  
佳江

米子  
太泡  
鶴丸  
義良  
寿美子  
町紅

義江  
美代子  
睦子  
千尋  
はる枝  
あき子

史風

食うだけに足らぬ都会で疲れ切り  
 山囲む田植機械に支えられ  
 雷が去つて鼓がよくさえる  
 貴乃花大きく見える大銀杏  
 遠ざかるテールランプに立ちつくす  
 さわがせておけ遠雷に似た噂  
 躓いた小石は老いの道しるべ  
 樂させてあげたかったと墓に詫げ  
 物見遊山東山梨西神戸  
 一灯が欲しい闇夜の迷い道  
 落人の末裔が舞う祖谷の宿  
 懐かしい日へふと駅の朝の風  
 小犬貰つて家族の顔がみんな寄る  
 真実を語れば割れるガラス鉢  
 窓際の椅子で妥協の彩を選ぶ  
 叱るとききついで父の深い胸  
 今一度別れた人に呼ばれたい  
 枝豆がビールで季節連れて来る  
 里帰り子供の頃の輪が温かい  
 ああ誤算あなたと添うた五十年  
 政治家に欲しい魅力な国作り

川柳 ささやま

酒井

靖子報

扇 帆  
 八重 重  
 春 蘭  
 秀 夫  
 高 栄  
 静 子  
 トヨ子  
 昭 子  
 政 子  
 典 子  
 あい子  
 達 子  
 一 枝  
 とし子  
 白 峰  
 満津子  
 久留美  
 倫 子  
 登美子  
 柳 影  
 公 一

紅椿一つ残して春惜しむ  
 のんびりと見える暮しも肩が凝り  
 親からの義理重なつて罪を着る  
 のんびりと寝たい日もあるけしびな  
 積み残しあつてのんびりなど出来ぬ  
 百万ドルの思い出残して灯が消える  
 万歩計もう一息の足伸ばす  
 のんびりと暮しています別居中  
 笈摺を着る日へ一針ずつの汗  
 ポロを着てポロがしっくり来る若さ  
 もう歳に勝てずのんびり草を引く

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

美智子  
 末野  
 市三  
 ヒサ子  
 和子  
 多美子  
 芳乃  
 すす子  
 富美  
 可住  
 靖子  
 佳秋  
 いわゑ  
 光代  
 能子  
 澄子  
 トミエ  
 重人  
 富喜子  
 まさお  
 みつ子  
 夜船  
 涼子  
 絹子  
 紫香  
 萬的  
 正とし

日々速く過ぎて余生が怖くなる  
 主義持たず速い流れに身を任す  
 震災後あつと言う間の六ヶ月  
 老いには加速度古い靴が重くなる  
 天の川溢れたら物と得た絆  
 一瞬に無くした物と得た絆  
 痛さより血を見てワツと泣き出す児  
 同病がこんなにも多いクリニック  
 もつすでに時効夫は責めるまい  
 ポスターに心が動く夏の旅  
 赤とんぼ、うれしい噂くださいいな

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

武庫坊  
 ルイ子  
 ふじ子  
 たず子  
 哲子  
 鹿太  
 正坊  
 佐江子  
 春蘭  
 義子  
 定人  
 夢之助  
 十四郎  
 弘治  
 鹿太  
 尚利  
 紫香  
 末貞一  
 向西  
 勇次郎  
 拓治  
 美智子  
 秋月  
 幸子

川柳後楽吟社

従野 健一報

少年より泣く明日も陽はのぼる  
 人間を続ける耳かき持ち歩く  
 庭の隅鳥が運んだ花が咲き  
 むき出しの心気づかぬ人の罪



激しい雨が相合い傘に嫉妬する  
ワイパーが思い出してるほどの雨  
雨蛙と一緒に明日の雨を待つ  
雨の朝登校拒否を叱れない

雨乞いをして紫陽花と妥協する  
アメダスに泣き笑いする日本地図  
傷あとをやさしく舐める夜の雨  
五月雨をあつめてタムは生きのびる

哀しみを塗りかえていく雨の彩  
雨蛙傘だ傘だと鳴いていく  
雨の匂いが消しきれぬビニールの傘  
母の川渡りきつたら雨あがる

寸劇はおわって傘は濡れたまま  
雨降ればあじさい色の傘重し

川柳塔鹿野みか月 土橋  
死にざまを知っているのか星光る  
五十年も僕等の星になつて  
金魚鉢波が立つてからひとり  
荒波の岬回ってからひと

簡単に出した答に蹴蹴り  
花いちもんめ両眼薄く泣きました  
でんでん虫に梅雨明け何時か問うてみる  
点滴三日やれやれ粥につながった  
公園にはたに逢える椅子がある

親しいが知られんように知らん顔  
不肖ながら親しい人の子供です  
大の字に寝る猫親しさの証  
赤線と一緒に行った間柄

一夫  
天雀  
すみえ  
保子  
ふみ  
ゆき

瑞枝  
品子  
日枝子  
富美子  
千代  
てい子

荒介  
恵子

螢報  
小鹿  
早苗  
野草  
美ツ千  
睦子

三千代  
和歌子  
喜与志  
明美  
公子  
節子

孔美子  
石花菜

米作る人と親しくしておこう  
朝星に笑われながら寝坊する  
星をみて小さな悩み噛み砕く  
牡羊座の星に支配されている

満天の星に心配なまわ眠り  
太陽も北極星をまわっている  
よく光る星とお話したくなる  
三文の得して明けの星にあう

幸せを北斗の星に守られる  
星落ちるたびに生命線を見る  
鳥取弁に大阪の子が首ひねる  
故郷の訛り恋しい風の駅

べらべらとお国訛りがお茶にごす  
可愛い訛りの娘好きになつちやうた  
インク壺から訛りが出そうになる  
仏派の訛りを広い野にさらす

ふるさとの訛りを忘れないでしよう

はびきの市川柳会 榎本  
照れる事まだ少しある夫婦です  
お笑いで誤魔化しきかめノック知事  
早乙女のいない田植に慣らされる  
柿八年まだまだ生きる種をまく

謙遜をそのまま聞いたお人好し  
一人者欠席すれば案じられ  
秀才を求めて共に罪つくる  
欲捨てて優しくなつた妻が好き  
練習のゲートボールにボスが居り  
花活けて心やすまる昼下がり

完司  
久枝  
武子  
汲香  
かつ乃  
茂

和子  
くに子  
きみ子  
大漁  
保子  
八重子

智恵子  
実満  
隆風  
諷人  
螢

扶美代  
昇  
聡

りつえ  
泰子  
敦子  
岩信  
さとみ  
美善

シマ子

アドリアがきかない百合の一本気  
制裁がとつても好きな星条旗  
初夏全部持たせてやりたい里がえり  
半年で十大ニュース締め切られ  
世渡りが上手いと軽く言う他人  
雪景色賞めてのんびり露天風呂  
パズルして脳をエンヤコラ裏がえす

定年の後は十八番が錆びたまま  
十八番がわりに九州弁でまくしたて  
十二支を終わってから言うおはこ芸  
居心地のいい輪の中の謀反心  
アンビシヤス輪を抜け給え翔び給え

戦争は嫌だ大きな輪になろう  
責任の重さ感じている無口  
部下のミス私のミスと書く辞表  
責任は秘書にとらせる無責任  
但し書きして責任を軽くする

定年で責任なしで仕事なし  
抱き癖をつけた責任なすり合い  
責任を取るのはいつも尻尾です

京都塔の会 松川  
カラフルな瓦あそこはローンかも  
鉄道唱歌をうたう二条駅の瓦  
胸の夕日も瓦の夕日も燃えている  
寄進する瓦浄土の入場券  
本家より大きい分家の鬼瓦  
核家族住むカラフルな屋根瓦  
千年の重みを持った鬼瓦

絢子  
ダン吉  
与呂志  
敏

吐来  
利武  
みつこ  
かつみ  
敏子  
辰子

一壺  
重人  
昭子  
志洋  
たけし  
和風

洞庵  
えみこ  
晋  
金太

杜的報  
百合子  
晴生  
磯  
武庫坊  
杜的

庸佑

震災に勝った老舗の鬼瓦

直すのは苦手ですぐに買い替える

言い直す自分が時には悲しくて

居直って結着つけたい時もあす

二次会で上司を撒いて飲み直り

ときめきが多少はあった臘月

多少のミス大目に見てる部下思い

多少でも安いとすこし立止る

いい人と言われて多少うぬぼれる

父の日へ多少の期待お父さん

円高で多少どころでない被害

多少でも感性磨く辞書を繰る

神戸が好きでゆっくり急いで建て直そう

代替バスの列長々と物言わず

地震から落着く場所がみなこわれ

満杯の琵琶湖あふれる雨続き

ケセラセラとゆこう山谷あろうとも

麻原彰晃逮捕

化物がつかまりいよいよ霧深し

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

果物屋王座はメロンに乗っ取られ

無理をしたメロン敷居が高過ぎる

編み寄せて生き様刻む皺メロン

朝のロビーメロンと無口な娘がひとり

熟れたメロンもおんなも相聞歌へ転ぶ

メロン芳香秘の中にある驕り

鹿太

好き嫌いな花の気持を考えぬ

冬葉

珈琲の根回したかがしれている

鬼遊

ハツエ

困ったことに彼女わたしが好きらしい

頂留子

心プラとしゃれてもカニが見えています

宏子

芳子

好物を供えて今日も亡母に会う

庸佑

父の日の父先ず母の墓まいり

波留吉

義芳

嫌いだっただ女と食べているカレー

紫香

守れない約束ばかりする小指

欣史子

歌子

若者に男臭さが失せてゆき

水聲

女関にシヤチハタ印鑑吊っておく

かすみ

一笛

日直も夕餉もひとり目刺し焼く

度報

またひとつ心配させる免許とる

波留吉

水客

まだつづく余震の話梅漬ける

石舟

神仏へ生命担保にした祈り

あやめ

年代

人間世界どっつあれ蛙己が春

昌子

親友だから担保さつちりもらつとく

ルイ子

笑女

動くもの欲しくて時計部屋毎に

白溪子

信用と言う名の担保残っている

シマ子

美穂

幸せを吊るすとすぐに落つこちる

武庫坊

肩書がとれて担保を出せという

黎之助

英一

先祖の貌に申し訳ない恥を吊る

夢之助

殺人のないのが今日のニュースです

一閑

飛鳥

友の来た標 くちなし吊つてある

澄子

芸能ニュース妻が解説してくれる

時弘

紫香

夕焼が吊り鐘の音に美しい

真柳

番組をみんなつぶしているニュース

文秋

波留吉

リハビリで首をまいにち吊っている

正治

ご近所のニュースは路地で立ち止る

たもつ

瀧小

恋文を書く机より遠き海鳴り

豊次

潮時を見て座を外すピエロ役

光子

友熙

人間のカタチを持つている机

薫

スキャンダルビッグニュースになるスター

一途

圭坊

母を遠ざける少年の代記

善美子

取巻き小なさ花火上げてやる

吉之助

求芽

袖のない机は父の一代記

瀧小

潮時だ小なさ花火上げてやる

英直

白溪子

難題をいくつも解いてきた机

行隆

どっしりと妻潮時を待っている

英直

求芽

定年の机悔いなきまで拭く

瀧小

潮時だ小なさ花火上げてやる

英直

求芽

母を遠ざける少年の代記

善美子

取巻き小なさ花火上げてやる

吉之助

求芽

袖のない机は父の一代記

瀧小

潮時だ小なさ花火上げてやる

英直

求芽

母を遠ざける少年の代記

善美子

取巻き小なさ花火上げてやる

吉之助

求芽

袖のない机は父の一代記

瀧小

潮時だ小なさ花火上げてやる

英直

求芽

母を遠ざける少年の代記

善美子

取巻き小なさ花火上げてやる

吉之助

求芽

袖のない机は父の一代記

瀧小

潮時だ小なさ花火上げてやる

英直

求芽

母を遠ざける少年の代記

善美子

取巻き小なさ花火上げてやる

吉之助

大リーガーばったばったと泡ふかす

なれそめは河内音頭のやぐら下

義理ひとつ済ませる顔で妻と旅

生玉で消えた噂の深い仲

琉球の風も吹いてる大正区

雨の水がレキの下の命水

衝突はさげたい根まわし待っていた

湧き水に明日の苦難を論さされる

ぶつかるけど心ブラが好きうどん好き

道頓堀の水にネオンの泣き笑い

ツインビル夫唱婦隨で天をつき

あきまへん口と裏腹儲けてる

PLの夜空に映える火の乱舞

名門の出で根回しの要はない

義理不義理自問自答を繰り返す

泡ぶくぶく蟹も言い分あるらしい

ギャル達の会話心齋橋を抜け

道頓堀の蟹の動きも過労だな

道修町もつかりまっか神農さん

気のすむまで乗つたらええと環状線

ノッポビルニヨキニヨキきたの様変り

一年の義理を済ましているハガキ

橋の名で大阪の地図教ええられ

根回しをするよりされる椅子に居り

モノレールガンバガンバとかしまし

川柳塔おおとり

上田 俊路報

また今夜楽しいテレビ子にとられ

補聴器はときどき話聞き違え

東雲

叔子

希久子

恭昌

英一

綾子

さと美

佳秋

英王

蛙

澄子

久峰

志華

真砂

凡子

楓

照子

宣司

正雄

ひろ子

正坊

源一

光

兼治郎

みつ子

子が親と視線の違い意識する

価値観を少し違えてみませんか

性格の違い答えが二つ出る

能力の違い認めて楽になり

勘違いとんと話が通じない

歳月の流れは早い八十路越す

歳月も若く見えておどてられ

歳が深い悲しみ埋めて

コーヒのの違いがわかる歳になる

三つくらいの子なら神も目をつむる

物忘れ歳のせいにはしたくない

お月さん何歳だろう美しい

高槻川柳サークル卯の花 川島風云児報

震災で心が通うボランテア

紫陽花の寺に嬉しい茶の心

もつ一人の私が何故か怖くなる

カナリアがオウムの怖さ知りつくす

怖いもの見たさに合鍵を作る

怖いのもこわくないのも父と母

怖いのは妻が無口になったとき

悪玉がはびこる怖い平和はけ

涙壺不意に別れに備えとく

世帯末不意にサリンが顔を出す

不器用で不意に本音が出てしまふ

不意の客巧みにさばく台所

不意に聞く筋書きに無いアロポーズ

暴投も捕逸もあつた夫婦道

俊路

佳子

由多香

宏章

登美

崇

浩

幸次郎

真一

みさを

孝子

艶子

一石を投げ成り行き見極める

自縛から抜ける疑問符投げてから

匙投げる前に糸口見つけよう

木簡出土歴史に謎を投げかける

飽きやすいたちで私をすぐ投げる

匙を投げると思外に先が見えてくる

その謎が僕に解けない投げキッス

勿体ない口ぐせにして老母が病む

神さまは見えないところ見ています

冷笑を背にこだわりの道を行く

自信喪失ゆつくり歩くことにする

蟹飯をバスで食べさせ旅終る

富士山が痛い泣いてる裾野

風向きの悪い日だから石を積む

極楽と言ふ字が目立つ喜寿の坂

岬川柳会

八十田洞庵報

ハイキング五感がフルに回り出す

背なの子の寝息が重いハイキング

賞味切れすくには捨てず食べもせず

デザートへ行くから財布換えて出る

不景気で開けた財布の口しめる

休日はあるあなたの財布あてにする

脱税をする程景気よいらしい

景気悪くて薬あれこれ飲んでる

神頼み景気が変わるおさい銭

開き直つてどうころんでもよい景気

景気つけと言つてはふる酒の量

ご祝儀も景気の波に左右され

庸佑

澄子

稲子

萬的

ルイ子

武庫坊

重人

マツエ

東雲

英一

艶子

白漢子

秀夫

求芽

諷云児

みやこ

白光子

年子

月子

安孝

とみ

洞庵

幸

よし子

大茂津

叔子

勇

不景気に嫁の苦勞が付きまとい  
不景気でも若い夫婦は仲が良い  
ハイキング可憐な花にはげまされ  
夫婦してよたりのハイキング  
ハイキング帽子と靴に浮かれ出る  
ハイキング出来る内にと足鍛え  
失業のババの部屋だけ無い我が家  
魚河岸の競り合う声が景気呼ぶ  
商人が不況で節度見失う  
景気よい声につられて無駄も買う  
その舌で不景気三寸転がせぬ

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

卓上に金の成る木があるけれど  
急ぐからいびつになつたゆで卵  
遊ぶとはなんと素敵な言葉でしょう  
子が育ち残り少ない蜜の壺  
急かしてもわたしはわたしの私語  
居ねむりを麻原逮捕におこされる  
爛徳利戸棚のすみで遊んでる  
遊ばせておくには惜しい鬼瓦  
ときめいた春過ぎ水は石を打つ  
飽食の猫がネズミを遊ばせる  
聞法へ居眠り極楽浄土なり  
口笛で小鳥と遊ぶ五月かな

倉吉川柳会

谷口 次男報

壺に入つてすつたもんだを眺めている  
不完全燃焼骨壺に納まらぬ

理由なし暗いところが似合う壺  
一粒の御飯教えを守り抜く  
百倍の薬一粒きいてくる  
大粒の涙割って出る  
粒選りの林檎一番前に出す  
飯粒に謝りながら捨てている  
胃カメラが見つけた粒で眠らせぬ  
小粒でもピリリと辛い隣の子  
粒選りを揃えています酒場らん  
訣別の握手冷たい手で包む  
逢う度に包み隠したポロポロり  
青葉若葉に包まれてちよつと昼寝  
親心そつと包んでやる小銭  
さりげなく真相包む深い霧  
頑固者風呂敷包み提げてくる  
風呂敷に法螺を包んでやってくる  
包んで出すほどのお金ではありません  
五枚包んで思案して二枚抜く  
風呂敷の中が気になるご挨拶

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

心情に負けず打つべき釘は打ち  
熟年の歌う軍歌に寂があり  
熟年となつて悠々朝の風呂  
赤いシャツ着てもヤングに戻れない  
解答はヤングがきつと出すはずだ  
情けばかりあり肝心の金がない  
熟年のヌード週刊誌が売れる

次男 雄々 寿朗 小生 独歩 柳風 智子 ともお 御前 美智子 苦句 玲子 和枝 秀峰 秋女 かつみ 石花菜 完司

松盛 博丈 寿満湖 喬水 早苗 玲坊 小生

こ一番妻の度胸が物を言う  
人情がからんで闇が深くなる  
熟年の部屋は月に覗かせぬ  
ツンとした鼻も情けにゆれ出した  
おじさんと呼ばれて秋が身にしみる  
母ちゃんの情け小つちやな紙包み  
表情が豊かに見えて泣きを見た  
これからが熟年窯に火を入れる  
度胸だけで食えぬと知つた処世術  
ケラケラと薄情おんなよく笑う  
情けなや脳がさつぱり働かぬ  
残り火が度胸の風に煽られる  
人情も薄れて塀が高くなる  
酒好きのヤングが母を困らせる

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

お人好し丸められては使われる  
大声で母が迎える過疎の駅  
お互いに悪友と言う仲の良さ  
コツコツと金の草鞋で髯採し  
こつこつと生真面目にきた父の靴  
地ビールで乾杯をする同期会  
気の合った仲間で作れるコント劇  
鍵穴に夫婦のコントはめてある  
世話好きの伯母がコントを持ってくる  
地の下の声を聞いている三ノ宮  
建ててから庭に再起の声響く  
お悔みの声はひそかに喉の奥  
いつ死んでもの声賑やかなボックリ寺

仙岳 柳風 喜与志 宗光 季芳 幸子 勝見 螿 雄々 ともお 玲子 よしえ 弘朗

末貞一 まさみ 向西 澄子 一閑 六浦 美智子 鹿太 昌子 十四郎 勇次郎 弘治

大声が追っかけて来る忘れ傘  
母とする電話はいつも涙声  
追伸の一語に本音のぞかせる

むらくも川柳会

藤井 明朗報

生みたての卵一つに温められ  
知らぬ間に妥協している夫婦  
新鮮な発想子等にもらう古い  
地球いま次から次と騒がしい  
風呂上り素肌に着衣心地よし  
辻褄の合わぬ男が騒ぎ出す  
冷戦へ妥協の妻はお茶を入れ  
妥協してさあ乾杯と薄く拍手  
妥協して雲行き少し眺めてる  
お隣の何か騒ぎが気をもます  
大騒ぎ国をゆるがすオウム教  
孫が来て祖母とおしやべり騒がしい  
友情を結ぶ異国の肌のいろ  
五分と五分妥協で丸い水やかさ  
森羅万象数えきれない和やかさ  
手術後の水が一番よまかった  
山清水飲めば仏の声を聞く  
一先ずは妥協の線で納めとく

川柳藤井寺

高田美代子報

夢之助 紫香 正治 秀子 仲子 朝子 美恵女 義良 一葉 幸夫 島子 定子 績子 ヤス子 藤子 三津江 幸子 ゆき子 明朗

宗一 和樹 修六 みよ子

夫には言えぬ溜息ひとつある  
思案より先に溜息出て仕舞い  
ため息で落としてみせる花の首  
ふと漏らす溜息を消すコップ酒  
溜息をついても乳房張ってくる  
限界を勇退として送られる  
限界と言わずに白い旗を振る  
晩学の限界知った赤いペン  
限界を何度か超えた漂流記  
限界へ挑む若さが眩しくて  
極楽の坂でエンマに招かれる  
パスポート未だ取れません極楽地  
極楽の切符へ聞魔領かす  
この世での極楽飲んで膝枕  
極楽はこの世にあると思います  
極楽切符ポックリ寺まで予約する  
わたしには無理極楽は狭い門  
ざんげして極楽行きの船に乗る  
ポックリと極楽願う枯れすぎ  
極楽は湯上りビール冷えている  
極楽と地獄さまよう夢をみる

富柳会

池

森子報

亡母さんに食べさせたくて作る寿司  
安らぎの樹に包まれて愛を積む  
青写真描いてひととき住んでいる  
前髪を撫でて人形出来る上がる  
頂点の怖さを知らぬネギ坊主  
逃げ道を作ってくれた恩返し

花梢 史郎 和子 恒雄 正一 昭子 悦子 扶美代 かつみ 絹子 美代子 三郎 吸江 志洋 キミ子 智久 一屯 愛子 ハツエ 敬一 敦子

鐘造 冬虹 晋

試作品ばかりが溜まる雨の部屋  
回復の糸口探す手まり唄  
もたついた後は昼寝で回復す  
頼られて置いてなと思っ走り癖  
お守りを置いといて回復待っている  
仏にも鬼にもなれず花作り  
失地回復こそぞとばかり石を置く  
朝寝して欠勤しようか倦怠期  
意中の人出るまで電話作り声  
妻入院枯れた花にも水をやる  
米だけは作る傾きかけた納屋  
物好きが灰色候補好きと言っ  
倅せをもらっ余生の花作り  
母一生父の好みで作る花  
回復をせかす一途な片想い

川柳塔社常任理事会 (8月1日)

▽武庫坊氏の辞任に伴っ会計部長の後任に吐  
来氏、出納事務はダン吉氏が引き継ぐ。  
▽牧洲富喜子さん(西宮市)の新同人承認。  
▽栗名菅主幹追悼句会の反省点について審議  
会計部から収支報告

▽西尾家から寄せられたご芳志は別途積立金  
とし、使途は改めて協議する。  
▽第一回川柳塔まつり記念句会の課題および  
選者を決定。  
▽平成七年度同人総会の議案と報告・提案者  
を決定。

美代子 アキ 宗一 登子 昭水 智久 射月芳 じげお 維久子 花梢 岳人 森子

# 本社 八月旬会

八月七日(月)午後五時半

メンズフアッションセンター

連日、三十五度を超える猛暑の中、八月旬会は八十九名の出席により開催された。はじめに前日の六日、三〇〇号記念川柳大会を予想を上回る参加者により成功させた川柳塔わかやま吟社を代表して、堀端三男氏が同大会への支援に対する感謝のこたばを述べた。

おはなしは板尾岳人氏。栗名誉主幹逝きて八十五日、日本は今や世界一の長寿国と言うが、死ぬまで惚けず、ユーモアのある人生を送る生涯現役の長寿でありたいと、栗先生を偲んだ。さらに堺を代表する風景を撮影するため、健康増進も兼ねて毎朝五時に起きて二時間から三時間にもわたって歩いていますが、堺には仁徳陵を中心に百基以上の古墳があり、歩くたびに町の再発見があつて楽しく、どんなスポーツよりも効果があると語った。

月間賞は小池しげお氏(松原市)に輝く。

(司会―岳人) (記名―美房・シマ子)

(受付―金太・英壬子・寿美)

## 席題「節約」 吉村一風選

節約をしましよ核は捨てましよ核消える日まで節約なし

節約はよそ信用金から出して

節約を説けよ子どもは煙たがる

節約した金海外で無駄づかい

糸屑も粗末にはせぬ老母の指

節約をする程金のない暮し

節約をしても元金が無い

節約をしても会社は黄信号

節約を美德と今の子は言わず

夫婦げんかの声も節約この暑さ

余りものばかりが冷蔵庫に溜まる

節約の手始め夫のアルコール

節約のかがみだ父の作業服

節約も主婦も忘れてカルチャーに

楽しいプラン先ず節約からはじめ

エアコンの省エネなんて無理なこと

地震以後節水の癖つきました

ばあちゃんの節約孫には通じない

節約の手の如き祖母である

賽銭の節約をした夏まつり

節約を口実にする地味な柄

年金に節約の二字迫られる

節約のきらいな嫁と同居する

節約してます牛乳は嚙んで飲む

節約は美德 明治の母がいる  
おばあちゃんだけが節約やかましい

麦ご飯食べ節約でありませぬ  
節約はしない蛍の群れのなか  
あれ以来無駄には使わない蛇口  
あるだけの電灯消して長電話

佳

節約は別 寄附金は惜しまない

節約をしたいが街の灯が紅い

一駅を歩きビールの追加する

節約をして人並みの寄附はする

節約をこりり忘れる大ジヨッキ

美しい人が節約する笑顔

赤札に節約ごころくすぐられ

節約の知らない嫁に慣らされる

節約しない溢れる愛を子に夫に

智子 美子 庸佑 射月芳

射月芳

愛論

重人

希久子

白浜子

欣之

美子

朝子

天笑

寄り添って世間の嵐受け止める  
結納を受けて無口な父になる

宗悟  
楓楽

太陽を受けて育ったゴツホの絵  
地

かすみ

三分が意外に長い空きっ腹  
意外にも定刻どおりバスが来る  
意外性買われ代打に起用され  
一言居士があつさり味方してくれた

哲三  
三男

表彰を受ける小鼻がかゆくなる  
負けた子を母は両手で受け止める

欣之  
鹿太

逆風を受ける日もある風ぐるま  
天

欣之

一言居士があつさり味方してくれた  
遺産分け意外な人が現われる  
全財産持つて歩いていられる  
意外にも鬼が弱気なことを吐く  
意外性あるから僕がおもしろい  
意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

満津子  
白漢子

母という受け皿割れたことがない  
やさしさを受ける遺影の雫する

保州  
三男

陽の恵みまつ赤に受けているトマト  
軸

隆

意外にも鬼が弱気なことを吐く  
意外性あるから僕がおもしろい  
意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

重人  
昭子

身を受けた戦禍を抱いて五十年  
忠告を素直に受けて立ち直る

美幸  
保州

慈愛受けた命を思つ盆の灯よ  
兼題「意外」 岩佐ダン吉選

希久子

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

金太  
笛生

ブラックジョークばかりが受ける寒い街  
ちよつとした情けを受ける旅が好き

楓楽  
紫香

罪意識意外に持たぬエノラ・ゲイ  
隠し場所意外を当てた査察官  
反核の炎意外な程に燃え  
清貧のくらし意外とごみがでる  
思いもかけず夫やさしいことを言う  
傍目には幸せそうな人の過去  
意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

保州  
洋敏

ある受難 籠のカナリア殉職す  
受け止めてくれる胸なら飛び込もう

哲子  
美津留

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

福耳が朝の電話を受けている  
頑固だけ受けついでいる父の血よ

しげお  
典子

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

彼の視線受けて輝き増す私  
受け皿が大きい安堵して眠る

義子  
英子

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

暴言もやんわり受けける京都弁  
懐の深さで君を受け止める

美房  
度

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

受け流すことも憶えた喉仏  
佳

英子  
度

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

水平線 受話器に遠い風を聞く  
仮の世にいくつものな受け受けた掌か

哲子  
たず子

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

可も不可もなく勤続の賞を受け  
寝転べば郵便受けに音がする

吸江  
しげお

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

ふる里の星を両手に受けている

金太

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

お役所のなんと意外な食糧費

楓楽

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

三分が意外に長い空きっ腹  
意外にも定刻どおりバスが来る  
意外性買われ代打に起用され  
一言居士があつさり味方してくれた

哲三  
三男

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

窓際の席も意外にあたたかい  
満点の女とんでもない音痴

天  
欣之

意外にも父が咲かせたゆりの花  
実物は意外に瘦せていたスター  
酒の席 意外な素顔見せられる  
意外性を期待代打を出してみる  
策略の網にかかったのは味方  
意外だったと妻は何時まで言うつもり  
同情をしたら意外な裏話

隆

意外にも妻がしつかり貯めていた  
この人の意外なやさしさに触れる  
インスタントなのに旨いと言う夫  
香典が意外に多い人と知る  
意外ではない慰安婦の叫び声

洋敏

兼題「部分」 土田欣之選

一部分子約しましよ月面の面  
 父の酌ぐ子の酌ぐ酒のいち頁  
 わたしらの悪い部分に似ている子  
 黒字大國部分部分にある歪み  
 真つすぐなベン無視される多数決  
 一部分しか知らず呑気に生きてます  
 夫にないやさしさがあつたこの人に  
 人間ドックで調べています部分品  
 軍人勅諭の一部分まだ覚えてる  
 パートタイマーせつせと夢を温める  
 ためらつた部分で運を見のがした  
 勝者も敗者も暗い部分を持つ戦  
 ある部分だけは赦してあげている  
 意に添わぬ部分が顔に書いてある  
 時どきは謀反おこしている部品  
 当選をしたあかつきと言う部分  
 肩書きがついて訂正する部分  
 日の丸に重たい部分あちこちに  
 一部分種明かしして貰あける  
 謎めいた部分かとしてチャーミング  
 部分的に見えなくなつてきたこわさ  
 良い部分ほめたら息子立ち直る  
 街は薄闇 しあわせ色は一部分  
 一部分未完のままの私小説  
 風景の一部分です 私です  
 亡母おわす部分 心の奥にある  
 検閲で消された文字よ五十年

かずみ 一風 満州 勝美 満津子 度 満津子 磯 文秋 笛生 吐来 東雲 希久子 歌子 紫香 重人 東雲 千秀 みつ子 稚代 英子 みつ子 風云児 路児 哲子 千歩

直系とわかつた顔の部分品  
 翳の部分に疑心暗鬼が溜りだす  
 辻褄の合わぬ部分にあるボタン  
 遠景の部分で炎えるカンナの朱  
 佳  
 手燻りの象を見てきたよつに言い  
 原爆の部分にふれる八月六日  
 わたくしの弱い部分に鬼が棲む  
 負の部分遺憾で済ます腹つもり  
 わたくしの赤の部分乾きだす  
 人  
 忘れたい部分を知っている日記  
 地  
 にんげんの恥部悪友は許し合い  
 天  
 アイバンクその世に残す贈りもの  
 軸  
 錆びついた部分を磨く余命表  
 兼題「とことん」 宮口笛生選

しげお 武庫坊 勇太 たず子 柳宏子 冬葉 金太 美津留 森子 柳伸 天笑 照 欣之

とことんの愛は夫婦で熱いお茶  
 ポケベルにとことん追つかけられている  
 ひとり旅とことん羽根を伸ばしたろ  
 脳みそにとことん見放されそつな  
 とことんまで墮れると神に近くなる  
 鏡磨きとことん自分のぞき込む  
 プレーキを外しとことん付き合つて  
 腹を切るつもりとことん酒を呑む  
 とことんが好き酒飲みの深い仲  
 とことんまで生きて年金とり戻す  
 とことんまで泣けば心が晴れてくる  
 嫁はんにとことん弱味握られる  
 とことんのとことん王手をかけた歩だ  
 最後まで頑張れ絵馬が揺れている  
 極楽でとことんはまる酒おんな  
 ノーモアヒロシマとことん語り継ぐ真夏  
 身の上をとことん聞いて嫌われる  
 短命をとことん鳴くか蟬しぐれ  
 好奇心とことん出して嫌われる  
 とことんまで夫を追い詰めないように  
 親のスネとことんかじつた悔いがある  
 惚れるならとことん惚れてみたらどや  
 見ていようかとことんやたら戻るやろ  
 佳  
 こんな夜はとことん飲んで忘れたい  
 とことんにもつれた結果元の鞘  
 とことん追及すればますます深い闇  
 熱のある人とことん話し込む  
 とことんまでつくす女にめぐり合い

美幸 かずみ 志洋 満生 弥生 みつ子 射月芳 しげお 美津留 たもつ 昭子 洋敏 典子 重人 柳伸 茜 たず子 房子 朝子 シマ子 路児 朝子 風云児 愛論 希久子 天笑 稚代

人

物事がとことん狂う落ち目の日

紫香

地

悔いのない相手とことん攻めてみる

ゲン吉

天

とことんまで追えば傷つく人が出る

三男

軸

とことん粘り九回裏に見せ

笛生

兼題「残念」

橋高薫風選

準備万端 雨に流れる

憲太郎

志半ば柩は肅々と

満津子

気がついたとき間に合わぬよいことは

庸佑

残念なことにわたしに金がない

文秋

残念です身体が従って行けません

磯

紙オムツをしてます残念だけれど

房子

摩周湖に別れを告げて晴れた霧

隆

残業へ港まつりの遠花火

英子

花時計残念な影長く伸び

みつ子

とり巻きが残念がってくれた籤

天笑

残念ながらあなたの名前知りません

三男

残念な結果を知らず役回り

庸佑

残念と言うう外はなしこのガレキ

稚代

残念を見つけている風見鶏

典子

私の一票無駄になりました

保州

残念と遺憾で謝罪したつもり

美房

馬耳東風 核実験をやると言う

正坊

フランスへヒロシマの声届かない

楓楽

解約のできぬ定期を持っている

鬼遊

無死満塁無念残念無得点

三男

負けっ振り心残りのない大差

千秀

顔では笑う惜敗のインタビュー

金太

一点差に泣いた優勝旗のとなり

森子

見も知らぬ他人が残念がってくれ

射月芳

残念会お酒入ると盛り上がる

洋敏

亡父の顔まだほしかった小商い

一風

天神さん済んで浴衣が縫い上がる

柳伸

松頼を聞く築城に洩れた石

鹿太

曼珠沙華あかあか無念なおさら

希久子

残念だが跳ねない毬になりました

磯

濡衣を晴らすことなく逝きました

房子

残念な話はいつても派手になる

歌子

飲めぬのが残念空のコップ持ち

白漢子

熱いお茶飲んで残念切り替える

昭子

この残念 み仏の慈悲かも知れぬ

朝子

人

朝子

残念な時はよそ見をしたくなる

二南

地

二南

残念を養銭箱へ入れておく

しげお

天

しげお

残念は何で負けたか知っている

しげお

軸

しげお

残念残念残念村山さんの眉

薫風

(清記一希久子)

薫風

寝屋川市民川柳大会

とき 11月3日(祝) 正午開場

ところ 寝屋川市立総合センター4F

(京阪寝屋川市駅からバス西①乗場から総合センター前下車すぐ)

兼題と選者(各題2句)

「息」 江口 度選

「帯」 河内 月子選

「力」 岡 良三選

「話」 高杉 鬼遊選

「昔」 森中 惠美子選

「森」 橋高 薫風選

◎席題なし 午後1時出句締切

会費 10000円(秀句に賞状・記念品)

投句 10月31日までに80円切手5枚を

同封して左記へ

〒572 寝屋川市春日町9-9

高田博泉方 川柳ねやがわ

主催 寝屋川市文化連盟

主 催 寝屋川市文化連盟

# 柳界展望

★竹原川柳会は7月15日、

75名が参加して西品寺で第

4回伯峯句碑祭を行った。

四年目の句碑にやさしい

風みどり 石原 伯峯

伯峯の句碑輝けり西品寺

東野 大八

★豊中もくせい川柳会は、

平成6年度のベスト8を決

定、7月17日の総会で表彰

した。順位は次のとおり。

①河瀬芳子・江口明光③

松本ただし④河内月子⑤上

田真柳⑥松川杜的・田中薫

⑧春城武庫坊・田中正坊

★第13回夜市川柳大会は7

月30日、堺市総合福祉会館

で104名が参加して開催され

た。各課題の天位句は次の

とおり。

身から出た錆が沈んでい

るカルテ 三宅 保州

籤を引く神の宿らぬ指先

で 阪本 国公

あめ玉もビンタも食べて

きたおまけ 小西 幹斎

大変と祖父が言うから大

変だ 奥山 晴生

忘却はボトルのなかでよ

みがえる 江原とみお

いい月だ船をしずめてみ

たくなる 江原とみお

荒れそつな妻へあつさり

引きさがる 馬継千代美

風の白ジャズを奪つた少

年透きとおる 中島夢成

大好きな山の裾野に棲ん

でいる 江原とみお

いつまでも下手で先生よ

ろこぼす 矢野 梓

★札幌川柳社は、このほど

新潟県の柳都川柳社と姉妹

提携を結び、交流を深める

こととなった。

★柳樽寺川柳会創立90周年

大石鶴子主宰米寿祝賀川柳

大会は9月3日正午から鎌

倉・建長寺で開催する。宿

題と選者は、建てる―大石

鶴子▽長い―志水剣人▽改

革―尾藤三柳▽伝統―松尾

柳思郎▽灯―渡邊蓮夫、祝

吟1句。

★「川柳塔わかやま」三〇

〇号記念川柳大会は8月6

日、J A会館で一七八名が

参加して開かれた。各題天

位句は次のとおり。

ここが海だったと二十一

世紀 坂部紀久子

どちらかが死ぬまで続く

おままごと 新家 完司

お互いが耐えた気である

嫁姑 青枝 鉄治

恋人を山に預けて火にな

った 河内 天笑

五十年來たねハンカチ借

りてから 河内 天笑

街宣車かなしみの歌垂れ

流し 桑原 道天

▽出版△

「詩いつく戦後―戦後五

十年 今思つ」(詩歌文学

## 新同人紹介

牧 淵 富喜子

―紫香・たず子・いわゑ・みつ子推薦

を収録。

十年 今思つ (詩歌文学

刊行会編・B6判256頁

・価2500円)戦後五十

年をうたう詩・短歌・文な

らから栖原竜太(野村大茂津)

から栖原竜太(野村大茂津)

## 9 月 各 地 句 会 案 内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 閉じる・闇・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-14 春城年代
堺川柳会	7日(木)午後1時から 歩く・罪(共選)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時から 秋風・無駄口・背のび	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
西宮北口 川柳会	9日(土)午後1時半から 腕・返す・悠々・自由吟	なるお文化ホール 阪神鳴尾駅から徒歩10分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
川柳塔 わかやま	10日(日)午後1時から 遠い・突然・友	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	10日(日)午後6時から 火種・煩惱・虫・のど仏	八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
ほたる 川柳 同好会	12日(火)午後1時から リズム・買う・薬	豊中市立釜池公民館 阪急釜池駅西へ150米 〒560 豊中市釜池中町3-10-28 井上直次
南大阪 川柳会	15日(金)午後6時から 渦・苦しい・スリル・尽くす	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸和田 川柳会	16日(土)午後1時半から 秘密・ふところ・弁解・ほがらか	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
東大阪市 川柳 同好会	16日(土)午後6時から 鳥・ノルマ・強い・民謡	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
川柳 ねやがわ	17日(日) 正午から 強気・あご・柱・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から 嘆く・テープ・昔・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(木) 正午から 踏む・記憶・考える・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
はびきの 市川柳 会	24日(日)午後1時から ポスター・二階・困る・予想	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京都 塔の会	28日(木)午後1時から 房・添える・遅刻	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽
富柳会	28日(木)午後1時から ゲーム・遠い・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

## 編集後記

★本誌六月号の水煙抄秀句鑑賞の中で、高瀬霜石氏が「僕の身近にあつてこれはもう放せない、お金以上の価値があると思うものに、①シャワートイレ②電動歯ブラシ③ファックスがある」と書かれていた。義歯の私に②は用がないが、①と③については全く同感だ。

ムコピーに加えて、ファックスが私の書斎の強力な武器となった。ワープロについては大げさに考える人もいるが、大人の玩具と割り切ればよい。高級な機種は使いこなせないから、十万円以下の中級機で十分である。コピー機はどこでもあるが、やはり書斎にあればハガキ一枚でも簡単に刷ることができるといい。

★したがって私のおすすめ品は、①ワープロ②ホームコピー③ファックス④シャワートイレの四点となるが、最近、これに一つの最新機器が加わった。それは電動マッサージ機で、その商品名は明記しない方がよいがとにかく湯上がりに十五分間の標準コースで一日の疲れがすっきりほこされる。★今月から十一月にかけて各地で市民川柳大会が開催される。

(正)

☆料理の辻学園園長の辻勲さんが書かれた一文に「世は健康ブームで、塩分ひかえ目に」という風潮もあつて、うす味が喜ばれるようになった。ところが関西料理は単なるうす味だと誤解している地方の料亭もある。シツカリと味のついていないうす味は、ほけた味としかいいようがない」とあつた。川柳にしても、軽い心配なのは、食べたこと自体も知れぬ。

### ひとこと

#### 「定型の周辺」を歩く

田中薫さんの「定型の周辺」という小文を読んだ。私には、むづかしいことは解らないけれども、五・七・五で育つて来た自分を反省させられる。

昔は下五を「笑うなり」というようにして、五字にしたものだった。今は「老いの坂」「夫婦独楽」「父の樹」のように喩になる言葉が付け加えられているのをよく見る。これも定型にするためというのだか、どうか。永田 曉風

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（11月号）」

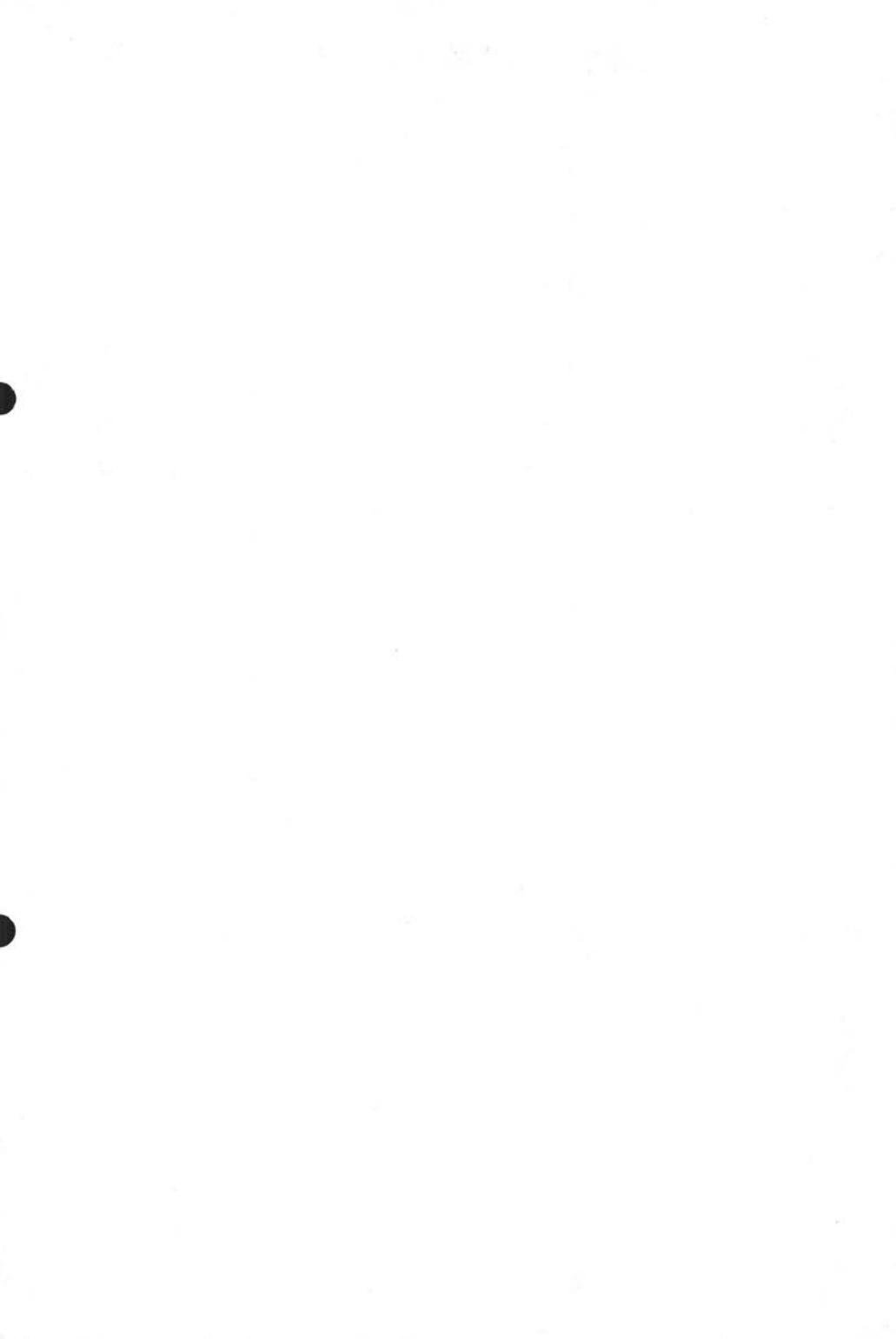
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



## 作品募集

11月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (8句) 橘高薫風選  
 水煙抄 (8句) 西田柳宏子選  
 渺湖抄 (3句) 小出智子選  
 茴香の花 (3句) 八木千代選  
 「 樽 」 西口いわゑ選  
 「 束 縛 」 白石春嶺選  
 「 添える 」 小林妻子選

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友 (誌代半年分前納者)、茴香の花欄は女性に限ります。

12月号  
 課題吟 「 寺 」 「 度忘れ 」 「 植える 」  
 初歩教室 「 飾る 」

## 本社9月句会

とき 9月7日 (木) 午後5時半  
 ところ メンスファッションセンター3F  
 中央区内本町1-1 電06・941・1918  
 地下鉄谷町4丁目下車 (3番出口) 交差点南西角  
 おはなし 野村太茂津  
 兼題 「 出番 」 高須賀金太選  
 「 必ず 」 西出楓楽選  
 「 批判 」 春城武庫坊選  
 「 しばらく 」 河内天笑選  
 「 支え 」 橘高薫風選  
 席題 1題 当日発表 各題2句以内  
 会費 500円

本社10月句会は、第1回川柳塔まつり記念句会として開催

## 夜市川柳募集

第4回 「 命 」 政岡日枝子選  
 ハガキに3句 9月末締切  
 投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺川柳会

## NHK川柳作品募集

課題 「 運 」 河内天笑選  
 ハガキに3句 9月10日締切  
 投句先 〒540-01 NHK大阪放送局  
 「 文芸部 」 川柳係  
 発表 9月23日 (土) 午前11時5分からラジオ第1放送 (予定)

## 西日本文字放送作品募集

課題 「 澄む 」 橘高薫風選  
 ハガキに3句 9月15日締切  
 投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20  
 大手前ウサミビル3階  
 西日本文字放送 川柳係

〒545

定価 六百元 (送料76円)

半年分 四千元 (送料共)  
 一年分 七千九百元 (同)

平成七年九月一日発行

編集兼 橘高薫

発行人 藤原童心社

印刷所 大阪市阿倍野区三好町二丁目一六  
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 545-1691 四番  
 振替 〇〇九八〇一五一一三三六八番

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで  
住居の事なら何でも相談できる店

# TJ 豊津住宅株式会社

本 社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊 津 店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14  
TEL (06) 330-0006(代)  
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21  
TEL (06) 388-6166(代)  
FAX (06) 388-6886



泣いて笑って……  
夜を通り過ぎたら  
また陽がのぼっていた  
男のロマン



オーエスケーの  
紳 士 服

株式会社 **オーエスケー**  
〒540 大阪市中央区南新町1-4-7  
(06) 941-8018